



ソラに
花の
咲く午後

和里かりん

1 図書館に住む少年

—— ここには、この世界のすべての知識がある。

その知識を読み解き、世界の理（ことわり）を見つけ出すことが出来れば。

あるいは...

お前は、お前の求めるものを手することが出来るかも知れない。

「...本当に？それが見つけられれば、俺は妹を...ユノを探し出すことが出来るのか？」

—— 知識を読み解くには、自らも知識を身に付けなければならない。だが、今のお前には、まだまだ学ばねばならぬことが多いな。

「そういうことなら、たった今から、心を入れ替えて勉強するっ。それでユノが見つかるっていうんなら、俺は...」

それは、五年前の出来事。

年に数回しか設定されていない雪の日のことだったから、そのやり取りは、未だ鮮明に彼の記憶に残っている。おまけに、彼はこの日、生まれて初めて雪というものを見た。

だから、なおのこと。その始まりの日のことは忘れない。

その日から、『そこ』が彼、霧月セイヤ（むつきせいや）の家になった。

そこ —— それは一般に『図書館』と呼ばれる場所だった。

「おはようございます」

いつもの時間 —— つまり、始業三十分前。

いつものように紺のブレザーの制服に、長い髪はきっちりと結び上げた格好で、うっすらと、でもしっかりと化粧をした顔で、二妃クルミ（にひくるみ）は図書館の事務室に入って来た。

「ああ、おはよう」

不動ハジメ（ふどうはじめ）は、淹れたばかりのコーヒーに口を付けながら、パソコンで今朝のニュースをチェックしていた目を、一瞬だけ彼女の方に向けて挨拶を返した。

ハジメの気のない様子に、クルミは軽くため息をつくのと、自分のデスクに座って今日必要な書類を並べながら、その内容の確認を始めた。

—— ルージュがピンク系から、淡いローズレッドに変わったか。グロスは1割増しってとこだな。制服も、一見、きちんと着ている様でいて、スカートの丈が微妙に短くなって、と。

いつものように無表情でパソコンの画面をスクロールしているハジメの口元が、わずかに緩んだことにクルミは気付いていない。

—— つまり、誘ってんのか...健気にも。

まあ、そういうのは嫌いじゃないから。たまには、ご機嫌を取っておくか、と思う。

「クルミ、ルージュの色、変わった？」

モニター越しにそう声を掛けると、どこかつまらなそうにしていたクルミの表情が、一瞬で明るくなった。

—— 分かりやすっ。

思わず噴き出しそうになったのを、ハジメは慌てて口元に手をやって誤魔化す。

「うん。少し大人っぽい雰囲気にしたみたの...」

「ああ、そっか、今日、誕生日だったよね？」

そんなデータは勿論、きっちり頭に入っていたが、ハジメは、さも今気付いた風に言う。

「じゃあ、今日は、仕事の後、彼とデートとかなんだ？」

「いえ...そういう予定は特に...ありません...けど...」

—— けど？

クルミはそこで言葉を切って、ハジメの顔を見た。その顔には、誘ってくれないかな、と書いてある。

—— まあ、そういうことなら。ご褒美にアメをあげないこともないかな。

「じゃあ、今日は昼、外に食べに行こうか？」

「うんっ」

そんなにあどけない笑顔を見せられると、微妙に罪悪感を覚える。まだまだピンクが似合う年頃なのに、そんなに背伸びをしなくてもいい ——

まだ十九で、たいてい実年齢にプラス五才してみられる自分に合わせて、そんなに急いで大人になることもないと思う。

—— お前はまだ、そのままの十八でいい。俺は多分、その方が嬉しい...

「じゃあさ、その代わりに...と言ってはなんだけど、上で眠り呆けている奴を起こしてきてくれない？」

「って...ええ〜？」

可愛い顔があからさまに不満の色を浮かべる。

「私は、セイヤくんの目覚まし係じゃないんですよ〜。もうっ。十七にもなって、立派な社会人のくせに、なんで朝一人で起きられないんですか〜」

「う〜ん。なんでだろうねえ。毎晩遅くまで、書庫に籠って本を読み漁ってるせいかなあ...」

「信じらんないっ」

「お昼、特別おいしいお店に連れてってあげるから、ひとつお願いされてくれない？あいつ、今日、師官（しかん）の見習い研修最終日なんだ。遅刻すると、見習い卒業できないかも知れないし...ね、クル〜ミちゃんっ」

「...分かりました」

クルミは渋々ながら立ち上がると、部屋の隅に置かれていたハンドベルを手に事務室を出て行った。

しばらくして、館内に盛大なハンドベルの音と、セイヤの叫び声が響き渡った。そのタイムラグから察するに、クルミの移動速度が尋常でなかったことが伺える。そのイライラの矛先を全て向けられたセイヤには同情を禁じ得ないが、そこは自業自得なのだ。仕方がないで済まされる話だったことにしておこう。そう思いながらコーヒーを口に運んだハジメは、それがぬるくなってしまっていたことに気付いて、顔を顰めた。

セイヤは五年前から、この図書館に住みついている。
いや、棲み付いている、と言った方がいいのかも知れない。

五年前、ロクに読み書きも出来ない子供だった彼は、ハジメの父である不動シュウヤ（ふどうしゅうや）に引き取られた。その少し前に、事故で両親を亡くし、妹と生き別れたのだと聞いた。シュウヤと彼との間に、どんなやり取りがあったのかは知らない。だがその日から、学者でもあるシュウヤの手ほどきを受け、彼は目を見張る様な勢いで勉学に勤しみ、行政府直轄の養成学校に入学を果たしたのみならず、かなりいい方の成績でそこを卒業した。そして、このポーラエーカではエリートコースとされる、行政府の四つある師官職のひとつに合格した。

ハジメの父の肩書きは、ポーラエーカ行政府公文書館館長である。

つまり、この図書館は行政府の公文書を収蔵している図書館であり、この世界——オクトグランの有史以来、千数百年に及ぶ膨大な歴史資料の保管庫でもある。当然のことながら、一般には公開されておらず、学者と呼ばれる職種のものにのみ、厳しい閲覧規制を設けた上で公開されている。もちろんそれも、所蔵する資料のわずか数パーセントに過ぎない。

そのわずかに公開されている資料の置かれている書庫を、寝袋と懐中電灯をお供にして、セイヤは順繰りに巡って中の資料を読み漁っているのだ。数パーセントとはいっても、それでも書庫の数は相当なもので、彼は数年掛かって、ようやく二つ目の書庫に辿り着いたところである。

——俺は、この世界の理を見つけなきゃならないんだ、と。

到底正気とは思えない理由を掲げて、毎夜、本を枕に眠る酔狂な...弟。義理とは言え、自分の弟になったこの少年の性格が、ハジメには今ひとつ理解出来ていなかった。

ただ、別の理由で、時折書庫を探索するハジメにとって、彼は少し厄介で煩わしい存在だった。

——俺の邪魔だけはしてくれるなよ。

俺たちがいつまでも、仲のいい兄弟でいられるように。

行政府師官のスカイブルーの制服の上着に手を通しながら、目の前の廊下をセイヤがあたふたと走って行く。クルミの開幕ベルから、十分もたっていない。

「一体、どこまで時短記録更新するつもりなんだろうね...」

そんなハジメの声が聞こえた訳でもないのだろうが、セイヤが思い出したようにこちらを振り向いて、笑顔で手を振った。

「急がないと、遅れるぞ」

大きな声でそう言ってやると、たちまち血相を変えて飛び出していく。

そんなに本が好きなら、司書にでもなれば良かったのだ。この俺の様に。しかし、そうなったらなつたで、自分はやはり鬱陶しく思うのだろうなと思い、ハジメは苦笑する。

——だからなのか。

セイヤは、相手との距離の取り方を心得ているのかも知れない。自分が司書になったら、ハジメが良い顔をしないでだろうと、そう思ったのか。そこは養い子ゆえの遠慮なのか。それは分からない。ただ、自分はセイヤという弟の存在を掴みかねているのに、一応は兄である自分が、そんな風に見透かされたのかも知れないという思いは、ハジメの気分をいささか重くした。

図書館のエントランスに続く廊下を、セイヤは猛スピードで駆け抜けた。無論、本来は走ってはいけない場所なのだが、人がいないのを良い事に、遅刻回避のために最大限の努力をしているところである。幾つもの柱が、次々に背後に流れていく。

—— 18、17、16、.....

走りながら、こんな時でも毎朝の習慣で、その柱の数をカウントしている。最奥の柱が30本目。そこから、入口に向かってカウントダウンを始める。

―― 14、13、12と。

急がなければいけない筈の足が、そこで止まった。入口からだど丁度、12本目と13本目の間になる。柱の影になった壁に、少女の壁画が描かれていた。

「ユノ...行って来る」

セイヤの言葉に、壁に描かれた少女が微笑みで答える。いつもの様に、その笑顔を確認して、セイヤはそのままエントランスの回転扉を潜り抜けた。

その絵は、セイヤがここに来てまだ間もない頃に、妹に会いたい一心で描いたものだった。彼は、オクトグラン第六の都市であるシャトゥラーラから、父親の仕事の関係でこのポーラエーカに移って来る途中、事故に遭遇した。引越しの荷物も妹と共に行方不明で、元の家も引き払ってしまっていたから、彼の手元には写真の類など何ひとつ残されていなかったのだ。身一つで助け出されて、ここ、第一の都市ポーラエーカの保護施設に送られた。その後、父の友人だったという、不動館長に引き取られてこの図書館に住むことを許されたのだ。

館長には、セイヤより二つ年上のハジメという息子がいた。セイヤは元々、人見知りをする方ではなかったし、友達を作るのも苦手ではなかったが、あまり人を寄せ付けたがらない性格のハジメとは、打ち解けるまでにだいぶ時間が掛かったのだ。だから時折、失ったものを思って、無性に寂しくなると、セイヤは人目を避けて、図書館のあらゆる隅っこに身をひそめた。

この柱の影も、そんな隅っこのひとつであったのだが、ある時、たまたま白く寒々しい漆喰の壁を指でなぞったところ、手が汚れていたらしく、そこに薄く黒い筋が付いた。何も考えずに、その白い壁に二度、三度と指を走らせるうちに、彼の指はいつの間にか、そこに妹の姿を写し始めていた。

その作業に無心になっていると、寂しさが紛れる気がして、彼はやがて木炭を持ち込み、そこにはっきりとした輪郭を描き始めた。そうなれば、そこに色を置いてみたくなるのは、もう自然の流れで、こんな所に落書きしたら、怒られるんだろうなと、そう思いながらも、次第にそこに浮かび上がる妹の姿に、作業を中断する決心も付かず...

コトが露見したのは、そこに美しい壁画がすべて完成した後だった。

その報告を受けた館長は、初めこそ呆れた表情を見せたが、その絵の出来があまりにも素晴らしかったので、絵は消されることなく、そのまま保存されることになった。そして、その出来事がきっかけとなり、館長は彼にひとつの目標を提示した。

ポーラエーカ政府の師官 ―― 平たい言い方をすれば、役所の専門職になるのだが、そのひとつに『地図師（マップメーカー）』と呼ばれる職種がある。絵を描くのが好きなのであれば、それを目指してみたらどうか、と。師官と呼ばれるスペシャリストは、都市屈指のエリートであり、簡単になれるものではない。だが、それもまたユノと再会する為に必要な過程なのだとわれれば、セイヤが挑まない理由はなかった。

そして彼は、『地図師』という称号を手に入れた。

―― 今はまだ、その上に『見習い』という冠は付いているのだが。

しかし、それも今日で終わりだ。今日の研修で、実務演習を終えれば、晴れて一人前の地図師である。

「っしゅあ、行くぜえっ」

駐輪場から愛車を引っ張り出して跨ると、気合いを入れてペダルを踏み込む。セイヤの愛車は緩やかな坂道をゆっくりと、そしてすぐに加速を得て、風を切って走り始めた。

ちなみに、それが自動二輪車ではなく、自然に優しい方の二輪車（要するに自転車）であるのは、この世界のエネルギー事情によるところが大きい。

この世界——オクトグランと呼ばれるこの世界には、八つの都市が存在する。

それらの中核となる第一の都市。

全ての都市の行政を担う行政府が置かれているのが、このポーラエーカである。

全ての都市の中で、最も規模が大きく、人口も多い。残る七つは、産業プラント都市として、エネルギーの供給や、食料を始めとする様々な資源を生産供給する役割を担う。

記録によれば、千数百年の昔、このオクトグランは宇宙に浮かぶコロニー群だったのだという。それはもう、今では伝説に入る類の話になってしまっているのだが、かつて、ドゥルヴァという名の惑星に住んでいた人類が宇宙への足掛かりとして、その衛星軌道上に建設したコロニー。

実はそれがこの都市の始まりである。

無限の宇宙への旅立ちを夢見ながら人々は、ポーラエーカを核に、その周辺に花卉のように資源供給の為に産業プラント都市を七つ配し、宇宙に小さな希望の花を咲かせた。

しかし、彼らの希望に満ちた営みを思いもしない方向へ押し流す悲劇が、やがて起こる。原因は未だ解明されていない。空間の変異とでも呼ばばいいのか、彼らの花は、突然にして他には何も存在しない亜空間に飲み込まれてしまったのだ。

気が付いた時には、都市は分断され、プラント群はどこかへ流され所在不明という事態に陥っていた。勿論、元の空間に戻ることも出来ず、母星であるドゥルヴァとの交信も途絶え、彼らは彼らだけの力で、そこで生きていくしかないのだという現実を付きつけられた。

——絶望的隔離。

歴史書を開くと、最初の項目に書かれているその言葉の経緯は、そんなところである。

その後、オクトグランの人類は、多くの時間と多くの人命を失ったのちに、ようやく、亜空間を不規則に移動しながら、さ迷っていた七つのプラントの捕捉方法と、そこへの移動方法を確立することに成功し、ポーラエーカの再建を果たした。

つまり、この世界は隔離された、閉じられた世界。

千数百年の昔から、限りある資源の総量は決まっていて、使い続ければ無くなるだけという現実の前に、エネルギーのリサイクル方法が、かなり早い段階で確立した。元々、宇宙空間において、完全自立を目指して作られたコロニー都市であったから、永久機関の類と物質の完全循環システムは配備されており、それがオクトグラン存続の命綱になった。

それでも、エネルギーの消費に関しては、多くの規制が設けられている。一般の人間に関して言えば、社会に対する貢献度によって、その配分量が決められている。その辺の事情を考慮すると、セイヤのような見習いクラスには自転車あたりが妥当だという結論に至る訳である。

軽快に自転車を走らせて、街の中心部へ向かう。人の数も建物の数も格段に増えていく。そして視線を上方に向ければ、そこにはもうポーラエーカ行政府の高層ビルが見えた。この世界の中心という、シンボリックな意味合いも持つその外観は、堅牢にして壮麗。見る者を例外なく圧倒する言い様のない威圧感を感じさせる。

——ここは、人の命を左右する場所だ。

任官式で師官章と共に授けられた言葉は、未だ緊張感を伴って、セイヤの中に刻みこまれている。自分たちがミス

すれば、それはそのまま、誰かの命を奪う結果を生むのだ。

かつて、自分が家族を奪われたように...

駐輪場に愛車を止めて、セイヤは改めてその入口の前に立ち、自分の上に押し掛けて来るようなビルを見上げる。彼方に見える空は、今日は晴天の設定だ。光を孕んだその蒼さに、目を細めて正面に向き直ると、両手で頬を叩いて気合いを入れる。

「よしっ。今日も頑張るぞっと」

未だに、ここで気合いを入れないと、その緊張感に飲み込まれそうになる。半年に渡った研修も、もう今日で終わりだと言うのに。いつになったら自分は、この緊張感から解放されるのか。あるいは――解放されない方がいいのか。

いつも以上にナーバスになっている自分に、思わず苦笑いしながら、セイヤは入口に吸い込まれて行くスカイブルーの波に身を投じた。

2 エリート of 聖域

タイムカードのレコードでは、ぎりぎり遅刻ではなかったが、地図師室に着くとすでに、見習いの教育官をしている崎杜（さきもり）師長補が、セイヤのデスクで待ち構えていた。

「お、はようございます...」

同じ研修を受けている同期の風花ミツバ（かざはなみつば）が、セイヤの姿を見つけるとたちまち眉間に皺を寄せる。

「おっそ〜い」

「タイムカードを押した所で、力尽きちゃいましたかね」

そう言いながら、自分に向けられた崎杜のこやかな笑顔は、嫌みなのか冗談なのか判断が付かない。

「いえ、そういう訳では...」

「セイヤっ」

ミツバが彼を睨みつけた。

「あ、っと。どうも済みませんでしたっ」

言って勢い良く頭を下げると、師長補の独特のゆるんとした気配と共に、

「始業十分前には、居て下さいね」

という言葉が届く。

「はい。済みません。明日から気を付けます」

ガミガミと怒鳴られる訳ではないのに、この師長補に言われると妙に堪えるのは何故だろうと思う。

「それでは、今日の実習の説明をします」

その一言で、セイヤはまたいつもの緊張感に包まれる。

「ご存じの通り、今日は、『予報日』です。よって、最終実習は、軌道予報室で行います」

―― 軌道予報室。

すでに予告はされていた。しかし、実際にその単語を聞くと、改めて身が引き締まる。

そこは、この世界の中核である。世界を動かす、一握りの人間にしか立ち入ることが許されない特別な場所だ。

「君達には、実際に使われているシステムを使って、地図を描いてもらいます。まあ、システムの動かし方については、さんざん行ったシュミレーションと変わりませんから、それ程難しく考える事はありません。ただ...」

―― ただ...？

「適度な緊張は必要ですが、緊張しすぎはいけません。過度の緊張は、平常心を奪い去ってしまいますからね。技術の未熟さよりも、精神の未熟さの方が、事態を悪化させる要因になるのだと。それだけは、覚えておいて下さい」

「「...はい」」

セイヤとミツバが声を揃えて返事をする、師長補は二人を安心させるように穏やかな笑みを見せた。

「それでは、行きましょうか」

師長補がそう言って歩き出す。それに引率されるように、セイヤとミツバが続く。

「...う〜何か緊張するよね」

ミツバがセイヤの袖口を引っ張って、ひそひそ声で言う。

「何だろう、ああ、そう...何だかこれ、予防接種を受けに行く前、みたいな感じしない？」

注射が怖いなんて、子供みたいだ。そう思ったら、自然と失笑が漏れる。

「お前、緊張感なさすぎ」

「だからっ、緊張してるんだって言ってんの」

自分が笑われたことに気付いて、ミツバの言葉が尖る。

「じゃ、手でも繋いでてあげようか？」

「ばっ...」

―― その続きは、馬鹿野郎...？いや、こいつのノリだと、ばっかじゃないの...か？

果たして、セイヤの隣を歩く乙女の心の叫びの正解はといえば、
—— ばっか、んなことしたら、余計に緊張すんだろうがっ！

だったりする。

霧月セイヤ、乙女心検定は残念ながら不合格。

「あんたのその緊張感のなさ、どうにかならないの？」

「緊張はしてるよ。いつでもね」

緊張はしている。ここにいる間はいつも。ここは、人の命を左右する場所だから。そんな風に言われて、気が抜ける筈がない。

「.....」

「ん？」

いつの間にか、マジ顔になっていたセイヤをミツバが凝視していた。

「何だよ？」

「あ、いや...そんなシリアスな顔も...」

「するのか...？ ったり前だろうが。こんなに勤勉な人間を捕まえて、緊張感ないとか言うお前が間違っている」

「勤勉な人間は、遅刻なんかしないのでは？」

「だから、遅刻じゃねえって」

「レコード上はでしょ？」

「...だから...遅刻じゃ...ない...し」

何だか不毛な会話だ。

そう思いながらこの時、彼は帰りに目覚まし時計を買いに行こうと心に決めた。

一方の乙女...それは恐らく、『恋する乙女』。その心の声。

—— あ、いや、そんなシリアスな顔も、カッコイイ。とは、口が裂けても言えない。よな～～
どちらにしろ、両者、緊張感の良い具合にほぐれた様である。

【 軌道予報室 】

扉横にそう書かれたプレートを見て、セイヤは高まり掛けた緊張を、一度大きな呼吸をしてやり過ごす。崎杜師官補が腕のIDをスキャナーにかざすと、ピッという電子音と共に、扉が開いた。

まず目に飛び込んで来たのは、壁一面に表示されている無数のモニター画面。そこには世界中から収集されるさまざまな情報が、オンタイムで表示されている。部屋の中では数十人の師官たちがそれぞれの場所でコンソールを絶え間なく操作しながら、目の前のモニター画面を食い入るように見据えている。

セイヤは室内を一通り見回すと、壁面のモニターの一つに同じような画像が八つ並んで表示されている動画に目を止めた。それは、各都市に設置されている『ゲート』と呼ばれる巨大な物質転移装置のリアル画像のようである。先人が、多くの困難の末に作り上げた装置——これにより、オクトグランでは都市間で物資の移動が可能になったのだ。

あの時——セイヤはこのゲートのひとつで家族と離れ離れになった。

シャトゥラーラのゲートからポーラエーカへ送られた筈の貨客コンテナは、あるものは別の都市のゲートへ激突して大破し、あるものは恐らく亜空間に放り出されて、そのまま行方不明になった。破損したり、行方不明になったコンテナは数百にも及び、死者は数百人を数えた。行方不明になったコンテナのうち、人を乗せていたものはふたつ。恐らくユノはそのうちのひとつに乗っていた。そしてこの事故は、オクトグラン有史以来、もっとも多くの犠牲者を出した大惨事となった。

その原因は、転移座標の計算ミスとも、都市の移動軌道の予報ミスとも言われたが、結局、原因の特定は可能性の域を出ず、最終的な発表でも、はっきりした原因は明言されなかった。

亜空間に浮かぶ都市は、不規則に移動を繰り返し、その位置を変える。それが特定の周期で、同じ位置に留まる時期がある。通常、ゲートの使用は、都市周辺の空間が安定するその時期に合わせて行われる。

その時期と、都市の留まる位置を膨大なデータ分析による計算によって割り出すのが、

『軌道予報師（フォアサイト）』と呼ばれる師官たちである。

更に、その割り出された座標に合わせて、ゲートの転移装置の起動プログラムを構築するのが、

『刻印師（ラインメーカー）』と呼ばれる師官たちだ。

ちなみに、ラインメーカーという呼称は、彼らの作業によってモニター上に都市同士を繋ぐラインが書き込まれて行く様子から、そう呼ばれるようになったらしい。

都市のリンク予想図が完成した所で、セイヤたち『地図師（マップメーカー）』の仕事になる。

ラインメーカーの繋いだ都市それぞれの位置を考慮しながら、最も効率的な物資の移動方法を考えるのである。各都市から送られて来る物資のオーダー表を元に、物資を効率よく各都市に振り分ける。モニター上の地図に、物資を表す色とりどりのブロックを埋め込みながら、各都市に送る作業指示書を作成するのだ。

ところで、物資の移動が無事に終わると、古来からの慣例として、この時作成された地図は、アナログデータに変換され...つまり、手書きで紙に写し取られて、公文書館に保管されることになっている。文字通り、実際に地図を描く。だから、彼らは地図師という名で呼ばれるようになった。

その地図には、記録上必要なデータの他に、本来は必要のない装飾の類が描き込まれるというのも長く続く伝統で、地図師に絵心が必要だと言われるのは、実はそんな理由からだ。その装飾の腕も、地図師としての評価に影響したというのだから、昔の人は遊び心があったものだと思う。実際、そうして描かれた昔の地図には、今では芸術的な価値も付加される程に、絵画としても完成度が高いものが多い。

さて、こうしてフォアサイトによってはじき出された予報日までに、都市のリンクと物資の移動予定表は完成する。あとは、その日時に、『門管理師（ゲートキーパー）』と呼ばれる師官たちが、ゲートを適切に操作して、指定された

通りに物資の移動を行うだけだ。全てが予定通りに進行すれば、都市は次の予報日まで、平穏な日常を謳歌することが出来る。だが――

かつては当たり前のように、何事も無く行われていた、当たり前の行為。しかし、それは次第に、少しずつではあるが確実に、行う回数を重ねていくごとに、その精度が下がり始めた。始めは、数十年に一度の失敗だったものが、やがて数年に一度になり、今では年に数度という割合で頻発する。

フォアサイトのはじき出す都市軌道の予測に、毎回ズレが生じる。つまり、予報が当たらないのだ。その誤差は修正可能な場合もあれば、手のつけようのない誤報となる場合もあるという様にランダムに発生し、毎回、彼らの神経をすり減らしている。

そして、事の始めである予報が外れるということは、当然、それを元に行われる作業はすべて修正もしくは、やり直しということになる。

――今回は大丈夫か？

ほぼ二、三か月に一度といった割合に訪れる、その『予報日』。

この行政府は特別の緊張感に包まれる。

3 予報エラー

本来、事前作業だけでいい地図師が、予報日にこの軌道予報室に詰めるようになったのは、昨年からのことだ。外部には公表されていないが、実はこの所、予報がことごとく外れている。そんな事情から、研修の最終段階で、元々は設定されていなかった軌道予報室研修が追加されたのは、今年から。つまり、セイヤたちがその最初の研修者ということになる。

直前のモニタリングで、軌道のズレが発覚した場合、その場で全ての修正を行う為に、ラインメーカーと共にこの部屋に待機しているのだ。

指定された移動日時に、一斉に作業を行わないと、予定された物資の全てを移動することが出来ない。もし、その時間内に間に合わなければ、必要な物資を受け取れなかった都市が出る。そうなった都市では、次の予報日まで配給制限や生産制限が行われ、不自由な生活が強いられることになるのだ。

—— ここは、人の命を左右する場所。

それは、決して大げさな言葉ではないのだ。先のような事故が起こらなくても、制限される物資が、食料や医療関係のものであれば、それで命を落とす人が出る可能性が無いとは言えないからである。

ここにいる全員が、そのことを十分に理解している。だから、否応なしにその場の空気は緊迫感に包まれていく。所定のコンソールにセイヤはミツバと並んで座る。すると、崎杜師長補は二人の後ろに立ち、その肩越しに都市の軌道をリアルタイムで表示しているモニターを覗き込んで、ぼそりと零した。

「...ああ。今回も微妙な感じかなあ...」

「それって...」

「うん。修正入ると思うから、覚悟しといてね」

「ええっ...」

隣でミツバが、他には聞こえない吐息のような悲鳴を漏らす。

—— うわ～マジかよ...。

モニター上で、刻々と描き出される軌道線を眺めてセイヤは顔を顰める。初っ端でいきなりこんな場面に遭遇するなんて、ツイてない。

「最終計測入ります」

フォアサイトの師官の声が、フロアに響いた。

「カウント5、4、3、2、1...」

「軌道確認...」

瞬間、水を打ったようにその場が静まり返る。

そして ——

「予想軌道から10%の誤差を確認」

その声に、一斉にフロア内に失望のどよめきが広がった。

「各都市の最終座標確認、急いでっ。修正データをセンターコンソールにそれぞれ転送！」

すかさず予報室主任の襟章を付けた若い女性が、良く通る声で指示を出した。

それに応える形で、そこにいたオペレーターが一斉にコンソールの端末を叩き始めて、次々に修正データをはじき出して報告していく。

「第三、トライヴァータ、A3からB3オーバー、転送します」

「第八、アシュターリア、E5からE7オン、転送」

「第二、ラドゥヴィア、J9からI7にアンダー、転送...」

—— 微妙なズレって...これかなり...

これで10%の誤差なのか。セイヤがそう思った所で、崎杜師長補から声が掛かった。

「セル単位で2以上の修正が出たゲート、コンテナの減数処理を行うから。優先順位の低い順に、30%までリストアップ」

「30%ですか？」

ミツバが思わず訊き返す。セイヤも肩ごしに振り向いて、崎杜の顔を確認した。物資を1/3もカットしたら、小さな都市はたちまち困窮する。そりゃあ、こういう事態に備えて、多少の備蓄はしているのだろう。だろうが...

「そうならないことを祈るけどね。最悪の事も考えて、そのぐらいはやっておかなくちゃならない。リストデータのリロード、急いで、時間ないよ」

落ち着いた、でも有無を言わせない声が告げる。

「はい」

崎杜の声に頷いて二人ともモニターに向き直る。ここは、見習いが判断を迷っている状況ではないのだ。今、判断するのは師長補で、自分たちは言われた仕事を迅速に行わなくてはならない。誰かの命を危険に晒さない為に。

「ナナミ、マニチャトゥーラの停止時間は？」

この場の指揮を執っているらしい先刻の女性主任が、声を上げて、後方のモニターに付いている計測担当官を呼んだ。

—— ナナミ？

その名前に、セイヤの手が止まる。

「速度がまだ落ちません。このままだと、数十分の遅延が生じます」

良く知っている凜とした声に、セイヤは背筋を伸ばして人が慌ただしく動き回っているフロアを見回した。と、そこに見覚えのある人物の姿があった。

—— うっわ～ナナミ先輩じゃん...

彼女は、セイヤたちより一年先輩で、昨年の師官試験をトップで通ったという才媛である。師官養成学校の男子生徒たちの間では、マドンナ的存在だった。

「セイヤ、手が止まってるっ」

横からミツバの苛立った声が出て、セイヤは慌てて手を動かす。

「ほら、ミツバっ。あそこ、見てみろよ。穂瓜ナナミ（ほなぎななみ）先輩っ」

「はいはい。憧れの人なのは分かってるから、さっさと手え動かして。こんな時になんでそんなに緊張感ないかなあ...」

ぶつぶつ言いながら、ミツバの指はいかにも不機嫌そうに乱暴に端末を叩く。

—— 何なのよ。美人で？ 頭良くて？ 性格良くて？ あ～やだやだ。

どうして、そんなお手本のような女性が、自分の身近にいるのかと思う。しかも、自分の方に向いていて欲しい誰かさんの気持ちは、いともたやすくその花に持って行かれる。

—— 男って、ほんとバカ。ちくしょう、早くっ、終われっ。

「ナナミっ！ そのファイル束、早くこっちに持って来てっ！」

ほとんど怒鳴り声に近い声が、フロアに響いた。

その声に驚いて、今度はミツバの手も止まった。

「何やってるの、早く持って来なさいっ！」

「...うっそ...何で...」

思わず呟いてしまってから、ミツバは慌てて口をつぐんでセイヤの様子を伺う。当然のことながら、セイヤの手も止まっており、その視線は、今度は完全にナナミに釘付けになっていた。

—— あの、ナナミ先輩が...

彼女は師官試験を優秀な成績で通って、将来を有望視されていたのではなかったのか？ それも、どう見ても使い走りの仕事をさせられていて、みんなの目の前であんな風に罵倒されて...これではまるで、いまだ見習いであるかのような。

ミツバが呆気にとられていると、セイヤがいきなり立ちあがった。彼女に対して、好意など持っていないミツバでさえショックを受けたのだ。ナナミを憧れの人と崇めているセイヤにしてみたら、どれほどの...でも、今は。

「セイヤっ」

ミツバは、その上着の端を引っ張って、彼を椅子に座らせようと試みる。だが、少し強く引いたぐらいでは、彼の膝を折ることはできない。

「霧月くん、工作中ですよ」

そこで崎杜師官補が、諫めるようにセイヤの名を呼んだ。

「でも、あんな言い方...」

握りしめられたその拳が、微かに震えていた —— 彼は怒っているのだ。

「師官としての職務を全うすることが、今、あなたがすべきことです」

「分かってます。けどっ...」

セイヤが何かを言い掛けた所で、不意にフロア中に異常を知らせる警報アラームが響き渡った。

「何っ？」

動揺したミツバが思わず腰を浮かせる。

「エラーが出たのは、どこっ？」

主任師官のヒステリックな声が飛ぶ。

「早く、原因探してっ！」

「大丈夫だから、二人とも座って、計器のチェック」

「はい」

崎杜の指示に、セイヤたちは我に返りモニターを確認する。

「早く警報止めなさい。誰でもいいから、エラー処理っ！早くして！」

再度響いたヒステリックな声に、今度は崎杜が応えた。

「八雲主任、少し落ち着きましょう」

―― が、

「主任っ！第七、サブタディヤーナ、更に誤差増大中。最終軌道で更にセル3つズレ…」

「合わせて5？冗談でしょう。第七の修正を最優先して。刻印師室に連絡取って。増員要請」

そのやり取りの間にも、神経を逆なです様な警報が鳴り続け、緊迫感を煽る。

「仕方ないな…」

崎杜が呟くように言って、ミツバの肩に手を置いた。

「ちょっと、端末代わってくれる？」

「あ、はいっ」

ミツバが席を譲ると、崎杜が勢いよく端末を叩き始める。

「霧月くんは、手、止めないでね～」

言いながら、崎杜のモニターは、セイヤとは違う画面に切り替わる。恐らく、エラーの出ているシステムを特定して、警報を何とかしようとしているのだろう。だが。

「あ…」

崎杜の手が短い声を上げて止まった。

「え？」

それにセイヤが気を取られた瞬間 ――

フロアの電源が落ちた。計器類の光も全て消えて、辺りは突然の闇に包まれた。

「え...えええっ？」

当惑するセイヤの声に、

「あっちゃ〜」

という崎杜の声が重なる。

「...まさか、師長補」

「あ、いや、私じゃないよ」

そんな数秒のやりとりの間に、非常灯が点灯しフロアは青白い光に包まれた。

「60秒以内に予備電源が起動しなければ、ちょっと困ったことになるな」

「...困ったこと？」

「ああ、復旧に時間を食うと、構築したデータが飛んじゃうから...」

「マジですか」

そうなれば、最悪、今回の物資の移動はできないということになるのではないか。一同は固唾を飲んでその時間を待っていた。そこへ、

「す、済みませんっ」

端末の一つから、狼狽したような声が上がって、ひとりの師官が立ちあがった。

―― ナナミ先輩？

表情を凍りつかせて、そこに佇んでいたのは、間違いなく穂風ナナミだった。セイヤだけでなく、フロアじゅうの視線がそこへ集中する。

―― って、え...まさか、これ、ナナミ先輩が何かしたってことになるのか？

セイヤが当惑しながらナナミを見ていると、そこへ、崎杜が八雲主任と呼んでいた、例のおっかない女性師官が、無表情のまま、つかつかとナナミの元に近寄った。そして――

次の瞬間、パンという音がフロアに響いた。

八雲主任が渾身の力を込めて、ナナミの頬を叩いたのだ。叩かれた彼女はよろめいてデスクに体をぶつけ、そのままそこに寄りかかるようにして項垂れて頬を押さえる。

そんな光景がセイヤの目の前で展開された。それを見た瞬間に、セイヤはもう自分の持ち場を離れていた。ナナミに駆け寄ると、殴られた頬を押さえたまま、動けないでいる彼女と八雲の間に割って入った。

「ちょっと、いきなり殴るなんて、酷くないですかっ？」

しかし、セイヤが抗議の声を上げると、逆に八雲から睨みつけられた。

「殴られるだけのことをしたのよ、この子はっ」

自分が正しいのだという信念に基づいて発せられた八雲の揺るぎない言葉は、大きな威圧感を伴ってセイヤを圧倒し、その声から最初の勢いを奪い去る。

「それでも...」

「いいのよ、霧月くん...私が悪いの」

ナナミが、心配させまいとしてか、無理やりに笑みを作って、セイヤを押し留める。そこへ更に、八雲の容赦ない声が降って来る。

「見習い風情が、余計な口を挟むんじゃないわよ。役立たずは、引っ込んでなさいっ」

「なっ...」

セイヤが八雲に圧倒されながらも、湧きあがる怒りの感情に、何かを言おうとした時、オペレータの声がそこに割り込んだ。

「予備電源、起動確認しました。あと10秒で、電源戻ります」

「システム、再起動、データの確認急いで」

八雲はそういうと、セイヤたちをそこに残したまま自分の定位置に戻っていく。彼らの存在などもう、眼中にはないとでもいうように、こちらを振り返りもしない。

「霧月くん」

背後から崎杜に呼ばれて、セイヤは我に返った。

「本番は、これからですよ。君は仕事に戻って。それから...穂風主任補佐官、でしたか？君は、医務室へ行って、顔を冷やして貰いなさい。もう、ここには、君の仕事はないでしょうから」

「...はい」

ナナミが項垂れて、崎杜の言葉に頷く。

——主任補佐官...なのか。それなのに、あんな扱いをされてるなんて。

上司に恵まれなかったという理由だけで片付けてしまうには、あまりに酷過ぎる。

「霧月くん」

急かすような崎杜の声に、ナナミを気にしながらも、セイヤは持ち場に戻るしかなかった。

ナナミは、慌ただしく動き始めたフロアを、誰にも気づかれないように身を小さく縮めながら、ひとりそこから出て行った。その後ろ姿は、セイヤの心に何とも言いようのない無力感を湧きあがらせた。今の自分は、ナナミ先輩のために何もしてやることが出来ない。ただ、目の前の仕事をこなすだけで精一杯で。情けない限りである。でも、それが見習いである彼の現実だった。

4 四宮キセキ

「バックアップ正常に作動、データの損傷はありません」

「全システムの再起動に、掛かる時間は？」

「動作確認を含めて... 1 2 0分」

オペレーターの告げた数字に、八雲は絶望的な表情を浮かべて天井を仰いだ。

— それじゃ、間に合わない。

軌道のズレの算出もまだ終わっていない。これだけ予報とのズレが生じたのだ。

都市をリンクする刻印を一からやり直さなければならない。

普通にやっていたのでは、時間が足りない。移動させるコンテナを減数するにしても、限度というものがある。下手をすれば、50%を割り込む程の...

— どうする？

八雲は考えながら無意識に唇を噛む。

「刻印師室に繋いで...」

八雲が言うと、オペレーターが庁内回線を切り替えて、ヘッドセットを彼女に渡した。

「...広野刻印師長は？」

内線モニターの中に現れた刻印師官に問うと、しばらくお待ちくださいという声に続いて、画面が切り替わり、中年の女性の顔がそこに現れた。

「またトラブルだって？ 要請の来ていた増員は、今、そちらに行かせた」

「ありがとうございます、広野師長。それで、大変申し訳ないのですが、この上更に無理なお願いをしなければならない事態が発生いたしました...」

「そういう話なら、そちらの師長を通せ」

「こちらの師長、鎬木（かぶらぎ）はサブタディヤーナに出張中なのは御存じかと思いますが」

「八雲主任。規則というものは、理由があって定められている。増員要請に応えた時点で、こちらが果たすべき責務は終わっている。後は、そちらの裁量で、与えられた駒を最大限に使いこなして事態に対処すればいい」

「...緊急事態だと申し上げております。どうか...」

「鎬木なら、与えられた駒だけで上手くやってみせるぞ。それとも、やはり、主任風情では奴の物まねすらも出来ないか？」

広野のキツイ言葉をただ受け止めて、八雲は画面に向かって頭を垂れる。

「...どうか。お願い致します...四宮キセキ（しのみやきせき）を、お貸し頂けないでしょうか」

「四宮キセキはイレギュラーだ。便利に使ってもらっては困る」

下げた頭の上から投げつけられたのは、拒否を示す冷たい言葉だった。それでも、八雲は頭を下げたまま、同じ言葉を繰り返す。

「どうか、お願いします...どうか...」

「いいじゃない、そんな意地の悪いことしなくても」

明るく穏やかな声が、頭の前から聞こえて来て、八雲は思わず顔を上げた。

「キセキ...」

画面にその姿は映っていないが、そこから、広野とキセキのやり取りが聞こえて来る。キセキは広野の傍で、今の話を聞いていたらしかった。

「困ってるんだからさあ。力の出し惜しみとかって、どうかと思うし」

「私は、お前の、体の心配をしているんじゃないか」

「ああ、そんなことなら、今は、全然元気だから。ノープロブレム」

「しかしだな...」

「こっちの変な縄張り意識で、関係のない人たちが迷惑するって、上の人たち、もう少し考えた方がいいと思いますよ」

、僕は。五年前の時だって、それで…」

「キセキ…」

何かを言い掛けたキセキを、たしなめる様に広野がその名を呼んで、結局そこで、広野が折れたようだ。不意に通信画面が切り替わって、そこに四宮キセキの顔を映し出した。

「んじゃ、今から行くから」

「あり…がと…キセキ」

「安堵の涙は、全部終わってからね。ちなみに、作業可能時間は？」

「15分」

「うっは。凄いね、それで完璧に出来たら、僕、神様になれるかも」

言ってキセキが苦笑いした所で、通信が切れた。

「ごめんね。ありがとう」

誰もいない画面に向かって、八雲は改めて頭を下げながら、頭の中でキセキに対するお礼とお詫びの算段を始めた。

四宮キセキは、刻印師室創設以来の天才、と呼ばれるラインメーカーである。

普通の人間が一日掛かる作業をわずか数時間で終わらせる。それでいて、その計算にミスはない。任官2年ですすでに、刻印師室の秘密兵器という二つ名を頂いていた。

ただ彼には、作業に夢中になりすぎて、オーバーワークしてしまうという悪いくせがあるのだという。誰かが途中でストップを掛けないと、いつまでも仕事をしている。揚句、体を壊しては病院のお世話になっているという。それで一時期などは、毎月、月の半分は入院していたというから、仕事に対する執着は病的ですらある。広野が彼を出し渋るのは、そんな理由があつてのことなのだ。

——それでも今は。その力に頼るしかない。

いくら四宮キセキでも、今度ばかりは、絶対に無理だろう。

そんな空気の漂う中、キセキは軌道予報室に姿を現して、ラインメーカー所定の席に着く。

「んと、2、3とあと、5～11まで。端末こっちに貰うからね～」

眩きながら、キセキが端末を操作すると、いくつもの壁面モニターの画面が一斉に切り替わった。そこから、その画面は、何を映しているのか分からない程の速さで、次々に切り替わっていく――

「すっげえ...」

その様子を興味本位に見ていたセイヤは思わず感嘆の声を漏らす。セイヤだけでなく、他の者も、思わず手を止めて、ありえない速さで動く画面に目を奪われる。

これが、他人に向かって、容赦なく役立たずと言い放つ、八雲主任に頭を下げさせる『腕』なのだ。

やがて、息詰まる様な雰囲気の中で、突然キセキが声を出した。

「あと何分？」

それでも、手は動き続けており、その視線は、普通の人間には判別の出来ない速さで切り替わるモニターを見据えている。

「3分20です」

横でモニタリングしている師官が答えると、キセキが口元に皮肉めいた笑みを浮かべる。

「くっそおー。神様への道のりは、やっぱり遠いな...マドカちゃん、ごめんっ、あと5分貰う。それで、絶対、ケリ付けてみせるからっ」

――それでも、たった5分オーバーで終わらせるって...充分神様だろう...って、マドカちゃんって、誰？

「了解。それでは、全物流の20%カットで、最終調整。崎杜地図師長補、お願いします」

キセキのその言葉に反応したのは、八雲主任だけで。それはつまり、マドカちゃんっていうのは...

「了解しました。セイヤ」

余計な事を考えていると、師長補に肩を叩かれた。

「あ、はい」

「移送時間に5時間の欠損。物資の移動可能量は、予定の80%だ。第七と第二は、医療品を最優先に変更」

「了解しました」

セイヤが端末の操作を始めると程なく、

「ほい、リンク完了っ」

と、キセキの宣言するような声がフロア内に響いた。

その周辺から「お～」という歓声と共に、拍手が湧き起こる。

それを聞きながら、セイヤも崎杜に告げる。

「ブロックの組み直し、完了です」

「よし、じゃ、風花さん、各都市のゲートに新しいオーダー表の転送」

「了解。転送します」

データ送信の進捗グラフが画面に表示されて、やがてその数字が100を示す。

「完了しました」

ミツバが言うと、

「御苦労さま」

と、崎杜師官補がにっこりして、二人の肩に手を置いた。

「これで、研修終了だよ。お疲れさま。よく、頑張ったね」

その声に、緊張感が解かれて、セイヤは大きく伸びをした。

「だ～っ」

「あとで、レポート書いて持っただいで。それで、師長のOKがでたら、晴れて見習い卒業だから」

「「はい、ありがとうございました」」

崎杜を見送って、セイヤとミツバは思わず顔を見合わせ、互いにグーパンチをぶつけて拳を交わし合う。

「ねえねえ、今日、帰りに二人でお祝いしないっ？」

ミツバの浮かれた声に、セイヤは口元を綻ばせる。

「あ〜悪い。今日は、ちょっと先約があるんだ」

「え〜何、先約って」

「うん、ちょっと」

それ以上は、突っ込んでくれるなという時に使う返事を返すと、ミツバがたちまちに口を尖らせる。

「あ、俺、ずっと緊張してたら、何か、トイレ…」

セイヤはお腹のあたりに手をやって、ミツバの方を見る。

「んもう。じゃあ、先に地図師室戻ってるからね」

「おお…じゃな」

「ご、ゆっ、く、りっ」

当然ながら、こんなわざとらしいジェスチャーでは、仮病なのはバレバレだろうなと思いつつ、ミツバの背中を見送ってから、セイヤは立ち上がり、軌道予報室を出て医務室の方へ足を向けた。

セイヤが廊下を歩いて行くと、医務室よりだいぶ手前にある休憩スペースに人影があった。こちらに背中を向けて座っていたが、それが穂風ナナミであると、セイヤにはすぐに分かった。

彼女は飲料水のボトルを手にして、俯いてそこに座っていた。でも、その中身を飲んだ様子はなく、恐らくそれは、頬を冷やす為に買ったのだと思われた。セイヤが近づいても、彼女は身動き一つせずにそこに座っている。少し考えてからセイヤは、自分も自販機で飲み物を買って、取り出し口からそれを取り出すと、ナナミの前に立った。

「...隣、座ってもいいですか？」

声を掛けると、ナナミが俯いたまま、目線だけ上げた。

「ああ、何だ、霧月くんかあ...」

ほっとしたように言った声は、でもいつもの凜としたものではなく、その声に少し湿った気配を感じて、セイヤは表情を固くする。それでも、平静を装ってナナミの隣に腰を下ろす。

「医務室...行かなかったんですか？」

「うん...」

「どうして？」

「だって...私のせいで、あんなことになったのに...結果が出るまでは...って思って」

「あんなの、全部ナナミ先輩のせいって訳じゃないでしょう」

「...私のっ...せいなの...」

何かを訴えるようなナナミの声は震えていた。

「どうしてですか。先輩は...」

「私は、八雲主任に、端末には触るなって...言われてたのに...触っちゃ、いけなかったのに...」

ナナミはそこで声を詰まらせて、唇を噛んだ。

涙を堪えているのだと思ったら、それ以上は聞けなかった。

—— 触るなって、何だよそれ。ただの嫌がらせなんじゃないのか。

八雲は、優秀なナナミを自分の補佐官に付けて、良いようにコキ使っている。傍から見ると、そういう風にしか見えない。

「.....」

途切れてしまった会話の糸口を見つけられずに、セイヤは飲料水の口を開けて一口飲んだ。そこへ人が通り掛かり、ナナミの脇を通り過ぎた所で足を止めた。

「ああ、やっぱり、ナナミちゃんだ」

そう声を掛けたのは、四宮キセキだった。

「どうしたの？こんな所で座り込んで、また、具合悪くなった？」

気遣うようにキセキにそう言われて、ナナミが慌てたように首を横に振った。

「...いえ...大丈夫です」

「って、泣いてんじゃない」

キセキはナナミの前に屈みこんで遠慮なくその顔を覗き込み、たちまちセイヤの方に厳しい顔を向ける。

「キミが泣かしたの？」

「ちっ、違いますよっ」

「んじゃ、またマドカに怒られたのかな？」

「違うんです。私が悪かったからっ」

「な～んだ、ピンゴか。ごめんね、マドカも一生懸命だから」

—— 何だか、すいぶん訳知りっていうか。

セイヤがそんなことを思いながら、複雑な顔をしている目の前で、キセキがいきなりナナミの体をふわりと抱き寄せた。

—— な～っ。こういうのは、目のやり場に困るっていうか。第三者がいるところでやらないで欲しいっていうか～

思わず顔を背けたセイヤの横で、キセキの声がする。

「大丈夫、キミのせいじゃないからね」

ただ一言、それだけ言うと、キセキは立ち上がった。

「キミさ、彼女、医務室に連れて行ってあげて。ここ、熱持ちちゃってるから。ちゃんと冷やさないと、可愛い顔に痕残っちゃうと大変だから。よろしくね、んじゃ」

にこやかに手を振って、キセキはそこから立ち去っていく。

「って...あのっ...」

「霧月くんは仕事に戻って。大丈夫、一人で行けるから」

ナナミはそう言って立ち上がり、また無理やりに笑顔を作った。頬を腫らした顔で、それはかえって痛々しくて。

「でも、やっぱり一緒に...」

思わず言い掛けたが、ナナミが、もういいというように手を振った。それは、遠回しにだが、間違いなく拒絶を示していた。そこにセイヤを残したまま、ナナミは医務室の方へ歩いていく。

こちらを振り返りもしないのは、やはりこれ以上、関わって欲しくないという意志表示なのか。彼女にしてみれば、こんな無様な姿は、見られたくなかったのかも知れない。そう思うと、セイヤにはナナミを追い掛けることが出来なかった。

何となく、どんよりとした気分を抱えて、冴えない顔をしたセイヤが地図師室に戻ると、顔を合わせる人合わせる人に、「お腹大丈夫？」と声を掛けられた。どうやら新人君は、緊張のしすぎでお腹を壊したらしいと、すっかり地図師室中に、そう広まっていた。

―― ミツバのやつう...

嘘を付いた自分が悪いには違いないのだが、どうにも腹立たしい。ミツバは本当にセイヤの嘘を信じたのだろう。だが、この時ばかりは完全に、素直で単純な彼女の性格が裏目に出た形だ。

「お～霧月、戻ったか？」

セイヤの姿を見つけた地図師長 崎杜カズマ（さきもりかずま）から、さっそく声が掛かる。ちなみに、この人物は、崎杜師長補の兄である。

「あ、はい。只今戻りました」

「おお。お疲れさん。レポートは体調戻ってからで良いからな」

その口元が、意味ありげににやけている。

―― 分かっているよなっ？この人は、分かかってて言ってるよなっ！？

「いえっ、大丈夫ですっ。今日中にちゃんとやりますっ...」

「無理しなくていいぞ～」

そんな言葉を真に受けたら、後が怖い。セイヤは慌てて自分のデスクに付くと、仕事に取り掛かった。

―― そう言えば...

レポートを作りながら、セイヤはキセキの言葉を思い出す。

―― また、具合悪くなった？

また、具合が、悪い。もしかして、ナナミはどこか体が悪いのか？ それなら、ちゃんとした仕事をさせて貰えない理由にはなる。

―― う～ん。気になる...

自分なんかには、関わって欲しくない事情なのかも知れない。それに、自分はキセキの様に、彼女を慰めることが出来る程、親しい間柄でもない。自分が何か、彼女の役に立つのかと言われれば、そこに、はっきりとした答えもない。

―― けどっ。このままじゃ、色々...

気になり過ぎて、落ち着かない。

―― やっぱ、行ってみよう。

仕事が終わったら、ナナミ先輩の所へ。お見舞いだと言えば、一応、口実にはなるだろう。

奇しくも、ミツバの誘いを断る為に口にした先約が、これで出来たことになった。

5 酒とバラとケーキの日 前編

終業時間を少し過ぎて、ようやくレポートを書き上げたセイヤが、カズマ師長の元にそれを持って行くと、ちょうどミツバが片付けを終えて帰るところだった。

「終わった？」

「ああ...」

「体、大丈夫？」

改めて聞かれて、セイヤはミツバがさっきの嘘を微塵も疑っていないことに気付く。

「え？ ああ、まあ...」

お前、そんな馬鹿正直な性格で大丈夫かよ、と思いながらも、今更、嘘だったとも言えず、そこは適当な相槌で誤魔化すしかなかった。

「じゃあ、また明日ね、お先に。今日は寄り道なんかしちゃダメだからね」

「おお、また明日。お疲れさま...」

「いい？ 真っすぐ家に帰るのよ。分かった？」

そう念を押しながら、笑顔で手を振って部屋を出ていくミツバの姿に、セイヤは少し罪悪感を覚える。

ミツバは、セイヤと同じシャトゥラーラの出身で、子供のころから、家族ぐるみの付き合いというのをしていた。五年前の事故の時、セイヤはミツバの家族と同じコンテナにいて助かった。しかし、助かったとは言え、救出されるまでは、死と隣り合わせの極限状態に置かれていたのだ。

—— もしかしたら、自分たちは、あそこで死んでいてもおかしくはなかった。

そんな状況を共に乗り越えたセイヤを、いつしかミツバは特別な存在として見るようになっていた。セイヤの方も、生き別れたユノの姿をいつの間にか、ミツバに重ねていた。妹を失ったという喪失感を、ミツバをかまうことで、埋め合わせていたのだ。

だが、大きくなるにつれ、ミツバが自分に向けている気持ちが、いわゆる恋心であるのだと気づいてから、セイヤは意識的に彼女と距離を取り始めた。自分にとっては妹なのだ、ミツバは。自分に都合よく、寂しさを紛らわせる為に、妹扱いしていた存在。だからもし、そのせいでミツバが自分への思いを大きくしてしまったのだとしたら、彼女に謝らなければいけない。そう思いつつも、出来ればミツバを傷つたくはなかったから、何となくお互いの立ち位置は曖昧なままで、今は同僚という立場に甘えている。

ミツバの後ろ姿をため息で見送って、セイヤは師長室の戸を叩いた。

カズマ師長は、セイヤの提出したレポートにざっと目を通すと、表紙に自分のサインを書き入れて、そのファイルを決済済みの箱に放り込んだ。

「ま、こんなもんだらう。合格だ」

言いながら、デスクの引き出しから手のひらサイズの小箱を取り出すと、セイヤの目の前に置いた。

「受け取れ。地図師官の正式な徽章だ」

「あ... ありがとうございますっ」

喜び勇んでその箱に手を伸ばしたセイヤに、カズマの厳しい声が言う。

「いいか、忘れるなよ。お前たちがミスをすれば、都市の生活はたちまち混乱する。その事を常に頭に置いて、全力で職務を全うする様に」

「はいっ。全力を尽くします」

直立不動の姿勢で、勢いよく頭を下げたセイヤをカズマは感慨深げに見る。

—— あの時の子供が、もう一人前か。早いものだな。

たった五年で、ここまで来るとは、正直思わなかった。そこに何らかの理由を付けたくるのは、考えすぎか。

—— 例えば... 彼があの人の子だから... という理由を。

行政府庁舎を出て、セイヤはまず花屋へ向かった。ナナミの家には、一応、見舞いという口実を設けて行くのだから、花束の一つも持っていかなければ、格好が付かない、という至極単純な理由からである。それでも、大きなものでは、持って歩くのに恥ずかしかったので、ナナミのイメージに合いそうな赤いバラの花を片手に乗るぐらいの小さな花束にしてもらった。

セイヤがナナミの住むマンションの前に付くと、ちょうど道の反対側から、買い物袋を提げたナナミと行き会った。「あれっ？霧月くん、どうしたの？こんな所で」

頬に手当の痕があるものの、ナナミはもういつものナナミで、笑顔も自然なものだったことに、セイヤは取り敢えずほっとする。が、ほっとしたと同時に、やっぱりお見舞いとかって、大袈裟だったかも、という考えが頭をよぎり、言葉に詰まってしまった。

「ええと、その...」

そんなセイヤの表情と、その手の小さな花束を見て、ナナミが顔を綻ばせる。

「もしかして、今朝のこと、気にして来てくれたの？」

「えっと...まあ。そんな感じで...差し出がましうっ、かなっとは、思ったんですがっ。これ、お見舞い、ですっ。どうぞっ」

言うだけ言ったものの、そこでかなり照れ臭い状況になって、俯いて花を相手に押し付けるように差し出す。

「ありがとう」

ナナミの声がそう言って、セイヤの手から花を受け取った。瞬間、僅かに触れた手に、ありえない程、心拍数が上がる。

「じゃ、俺はこれでっ」

自転車を持ち上げて方向転換し、ペダルに足を掛ける。そこに、ナナミの声が掛かった。

「あ、ちょっと待って」

「え？」

「折角来てくれたんですもの、お礼に晩御飯、ご馳走させてくれない？そんなに大したもの作れないけど」

「え... いいんですか？」

「いいわよ、どして？」

「だって、先輩、一人暮らしですよ？俺、一応、男だし...」

「心配して来てくれたのよね？下心じゃなくて」

少しわざとらしいぐらいの笑顔でそう問われれば、そこは、

「そりゃ、そうですけど...」

としか、答えようがない。

「じゃあ、問題ないわよね」

「まあ、ないですね...」

お行儀よくします、という念書は取られても、後輩という待遇であっても、先輩の部屋に上げて貰えるというのは単純に嬉しい。気を付けていないと、ついにやけてしまう口を懸命に元に戻しながら、セイヤはナナミの後に付いて、彼女の部屋へ向かった。

「何してんのよ～あいつはっ！」

折角のお祝い気分の日に、真っすぐ家に帰るのもつまらなかったから、ミツバは、自分にご褒美でも買いに行こうと、街の中心街をブラブラと歩いていた。すると、具合が悪いと、そうのたまっていた男が、自転車に乗り、通りの反対側を軽快なスピードで走り抜けていくではないか。その方向はもちろん奴の住処とは逆方向で...

―― しかも、手に花束って、どういうことよっ。

これはもう、女に会いに行くのだと、誰が見てもそう思うシチュエーションだ。いくら鈍いミツバでも、そう思う。こんな日に、花を片手に会いに行く。何時の間に、そんな彼女が出来たのだ。自分に断りも無く...

―― そりゃあ、断る義務なんてないのかも知れないけどっ。

セイヤを好きなのは、こちらの一方的な思いなのだとは分かっている。まだ、ちゃんと告白した訳でもない。けど... 仮病まで使って、断らなくたっていいのに... と思う。

―― ひどいよ...

セイヤの気持ちはこちらに向いていないのは、何となく分かっている。だから、告白したら、そこで自分の思いは叶わない方に確定してしまうのだと。そう思うから、まだ告白は出来ないでいた。それに、最後の審判を仰ぐ前に、もう少しあがいてからでないと、きっと諦めきれないと思うから。

ミツバは手を上げて、丁度来たタクシーを止めると、セイヤの自転車を追いかけた。すると自転車は、二ブロック先のマンションの前で止まる。車を止めて貰って窓から様子を伺っていると、そこに現れたのは、穂凧ナナミだった。セイヤが彼女に花束を差し出すのを見て、ミツバは彼の目的地がここだったのだと知り、少し安心する。

―― ナナミ先輩なら、付き合ってるって訳じゃないわよね。

今朝の様子からすれば、セイヤがナナミの顔を見たのは、随分久しぶりなのだという感じだったし。セイヤの性格からして、それですぐに花を持って告白しに来るといってもないだろうから。とすれば、あれはお見舞いとか、そういう類のものに決まっている。

ミツバが色々と考えを巡らせていると、二人はそのまま揃ってマンションに入っていく。

―― まだ、あがく余地はあるわよね...

ミツバはそう自分に言い聞かせると、そこでタクシーを降りて、通り沿いにあったスイーツショップに駆け込んだ。

「うわ～」

その部屋に一步足を踏み入れたセイヤの口から、思わず出たのは、感嘆の声だった。

「凄いですね、ここ...」

セイヤの驚きように、ナナミが苦笑しながら答える。

「うん。来る人みんなにそう言われるわ」

ナナミの部屋には、所狭しと、大小さまざまな鉢植えの観葉植物が置かれていて、青々と茂る緑の葉に覆われたその部屋は、まるでジャングルのよう。

「そこに座ってて」

ナナミに示されたソファに腰を下ろすと、頭上に大きな葉が覆い被さって来て、気分はすっかり森林浴だ。

―― 軌道予報師は、特別ストレス溜まる仕事だって聞くけど...

ストレス解消とか、癒しとか、そういうものを求めてのことなのだとしても、これは少々、常軌を逸している。

「先輩、こういうの、好きなんですか？ 観葉植物みたいななの」

キッチンで買い込んできた食料品を整理しているナナミに、当たり障りのない感じで聞いてみる。

「まあ、好きは好きなんですけど。ここまでなっちゃったのは、ちょっと必要に迫られて、ね」

「必要って...？」

「簡単に言うと、植物療法？」

「植物...療法...って。先輩やっぱり、どこか体の具合が悪いんですか？」

「悪いっていうか...日常生活にはそんなに支障はないんだけど...」

「あ、言いにくいことなら、別に...」

「う〜ん。ちょっと待ってね」

そう言って、一旦会話を区切ったナナミは、手際良くお茶セットを用意して、それを持ってセイヤの所に戻って来た。そして、慣れた手つきでティーポットに紅茶の葉を入れ、ケトルから熱湯を注ぐと、ニワトリの形をしたキルト地の保温カバーをポットに被せた。茶葉が開くのを待ちながら、そこでナナミは話を再開した。

「私の体ってね、何か電磁波みたいなのを出しているらしいの」

「...え？」

「つまり、分かり易く言うと、電子機器に触ったりすると、それを誤作動させちゃったりとか...」

「...って、じゃあ、まさか今朝の停電の原因って...」

「そう。私のせい。端末には絶対触らないって、そういう約束で軌道予報室に入れて貰っていたのに。あの時、みんな、エラー処理にまで手が回らなくて、私なら出来るのって思ったら、もう、端末叩いて...日によって、大丈夫な日もあるから、もしかしたら今日はって思ったのよ。そんなに都合よく行く訳ないのに。警報の音で、舞い上がっちゃったのかなあ。何か訳わからなくなって、気が付いたら部屋が真っ暗になってた」

「.....」

「だから、怒られて当然」

「でもっ。...あんな風に殴らなくても」

「ホントは、私、適性試験で落とされる筈だったのよ。でも、八雲主任は私の才能を買ってくれて、そんな事で落としてしまうのは惜しいからって言って、補佐官として側に置いてくれたの。端末は叩けなくても、データ分析とか私、得意だから」

「...それで、補佐官なんですか」

「うんそう。任官してすぐ補佐官だから、一応、大抜擢なのよ、これでも」

「先輩は...そんなんでいいんですか？」

「いいって？」

「師官目指す奴はみんな、その仕事をしたくて目指す訳ですよ？ 身分とか肩書きの為に、あんなに苦勞して試験とか研修とかクリアして来た訳じゃないでしょう？ それが、あんな風にしか仕事させて貰えないって...何て言うか...」

「...それは、やりがいという意味で？」

「先輩はそれで、満足してるんですか」

「.....」

セイヤの問い掛けに、ナナミは少し寂しそうな笑みを浮かべた。視線を反らすようにポットに目をやり、被せていたカバーを外すと、ティーカップに琥珀色の紅茶を注ぎ出す。すると香ばしい湯気が立ち、それはセイヤの尖った気持ちを包み込むように広がった。その香りに包まれながら、セイヤの心に後悔の気持ちが浮かぶ。

―― 俺、調子に乗って言いすぎた...かも。

ナナミ先輩は、何時だって、凜として、毅然としていて、難しい事にも真っすぐに向き合う。それがどんなに大変な事でも、やる前から逃げたりはしない。そんな先輩だから憧れた。

それが、始めから何かを諦めてしまっているような今のナナミの姿に、自分は身勝手に失望したのだ。ただ、それだけだ。そんな資格などないのに、勝手に自分の理想を押し付けて。ナナミの事情も考えずに。彼女がそれで辛くなかったのだと、どうして言えるのだ。

「先輩...済みません、俺。勝手なこと言いました」

「いいの。ありがとう。自分でも誤魔化してた部分、そんな風に言われて。ちょっと嬉しかったかも。...満足は...していないわよ。それでもね、私には、師官章を返すことは出来ないの」

— その先にもまだ、何か理由があるのか。

でも、ナナミはもうそれ以上は語らず、席を立った。それは、まだ、ただの後輩である自分には、立ち入ることが許されない領域なのだと感じる。

「 Pastaでいいかしら？好き嫌いはない？」

「え？ あ...はい、ありません...」

答えながら顔を上げると、自分を見下ろしているナナミと目が合った。その琥珀の瞳の中に、彼女はどんな感情を押し込めているのだろう。それを一人で抱え込んで、苦しんでいるのかも知れない。そう思ったら、セイヤはナナミの手を掴んでいた。

「先輩、俺なんかで良かったら、話、聞きますから」

それで彼女が、抱え込んだものを吐き出して、また昔のように、凜とした穂風ナナミになれるのなら。

「何でも...聞きますから」

自分の思いをぶつけるように、その細い手を引き寄せると、ゆっくりとナナミの体が、セイヤの方へ近づいてくる。

「言って下さい。何でも...」

「何でも...？」

目の前で、ナナミの唇がささやくような言葉を紡ぎ出す。あと数秒の猶予があったら、間違いなくセイヤはナナミを抱き寄せていただろう。だがそこで、玄関のチャイムが大きな音で来訪者のあることを告げた。ナナミがそちらに意識を向けると、その手はあっけなく、セイヤの手の中からすりと抜け出して行った。その残像を目で追って、セイヤはそこで我に返る。

— 今、俺何してた？

数秒前のシーンが高速でリピートされて、思わず赤面して心拍数が上がりまくる。

玄関に應對に出ていくナナミの後ろ姿を目で追いながら、気持ちを落ち着かせようと紅茶をぐびっと口に流し込んだところで —

「やほーっ」

不意にミツバの声に急襲されて、セイヤは紅茶で水芸を披露する羽目になった。

「うわっ、あんた何吹いてんのっ。きったな〜いっ！ ナナミ先輩、タオル、タオル！ セイヤが盛大に紅茶、吹きやがりましたっ」

ナナミが苦笑しながら、ミツバにタオルを渡す。そのタオルをミツバはセイヤ目掛けて勢いよく投げつけた。そこに微妙に殺気が籠っていたように感じたのは、セイヤの後ろめたさのなせる業か。

「なっ...おまっ...なんで、ここにいんだ」

「それは、こっちのセリフなんだけど？あたしは、具合が悪いという誰かさんにお祝いの会、振られたからあ、んじゃ、ナナミ先輩のところにお見舞いにでも行こうかしらって思い立って、ケーキ持参で遊びに来たのよ」

ミツバがケーキの箱を示しながら言う。

「なんでお見舞いで、ケーキなんだよ」

「あらあ、落ち込んでる乙女の特効薬なのよ、スイーツは」

「ミツバちゃんも、Pastaで大丈夫？」

キッチンからナナミの声が言う。

「あ、先輩、あたし手伝います〜」

にこにこ愛想良く言いながら、ミツバはケーキの箱を残してキッチンに移動する。ひとり残されたセイヤは、ちょっとみじめな気分でごぼした紅茶を拭きながら、ふと気になって、ミツバの置いて行ったケーキの箱を開けてみた。そこに入っていたケーキは、三個 — 人数分ぴったりだ。それは、単なる偶然なのか、それとも...？

何か、見てはいけないものを見てしまったような気分させられて、セイヤは丁寧にケーキの箱を元に戻す。

— イチゴショートって、まさか俺の分...だったりして。

そこに自分の好きな種類のケーキが入っていたということは。

— まさか、俺がここにいるって知ってて押し掛けて来て訳じゃ、ないよな。

そう思いたい男心を余所に、キッチンからは楽しそうなやり取りが聞こえてくる。ミツバか来なければ、あの楽しそうなやりとりの相手は、果たして自分になっていたのだろうか。とか、ぐちゃぐちゃと妄想の類が浮かぶ。

それでも、楽しそうにしているナナミの姿に、ミツバが来てくれて良かったとも思う。ミツバはいつもああやって、自然に場を和やかに明るくしてくれる。あれもひとつの才能なのだろう。そのミツバに、自分も随分救われた。その明るさに、救われた。

「...サンキュな、ミツバ」

そして、今の自分では、きっとあんな風に、ナナミを笑顔にすることは出来なかつたらうと思った。それでもいつか —

自分の手を眺めて、そこに掴んだナナミの手の感触を思い出しながら心に誓う。

— いつかきっと、俺が、とびきりの笑顔をプレゼントするんだ。

早く一人前になって、きっと。ナナミが安心して頼れるような男になる。

まだ心にしまっておくことしか出来ないその決意は、しかしセイヤにとって、間違いなく未来への大いなる原動力となっていくものだった。

6 酒とバラとケーキの日 後編

八雲マドカが、行政府庁を出た頃には、街にはもう夜の帳が下りていた。

今日の予報エラーについて、何とか少しでも自分なりの見解を付け加えようと試みて、師長室の資料棚を漁ってみたのだが、芳しい成果は得られなかった。その努力の痕跡を示すように、師長室は、資料の山で足の踏み場もない有様になっている。片付け上手なナナミがいれば、こんなことにはならないのだが、あの事もあって、今日は定時で帰らせた。

結局、マドカには事実を書き連ねただけの報告書しか作れず、また上から何事が言われるのかと思うと、何とも胃の痛い思いがする。

鎧木師長のコンテナは今日の移動で、ポーラエーカに無事着いたとの連絡が来ているから、明日、都市移動後に義務付けられている健康診断を受けて、午後には戻るだろう。

―― それまでに、師長室の惨状を何とかしておかないと。

明日は、朝一番で、ナナミに棚の整理を頼まなければならない。そんなことを考えながら、マドカは閉店間際のデパートに駆け込んで、キセキに渡す今日のお礼の品定めをした。財布の中身と相談しつつ、可能な限りの最高級品を選ぶ。それを一応ギフト用にラッピングしてもらって、その品を手し、彼らがいるであろう何時もの場所へと足を向けた。

『アシュタヴァターラ』

その店の名は、彼らの母星ドゥルヴァに伝わる、古い女神の名から取ったのだと聞いた。その女神は、変幻の能力を持ち、常に他の神の姿を映しながら、どこにでも存在するが、その真の姿は誰も見たことがないのだという。そんな神話に由来する女神の名は、幻影とか夢幻とか、今ではそんな意味で使われる。

地下に降りる階段を下って、ドアを押し開くと軽いドアベルの音と共に、落ち着いた感じのバーが姿を現す。十人も入れれば一杯になってしまうこじんまりとした作りだが、その隠れ家的な狭苦しさが気に入っているらしく、四宮キセキはここを溜まり場にしていた。

マドカが店に入っていくと、キセキは、いつものように、店の一番奥のいつもの定位置で、いつもの相棒と共に、シャトランガと呼ばれる三次元チェスに興じていた。

マドカに気付いたキセキが、片手を上げて合図を寄越すと、キセキの相手をしていた相方が肩越しに振り向いて笑顔でマドカに声を掛ける。

「よお、今日は大変だったらしいな」

彼もまた、師官である。このポーラエーカでゲートキーパーの任に就いている樹カオル（いつきかおる）だ。マドカとは異なるセクションであるが同期である。

「そっちにも、だいぶ迷惑を掛けたでしょ。済まなかったわね、カオル」

マドカは彼らの傍のカウンター席に腰を下ろした。二人がシャトランガをしている時には、そのフィールド（ゲーム盤）が見下ろせるこの席がマドカの定位置なのだ。

「...ああ、まあ、ありゃあ仕様がないな。お、キセキ、天界にクイーンでチェックだぞ」

「うえ...ちよっ。カオル、それ、ちよい待っ...」

「待ったな〜し」

「い、や〜っ」

「聞きませ〜ん」

子供のようにゲームに熱中する二人の姿に、マドカは思わず顔を綻ばせる。

「くそ〜。何でカオルには勝てないのかなあ...悔しい」

「お前、読みはいい。けど、駒の配置手順が時々ぬるい。ま、俺に勝とうなんて十年早いってことだよ」

「はあっ...もうつまんない」

キセキが大げさにため息をついて、フィールドに突っ伏した。フィールド上に展開していた駒のホログラムが、その

干渉にノイズを生じて消えた。

「それじゃ、傷心のキセキくんに、命の水のご褒美」

マドカが言うと、キセキが途端に顔を上げた。その眼前に、リボンの掛かったワインボトルを差し出されて、キセキの顔がとびきりの笑顔に変わる。

「マイレーヤのセレクト品っ！？マジ、これ貰っていいのっ？」

「ええ。今日の神業のお礼よ」

「うっわ～マジ嬉しい...」

うっとりしながら、キセキは受け取ったボトルに頬ずりする。

「だから、マドカ好き」

「おいおい」

キセキのお手軽な告白に、カオルが苦笑する。

「お前、そんなに簡単に物品で懐柔されていいのか」

「うん。僕、これの為なら、何でも出来ちゃう人なの」

「ま、それも程々にな」

ちょうどそこに、マドカのグラスが来て、三人は互いにグラスを合わせる。マドカにとっては仕事の緊張感から解放されて、ようやくほっと出来る瞬間だ。それでも、さすがに予報日当日の夜で、色々トラブルがあったとなれば、話題は自然そちらの方へ流れていく。

「...そう言えば、あの子、また何かあった？」

そんな会話のやりとりの中で、キセキが思い出した風に、マドカに言う。

「...あの子って...ナナミ...？」

「うん。休憩所で、しょんぼりしてたよ。ちょっと痛々しい感じだったから。事情は聞いてるけど、あれ、もう少し何とか...ならないのかなと」

「何とか？」

聞き返した言葉が、少し陰のあるものになる。キセキは思ったことを、割とそのまま口にする。悪気はないのだ。だが、その素直でストレートなもの言いが、時々、マドカには痛い。

「予報室に置いておく必然性はあるのかなって。他に移した方が、もっと働けるかも知れないよ？」

「それは...本人の希望もあることだから...」

「ふうん。そうなんだ。そういうことなら余計なお世話か。ま、でも、あの子だって、好きであんな体になった訳じゃないんだから、もう少し気にしてあげなよね」

――気にはしている。

他でもない、自分が面倒を見ると、大見栄を切ったのだ。にもかかわらず、自分の事で手一杯になって、正直、そちらにまで気の回らないことがある。言われるまでも無く、そんな自分の未熟さを、一番許せないのは自分自身なのだ。

「分かってる...私だって。分かってるわ。嫌という程ね。それでも.....荷が重いつて、時々物凄く、そう感じるの」

思わずグラスを握る手に力が入ったマドカに、カオルがその力を緩めるように肩をポンポンと叩いた。

「予報師になって、たった3年で主任だろ。そんなの思ってた当然だろう」

「平時はいいの。でも、今日みたいなことがあると、思い知らされる。ユウキなら、きっともっと上手くやるのにな」

「奴だって、お前にたったプラス5年しただけで、師長だ。きっと同じこと思ってるよ」

「そうかしら...？」

弱々しく微笑むマドカに、カオルは頷く。

「そうそう、僕なんか、2年で秘密兵器だし、カオルだって今年は統括官でしょ？」

「え？決まったの？」

「ああ、そりゃあもう、不本意ながら？」

苦笑いするカオルに、キセキが補足するように言う。

「そりゃあ、仕方がないよね。何しろ深刻な人材不足な訳だから。マドカ、知ってる？この百年で、ヒトの平均寿命は十歳短くなったってさ」

「どこのデータだよそれ。んなこと言ったら、あと六百年もしたら、生まれて次の日にもう葬式を出す羽目になるんじゃないか」

「試算では、四百年だそうだよ。その頃にはもう、この都市を動かすのに必要な人口の維持が出来なくなるだろうって話」

「何だよ、夢も希望もない話だな」

カオルが顔を顰めると、キセキが徐に席を立つ。

「うん。だから、時間は大事。という訳で、僕はこれでね。マドカ、これ、ご馳走さまね。今日は、いい夢が見られそうだよ。じゃ」

キセキはマドカの渡したボトルを抱えて、どこかいそいそとしながら店を出ていく。

「あれ、随分と楽しそうね」

「ああ...多分、彼女に会いに行くんだろう...」

「...それって、せつない片思いしてるっていう、例の？」

「多分な.....場所、変えるか？」

「...今日は、ここでいいわ。それよりも、昇進したなら、お祝いに乾杯しなきゃ...」

「ま、厄介事が増えるだけの昇進なんて、めでたくもないけどな。お祝ってくれるっていうんなら...」

カオルがそこで言葉を切る。気が付けば、その瞳はマドカの顔を見詰めていた。

そこでマドカが瞳を閉じると、唇に柔らかな感触が伝わる。わずか数秒触れていただけの口づけなのに、体に痺れたような余韻が残る。それが事更に甘く感じたのは、お酒のせいだろうか。

心がほどかれて、その深い部分に沈んでいた思いが簡単に浮かび上がった。そして、カオルの肩に寄りかかるようにして頭を乗せてマドカは呟いていた。

「...私、仕事辞めちゃいけないかな？」

「辛いのか？」

「...何か、辛くなってきたかも」

「それは、今日だからだよ、きっと。明日になれば、もう少し頑張ろうって思える」

「そうかな...。私が寄り掛かったら、カオルは迷惑？」

「迷惑じゃないけど、多分、俺じゃお前の支えにはなれない...」

「そんなこと...」

「今、俺に寄り掛かったりしたら、お前はきっと後悔するから」

「後悔なんかしないわ」

「するさ。能力があるのに何もせずに逃げたら、どうしてあの時って思う時が必ずくる。そんなお前を、支え切る自信は、俺にはないから。だから、もう少し、あがけ」

「あがけ...か」

マドカは身を起こして、ふっと笑う。弱音を吐けば、慰めてくれる。でも、度を超えて寄り掛かろうとすると、しゃんとしりと怒られる。お互いに、気持ちはあるのに、カオルはマドカが近づきすぎると、やんわりと拒絶する。これだって十分に、キセキにも負けないぐらいの、せつない片思いだ。

「はあっ」

あからさまにため息を付いて、マドカはボトルに手を伸ばし、勢いよく両方のグラスに酒を注ぐ。

「私たちの明るい未来に乾杯」

言って、カオルのグラスに自分のグラスをぶつけて、その中身を一気に飲み干した。

「乾杯...」

完全に飲みモードに入ったマドカを見て、少し困ったような笑みを浮かべるカオル。結局、マドカが仕事で疲れている時に大抵ハマる、そのパターンを踏襲しながら、その夜もゆっくりと更けていった。

セイヤが目を覚ましたのは、真夜中を過ぎた頃だった。いつの間にか、本を読みながら眠ってしまった様だ。今日はまだ、予定の半分も読み終わっていない。昼間色々なことがありすぎたせいで、疲れているのかと思う。

気分転換にコーヒーでも飲もうと、セイヤはマグカップを片手に書庫を出て、図書館の事務室に向かった。すると、消灯時間をとうに過ぎていた筈の事務室から、明かりが漏れていた。

―― ハジメの奴、こんな時間まで仕事をしているのか。

そう思いながら事務室を覗くと、そこに人影は無かった。パソコンが起動したままで、飲みかけのコーヒーもまだ残っていたから、残ってはいるのだろう。

―― トイレか？

さして不思議にも思わずに、セイヤは事務室に入り込む。そして、幸運にもまだ電源が入ったままになっていたコーヒーサーバーを発見して小躍りすると、手にしていたカップに早速コーヒーを注いだ。立ち上がる白い湯気を吸いこんで、その香りにほうっと息を付く。と、そこで、ピッと微かな電子音が耳に付いた。

「何だ...？」

事務室内をぐるりと見回して、音の出所を探す。すると、壁面に設置されている警報装置の表示のひとつに、緑色の光の点滅を見つけた。そのモニター画面には、エントランスの扉が数秒前に開閉された記録が表示されていた。不法侵入であれば、赤ランプが付いて、警報が鳴り響く筈だから、これは許可されたIDを使って、ここに入って来たということになる。しかも、こんな時間でも、入館が許可されるIDとなれば、それは、ポーラエーカでも限られた人間にしか与えられない、特別なIDということになる。

「...ハジメじゃ、ないよな」

表示されたID番号を確認したが、それはハジメのものとは違っていた。

—— 誰だ？

エントランスから入って来たのであれば、すぐにこの事務室の前を通る。そう思いながら、セイヤはコーヒーを手に、窓から廊下の様子を伺う。その人物を待ちながら、コーヒーを一口、二口とすすむ。しかし、人が来る気配は一向になく、館内は静まり返ったままだった。ハジメもどこに行ってしまったのか、ちっとも戻って来ない。

結局、最後までコーヒーを飲み終わってしまったセイヤは、カップをデスクに置くと、懐中電灯を片手に、薄闇の支配する廊下をエントランスに向かって歩き出した。

歩いていくとすぐに、セイヤと同じ懐中電灯の光が、床に長く伸びているのを見つけた。その光の向こうで、誰かが座り込んでいる。

「ええと...何、してるんですか？」

セイヤが声を掛けると、そこにいた人物がこちらを向いた。それは、見覚えのある人物で...

「あつれ〜、どうしてキミこんな所にいるの？」

と、逆に聞き返される。

— こっちが聞いてるんですが...って、何か今日、こんなんばかりだな。

「あ、そっか、図書館に住んでるっていうの、キミのことだったんだね。何だ何だ」

答える前に、勝手に納得しているその人物は、四宮キセキだった。

「あの〜 四宮...先輩？」

「あ、はい。どうも、僕、お邪魔してます、家主さま」

「いや、俺、家主じゃないし...」

— つか、酔ってますね、先輩。

「何でこんなトコで、酒盛りしてるんですか」

「うん、マドカちゃんに美味しいワイン貰ったから。『彼女』と一緒に乾杯しようと思って〜」

「...彼女？」

セイヤが怪訝そうな顔を見ると、キセキが床に転がっていた懐中電灯を拾い上げて、その光を壁面に当てた。そこに照らし出されたのは、ユノの絵で。それを見てキセキが笑顔で、もう一度言う。

「僕の、彼女」

「彼女って...絵ですよそれ」

「うん、知ってるよお〜 でもね〜 一目ぼれしちゃったからさ。時々、話をしたくなると、ここに来るんだ」

「話...ですか」

「そう。彼女はいつでも、ヤな顔しないで、僕の話聞いてくれるから。ほんと優しい子なんだよね〜」

絵と会話するというのが変だとは言えなかった。セイヤだって、毎朝ユノと、会話を交わす。きっとセイヤがそうであるように、キセキにとっても、このユノが心の拠り所なのだとしたことなのだろう。あれ程完璧に仕事をこなせて、何も悩みなどないようなキセキにも、何か吐き出したいことがあるという事なのかと思う。

「ああ、そんなとこに突っ立ってないで、ここ、座んなよ。グラスあるから、少し飲ませて上げる。これ、すごく美味しいから」

「えっと〜、俺、酒とかって、まだあんまり...」

セイヤはそこに腰を下ろしながら、消極的な断りを入れる。が、

「い〜から、い〜から。味見だけ」

座った途端に、すでにワインの注がれたグラスが、目の前に差し出されている。

「はあ...じゃ、少しだけ頂きます...」

それを頑なに拒むのも、何だか無粋な気がして、結局セイヤはそのグラスに手を伸ばした。

口を近づけると、ほんのり甘い良い香りがして、それに誘われてその液体を口に含む。味は、正直ウマイのかマズイのか良く分からなかった。だが、それを体内に流し込んだ途端に、体がほかほかとしてきて、何とも言えない、いい気分になった。それが的確な例えかどうかは分からないが、強いて言えば、ぬるめのお風呂に、ゆったりと浸かっているような、そんな感じ。

「どう？ おいしいでしょ？」

「はあ、まあ...」

「僕ね、何しても眠れない時にこれ飲むと、ほんといい夢が見られるんだよね」

「へえ...先輩でも、眠れないなんてコトがあるんですか？」

「ああ、その先輩っていうの堅苦しくてイヤだから、キセキでいいよ。うん、今日みたいにフルにお仕事しちゃうとね、神経昂ぶっちゃって、実は三日ぐらい眠れなくなる。僕、薬とか効きにくい体らしくてさあ、睡眠薬とかもぜんぜんなんだよね」

―― 三日も、眠れなくなる。

あの神業は、体にそれ程の負荷を要求する。それでも、この人は、望まればそれをやってのけるのか。

―― 半端ねえ。カッコいい。

明日から、自分もそんな師官の一員なのだ。そう思うと、言い知れない感動と共に、身が引き締まる思いがする。

「俺、明日から、正式に師官になるんです。キセキさんみたいに、バリバリ頑張ります」

そう言うと、キセキが、あはたと笑う。

「ダメダメ、僕なんか、お手本にしちゃ。無茶ばっかしてるから、体がいくつあっても足りなくなるよ？」

「はは、無茶ですか。そう言われれば、こんな時間に、こんな所にいるのも、だいぶ無茶ですよ。一体、どうやって入ったんです。おまけに、今日、初めてって訳でもなさそうだし...」

「不法侵入じゃないよ～」

「それは、分かってますよ。警報鳴りませんでしたから。何で、随時入館が許可されるIDなんてものをお持ちなのかなど」

「ああ、だって、僕、ワイズマンコートの末裔だから」

「ワイズマンコート？」

どこかで読んだ資料で、その名称には覚えがあった。

―― っと、何だったっけ。

セイヤは書庫の資料をさんざん詰め込んだ頭の中に、その言葉を探す。

―― ああ、確か。

このコロニー建設の時に、実質的な指揮を取った科学者集団の名称がそんなだった。

「その末裔だと、何で入館が許可されるんですか？」

「彼らの残した知識に触れて、この世界の理を解き明かす使命があるんだそうだよ。彼らの血を受け継ぐという理由だけで、僕たちには」

「...僕たち？」

「君も、そうなんだろう？ だから、ここに住むことを許されてるんじゃないの？ この世界の理を解き明かすために」

―― この世界の理を解き明かすために。

「...え...」

キセキの言葉に、セイヤは混乱する。

「だって、それは...ユノを探すために必要だからって...使命なんて話、ぜんぜん...知らな...」

「ユノ？」

「え、ああ。ユノって俺の妹です。この絵のモデル...五年前の事故で、行方不明になってて...」

「え～ この絵って、キミの妹がモデルなの？ じゃあ、全く架空の人物って訳じゃないの？ 実在するの？」

「ええ、まあ」

「ほんとに？」

「ほんとですよ。これ、俺が描いたんですから」

言った途端、セイヤはキセキに思い切り抱き締められた。

「なっ、なにすんですか、キセキさんっ」

「お兄ちゃんっ、と呼ばせてくれ」

「はあっ？」

「キミ、今、自分が何言ったか分かってる？」

「俺、何か変なこと言いましたかっ？」

「闇に閉じ込められていた僕の恋に、キミは希望の光を与えてくれたんだ」

「は？ 意味不明なんですけど...つ～か、離して下さいってば」

セイヤがキセキの体を強引に引き離すと、そこに現れたキセキの顔はすっかり緩みきっていた。

「この恋には、叶う可能性が出て来た、ということさ～」

「だから、ユノは行方不明なんですってば」

「ならば、共に探そう。僕らは、たった今から同志だ。この世の理を解き明かし、闇に囚われた僕の天使を救い出そう」

「...ていうか、もし、ユノが見つかったら、ユノがキセキさんの彼女になるとは限らないですからっ」

「キミは、僕たちの純愛を応援してくれないというのか」

「断固、しません。ユノは俺の妹、ですから」

「お兄ちゃんっ、妹さんを僕に下さい」

キセキがうるうるしながら、セイヤに縋りつく。

「あげませんっ！！ それに、そのお兄ちゃんっていうのは止めて下さいって」

「じゃあ、お兄さんっ、じゃなきや、お兄様？ 兄上、兄者、あんちゃんっ...」

「あの、ですねえ、言い回しの問題じゃないんですがっ」

酔っ払いに絡まれる、というのは、ああいうことを言うのだなと、セイヤがそう思ったのは、朝の陽の光の中で、意識を取り戻した後だった。

肩を揺すられて目を開けると、そこには呆れ顔のハジメがいた。

「何やってんの、お前...こんなとこで」

言われてみれば、セイヤは空のワインボトルを抱えて、柱に寄り掛かって爆睡していたらしかった。すぐそばの床には、ワイングラスが二個と、すでに電池の切れた懐中電灯が転がっていた。四宮キセキの姿は、どこにもなかった。

「師官昇進で嬉しかったのは分かるけど、たいして飲めもしないのに、ひとりでボトル1本空けるって、いくらなんでも浮かれ過ぎだろう。館長が来る前に、この辺、片付けておけよ」

ハジメはいつもの様に、神経質そうな口調でそう告げると、事務室の方へ歩き去っていく。ぼんやりした頭で、その姿を見送ってから、セイヤはのろのろと立ち上がる。

「...っ」

ゴン、と何かで殴られたような痛みが、頭部に走る。

―― 二日酔い、とかいう奴か、これ。

足を踏み出す度に、その振動がガンガンと頭に響く。

―― 師官初日から、二日酔いって、最悪じゃん。

あの人は、無事に家まで帰り着いたのだろうか。そんなことを思いながら、キセキとの不思議な夜を思い起こす。

―― 世界の理を解き明かす、使命。そして...

「ワイズマンコート...」

―― だめだ、いたくて、頭まわんねえし。

何か、とても重要なことを聞かされた気がするのに、今は、何も考えられなかった。

セイヤが、生まれて初めて二日酔いというものを経験したその日、行政府庁では、ひとつの大きな問題が持ち上がっていた。

7 世界の理を解き明かすということ

軌道予報師長である鎬木ユウキが戻る刻限に合わせて、ポーラエーカ行政政府庁では、最高幹部会議が招集された。

その知らせをユウキは、病院での煩わしい検査を終えて、少し早い昼食を取っていたカフェで受け取った。予報日の後には、必ずその報告も兼ねた会議が開かれるから、会議それ自体は特別なことではなかった。だが、通常開かれるのは、師長だけが集まる師長会議である。それ対し、今回は、行政政府顧問や司法府の最高責任者も含む、最高幹部会議である。

「やれやれ、戻った早々、何事だよ」

ユウキは、マドカがパソコンに送信してきた報告書のファイルに目を通しながら、異例の招集が掛けられた理由を考える。今回の予報のズレは、まあ、何時もよりは大きかったが、それでも想定範囲内だ。四宮キセキのお陰で、被害もさほど大きくはならなかった。こちらが例の秘密兵器を使ったことに対して、刻印師室の方で含むところがあるのだとしても、それだけで、こんなに大ごとになるとも思えない。だとすれば、それ以外に、もっと面倒な案件が発生したということになるのか。

—— 例えば、オクトグラン全体に関わる様な...大ごと、とか。

「まさかな」

例えば、いつかこの世界は立ち行かなくなる、といった類の話は、オクトグランの有史以来、ずっと、一部の学者によって唱え続けられていたし、いつかいつかと言われ続けていることに関しては、まさかそれが今日明日起こるとは、人は、なかなか考えないものである。

果たしてその数十分後、最高幹部会議の冒頭で、ポーラエーカ行政政府最高顧問である二妃カレン（にひかれん）が、口にした言葉によって、ユウキはこの世界で起こり得ないことが起こったのだと、知ることになった。

「先の予報誤差について、そこに人為的な介入があった可能性のあることが判明した」

カレンの告げた言葉に、そこにいた人々は互いに顔を見合わせ、困惑と不信の混じり合ったような表情を浮かべた。「この世界を動かし、これを適切に管理維持するという、我々の崇高な使命に対し、これを妨害し、我々に敵対するという明確な意志を示した者たちがいる」

「馬鹿なっ」

司法府最高責任者である九龍レンヤ（くりゅうれんや）が、怒りをあらわにして腰を浮かす。

「座れ、司法府長」

レンヤを諷めたのは、カレンを除けば、唯一彼より年長になる、門管理師長の矢上カズトモ（やがみかずとも）だ。レンヤが不機嫌そうな顔をして、渋々座り直したのを確認して、カレンは再び口を開いた。

「奴らは、自らをワイズマンコートと称し、我々が長年探し続けているコードプレート（暗号碑文）をすでにその手中に収め、都市の軌道を自由に操る術を手に行っていると言っている」

—— まさか、本当にそんなことが...

ユウキは、カレンの言葉を吟味するように考え込む。その横で、

「あり得ません」

行政政府顧問室長である三枝ユリア（さえぐさゆりあ）が、声を上げた。

「コードプレートの存在は、未だ伝承の域を出ず、現存するのも怪しい代物です。よしんば、それを発見したのが事実だとしても、それで都市軌道を自在に操るなど...このポーラエーカと同等のシステムが、この世界にもう一つ存在するといふのでなければ、話になりません」

「私も同感だ」

カレンが頷く。

「今回の誤報を逆手に取り、それを自分たちの所業であると思わせて、さもその様な力があるかのように見せかけている。真相は恐らくそんな所だろう」

「しかし、仮にそうだとすると、そこには大きな問題が残ることになりますな」

レンヤが指摘する。

「昨日の今日で、軌道予報に大きなズレが生じたことが、外に漏れ出ていること。そして、極秘である筈の情報...つまり、コードプレートの存在と、我々がそれを探しているという事実を、奴らが知っているということ」

「情報の漏えいか...それは、ここにいる誰かが、この一件に関わっているということになるのか」

カズトモが、一同を見回しながら言葉を挟む。

「考えたくはありませんが、そういう事になるのではないですか」

レンヤが吐き出すように口をつぐむと、そこに重苦しい空気が下りる。

互いに互いの様子を伺う様な視線のやり取りが、そこでしばらく続く。

「で、彼らの目的は一体、何なのですか？ 金？ それとも都市機能のマヒですか？ この閉鎖された世界で、混乱の種をまくなど、自らの首を絞めるにも等しい所業だろうに」

崎杜カズマが言うと、広野マリノがその言葉尻を受けて言う。

「そんなことすら、分からないような愚か者だということでしょう」

「彼らの要求は、資源配分の不均衡の是正、だ」

カレンが淡々とした口調でそう答えると、カズマは思わず失笑する。

「それはまた...至極まともで、えらく崇高な目的ですな」

都市に配分されるコンテナの数量は、必要数の配分が建前であるが、その数量決定には、各都市を仕切る市長とそこに複雑に絡み合う利権者の力関係が大きく影響する。要するに、それによって、富める者と、そうでないものが出ていくという現実がある。何事もなければ、あまり表面化しない問題であるが、予報エラーによって、たび重なるコンテナの減数が行われたことで、下層の者に相当なしわ寄せが行っているのだということは想像に難くない。

全体数の減少による不足分は、都市の人間に均等に振り分けられる訳ではないのだ。上層の人間は、当たり前のように自分の取り分は、しっかりと確保する。上から順番にそうやっていけば、下へ行くほどその不足の影響を大きく受ける。それが、この世界の現実だった。そこに不満が生まれ、そこから生じる怨嗟の類が、実質この世界を支配しているこの行政府に向けられることも、あり得ない話ではない。

だが、今回の件に関して言えば、その理由は、どこか取って付けたような感が否めない。行政府のトップに犯行声明を送りつけるという、手際の良さひとつをみても、滅多には知り得ない情報を有しているという点からも、彼らは間違いなく『上』に属する人間だ。

―― 奴らの本当の目的は、一体何だ。

そこにいた誰もが、その思う所はカズマと同じであったようで、それぞれに思案顔をしている。

「ともかく...」

カレンの毅然とした声が響く。

「どのような力を持つのかは定かではないが、我々に敵対する意志を示す者達の存在は認めねばなるまい。その上で、奴らを捕捉する為の方策を早急に講じよ。いいか。この世界を支えるという使命を負う我らは、これしきのことで揺らいではならない」

一同は神妙な顔で頭を下げた。それを確認してから、カレンは司法府長である九龍レンヤに、事実関係の捜査を命じた。

「それから、ユリア。軌道予報にズレを生じる原因を究明するために、プロジェクトチームを立ち上げて、予報精度の回復を図りなさい。人選は任せる」

「承知いたしました」

ユリアが神妙な顔で頭を下げる。

「各師長においては、このプロジェクトに関し、最大限の協力を要請する」

―― 予報精度の回復とは、また...随分、難しい懸案を、簡単に言ってくれる。

ユウキはそっと肩を竦める。そんなものは、一朝一夕に分かるようなものではない。そこに、最大限の協力をしろという。貴重な人員を持って行かれることに慚然としながら、しかし、たいした発言権もなく、ただ会議の末席にいるばかりの身では、そこはただ黙って頭を下げるしかなかった。

この世界で、最高の権限を持つ人間が座ることを義務付けられた椅子に身を沈めて、二妃カレンは、そこで深い吐息を漏らした。

―― なぜ、ワイズマンコートなのか。

あの声明の発信者が、その名称を使ったことにカレンは眉根を寄せる。それは、深い意味などない只の名称に過ぎないのか、それとも、こちらに対する明確な意思表示なのか。どちらにしても、『彼』にはその真意を問い質しておかねばならない。

「ソウマ」

丁度、会議の議事録を持ってやってきた秘書の山科ソウマ（やましなそうま）に声を掛けて、カレンはその意志を伝える。

「行政府公文書館館長、不動シュウヤを召喚する。その様に計らってくれ」

「...承知いたしました。ひとつ確認させて頂いて宜しいでしょうか」

「何だ？」

「氏はこれまでも、たび重なる召喚を無視なさっています。今回もまた、召喚に同意されなかった場合は...」

「今回は非常事態だ。力づくで構わない」

「畏まりました」

ソウマは了解の会釈をして部屋を出て行った。

―― これで、私たちの間の亀裂は決定的なものになるのか。

かつて、この行政府で肩を並べ、共に世界を統べる事に尽力していた友は、いつしか相容れない主張を持ちここを去った。

ワイズマンコートの子孫であるシュウヤは、この世界には限界があるのだと言い、行政府に変革を求めた。しかし、既得権益を保有する人々の集合体であるこの行政府で、シュウヤの主張が受け入れられることはなかった。

『閉じられた世界は、緻密に定められたエネルギー循環の法則に従い、永遠に環境変化の訪れない世界。千数百年という時を、日々、同じ繰り返しを行う事で保って来た。それは、この世界の必然。それを否定する事は、世界の滅亡に繋がる』

それが、行政府の見解である。

閉じられた世界に変化が訪れることなどないのだ。それを否定することこそ、世界の均衡を崩す行為に外ならない。我々が、世界を正しく動かしてさえいれば、彼の言う『いつか』など、永遠に来る筈はないのだ...

そして五年前、あの事故を契機に、シュウヤはすでに身の置き所がなくなっていた行政府から身を引いた。兼任していた公文書館の館長として、あの図書館に引き籠もる形で行政府との関係を絶った。それからは、行政府からの呼び出しは元より、カレンが個人的に送った私信の類にも、一切、返信はなかった。

ワイズマンコートの子孫として、この世界を開くために、コードプレートを探し出す――彼は、その最後の言葉通りに、今も探し続けているのか。自らの主張が正しかったのだと、人々に認めさせるために。

―― 本当に、お前なのか。この世界に混乱をもたらすというなら、私はお前を断罪しなければならないのだぞ。それが私の使命なのだから。

カレンは誰もいない部屋で、その悪い予測が外れてくれることを願いながら、ひとり憂鬱そうにため息を漏らした。

「ねえ、今日こそは、予定、空いてる？」

終業間近という刻限に、ミツバがわざわざセイヤのデスクにまでやってきて、そう声を掛けた。

「ごめん、今日は無理。何か、朝から頭痛が...」

「お腹の次は、頭？ って、誰が、そんな言い訳信じんのよ。昨日だって、結局、遊び歩いてたくせに」

ミツバが少し音量を上げただけの声に、セイヤはたちまち頭を抱え込む。

「う～やめてくれ、響くから...」

その様子に、ミツバも流石に信じたようで、心配そうにセイヤの顔を覗き込んだ。

「何？もしかして、二日酔い...とか？」

「ああ...実はキセキさんに飲まされちゃって...」

「あっきた...あの後、真っすぐに帰ったんじゃないの？しかも、四宮キセキって、何でそんな有名人と...」

「いや、帰ったには帰ったんだけどお...」

口をひらくごとに、胃の辺りに不快感と、頭の痛みがぶり返してくる。

「ダメ、も...無理」

セイヤはそのままデスクに沈没した。

「医務室で、薬もらってきてあげようか？」

「.....」

答えも出来ずにいると、ミツバの気配が遠退いて行った。そのまま、半分意識を失ったような状態でいると、しばらくして肩を叩かれた。顔を上げると、水と薬を手にしたミツバが戻って来ていた。

「たく、具合悪いなら、休むなり、薬飲むなりしなさいよ。ほらっ」

半ば強制的に、目の前に薬を差し出されて、セイヤは何も考えずにそれを口に入れると、コップの水を一気飲みする

。

「少しそこでじっとしてて。仕事片付いたら、送ってってあげるから...」

「いいよ、別に。子供じゃあるまいし。一人で帰れる」

「だめよ。そこで大人しく待ってなさいよ」

「え～」

そう不満げな声を上げながらも、到底すぐに動ける状態ではなく、セイヤはいつの間にか、そこで眠ってしまっていた。再びミツバに体を揺すられて顔を上げると、三十分ほど時間が経過していた。脱いでいたはずの上着が肩に掛けられていた。ミツバが気を利かせたのかと思う。

「具合どう？」

「ん...ああ、何か薬効いたかも。だいぶいい」

「そ。良かった。じゃ、帰ろ」

返事をする前に、上着を着直したばかりの腕に、ミツバの腕が逃がすまじという感じで、絡み付いて来る。

「...逃げないから、離せ」

室内に残っている者は、すでになかったが、いくらミツバとでも、腕を組んで歩くななんて真似は恥ずかし過ぎて出来ない。

「ほんとに逃げない？」

「そんな体力残ってねえし...」

言いながら軽く腕を振り払うと、ミツバの手が離れて行く。無言のままロッカールームへ向かうセイヤの後を、少し離れてミツバが付いて来る。

「ねえ、今日は、夜ごはん何食べるの？」

「え？」

背後からいきなり訊かれて、セイヤが振り向くと、

「今日は、あたしが作ってあげる」

と、満面の笑みでミツバが言う。

「いい。あんま食欲ないから、レトルトのおかゆでも温める」

「おかゆ食べたいんなら、作ってあげるよ。物凄くおいしいの」

「……」

そんなに嬉しそうに言われると。何だか断り切れない。体調の悪さも手伝って、あれこれ気を回す余裕もなかった。結局その日は、そのままミツバに押し切られる格好で、セイヤは彼女と共に図書館へ帰ることになった。

ミツバは図書館奥の簡易宿泊スペースに併設されたキッチンで、おかゆを作り終えると、どこかの書庫に入り込んでしまったセイヤを探しに出た。

ゆっくり休んでいればいいものを、彼は薬を飲んでちょっと具合が良くなると途端に、本の森へ出かけてしまった。その知識欲にはまったく頭が下がるというか、呆れてしまうというか...子供の頃は、本になど見向きもしなかったものが、こうも変わるものかと思うばかりだ。

あちこち見て歩いて、彼女がセイヤを見つけたのは、医学書が納めてある、一般に開放されている書架だった。高足の脚立の上に登って、天井近くの書棚から、分厚い医学書を引っ張り出して、そのままそこで本を広げて熱心に読みふけている。

「何か調べ物？」

「...ああ」

ミツバが下から声を掛けると、生返事だけが返って来る。仕方なしにミツバは、脚立を登って、セイヤの側まで行き、そこでまた声を掛けた。

「ご飯出来たよ？」

言いながら、その本を覗きこむ。

「もしかして、ナナミ先輩の？」

そう水を向けると、少しまともな答えが返って来た。

「ああ。どういう病気なのかと思って...」

「何か分かった？」

「まあ、ぼちぼち、かな」

セイヤがそう答えて本を書架に戻すと、そこで、静かな筈の空間に、複数の人間が館内を走るような靴音が響いた。

「何？」

様子を伺うように、ミツバがそこから身を乗り出したのを、セイヤは反射的に押しとどめた。そしてそのままミツバの体を自分の方に引き寄せて、シツという風に人差し指を口に当てる。セイヤが書架の隙間から覗き込むと、司法府の制服を着た男たちが、館長室の方へ行くのが見えた。銃を携帯しているところを見ると、穏やかな用件という訳ではないらしい。

「...お前は、ここにいろよ。いいな？」

有無を言わずそう言い置くと、セイヤは脚立を下りていく。

一方、残された方のミツバは、セイヤの不意打ちに、激しくなった動悸を鎮めるのに精一杯で、返事をするどころではなかった。自分がこんなにドキドキしているなんて、きっとセイヤは思いもしないのだろう。だから、あんな風に、簡単に肩を抱き寄せたり出来るのだ。

—— あ～もう、嫌。

それが嬉しい半面、そこに伴うせつなさは、ミツバの心を容赦なく掻き乱す。結局、自分のことは、何とも思っていないのだと思い知らされる。これは、頑張れば何とかなるものなのか。頑張れば、この思いは受け止めて貰えるのか。

—— いつまで頑張れるのかな、あたし...

書架の向こうに小さくなっていくセイヤの後ろ姿が、少し滲んでぼやけた。

セイヤが館長室に着くと、その扉は開け放たれていて、そう広くない室内で、五人の男がシュウヤを取り囲んでいた。

「一体何なんですか、あなた方はっ」

怒りを込めて言い掛けたセイヤを制したのは、シュウヤ自身だった。

「構うな、セイヤ。行政府から出頭要請が来ただけだ」

「出頭要請って...司法府の人間が来るなんて、これじゃ、まるで犯罪者扱いじゃないですか」

「まあ、行政府とは、昔、色々あったからな。信用はされていないということだろう」

シュウヤが他人事のように軽く言って笑う。

「おじさん...」

「心配はいらない。話が済めばすぐに戻る。ハジメにもそう伝えておいてくれ」

「分かり...ました」

セイヤが頷くと、シュウヤは男たちに連れられて部屋を出て行く。

シュウヤと、ハジメと、この図書館。それにミツバ...

それは、今の自分を形づくるのに必要不可欠なピース。

それが、不意に失われたら、自分はきっと自分を見失う。それらはそういう存在だ。かつて自分は、家族というその大切なピースを、突然奪われた。心に穴があいてしまったような、言いようのない空虚な感覚。あんな苦くて痛い感覚をもう二度と味わいたくはなかった。

「戻って、くるよな...」

自分に言い聞かせるように、呟く。しかし、息苦しさを感じて、身を支えるようにデスクに付いた手は僅かに震えていた。また何かを失うかもしれないという、そんな予感めいた思いに囚われたセイヤの心を恐怖という感情が浸食していく。怖くて、その場から動けなかった。

そこで、どれだけそうしていたのだろう。

「...セイヤ」

ミツバの声が聞こえて、セイヤはようやく顔を上げた。

「何があったの？ひどい顔色になってるよ？」

「大丈夫だ。きっと大丈夫だから...」

多分それは、ミツバを安心させるためというよりも、自分に言い聞かせるために呟いた言葉だった。でもそんな言葉にもミツバは、

「...うん」

と、素直に頷いた。たったそれだけのことで、安心感に包まれる。

「ミツバ...ごめん...」

そんなことをすべきじゃないと思いながらも、縋るようにその温もりだけを求めて、その華奢な体を抱き寄せ、ほのかに花の香りのする髪に顔を埋める。溢れ出しそうになっていた涙を、ぎゅっと目を閉じてやり過ごす。そこで無意識に軽く鼻をすすると、すかさず腕の中から、ミツバの声が聞こえて来た。

「セイヤ...あのさ...この体勢で、鼻水垂らさないでよね」

理不尽な言われように、思わず身を離して抗議する。

「んなこと、するか」

目を合わせたミツバは、しかし殊の他、固い表情をしていて、セイヤはそれに狼狽して言葉を失う。

「もう大丈夫？」

「...うん」

「なら良かった。ご飯にしようよ」

どこかぎこちない表情のまま、それでも僅かに笑みを浮かべてみせて、ミツバは部屋を出て行く。

—— 何やってんだよ、俺は...

あいつの想いには気付かない振りをしているくせに、こんな時ばかり、都合良くミツバに寄り掛かる。

—— 俺、最低だ。

セイヤが自己嫌悪に包まれながら、キッチンに戻ると、そこには思いがけずハジメがいて、鍋の中身を覗き込んでいた。

「いたのか、ハジメ...」

「ああ、悪い、デートの邪魔するつもりはなかったんだが、匂いに誘われた。地下の書庫で探し物してたら、昼、食いつばぐれてさ...」

「多めに作りましたから、良かったら一緒にどうぞ」

セイヤが答える前にミツバがそう言うと、悪いねといいつつ、ハジメはさっさと席に着く。セイヤはその向かいの席に座る。ミツバは一通りの配膳を済ますと、自分はそのまま帰り仕度を始めた。

「ミツバは食べてかないのか？」

「うん、あたしはおかゆって気分じゃないから、今日は帰る。お大事にね」

「何か、邪魔してごめんね、ミツバちゃん」

「いえ...別に、『デート』って訳じゃないですから」

作ったような笑顔でそう言って出て行ったミツバを見送って、ハジメが何気なく聞く。

「お前、彼女に、何かしたる？」

「何かって、する訳ないだろっ」

「...ああ、そっか」

ハジメが納得したように笑う。

「何だよっ」

「何もしてない方の、不機嫌か。女の子の扱い、もう少し考えた方がいいぞ、お前」

「不機嫌...？」

「何か、怒ってたじゃない、彼女」

「え...」

「お前、鈍すぎ。普通、好きでもない奴の為に、こんなもの作らないだろう。これ、お米から鍋で焚いたって奴じゃないの。手間暇かけてさ」

「.....」

「その気がないんなら、甘えるべきじゃないと思うぞ」

何となく後ろめたく思っていたことをまんま指摘されて、思い切り耳が痛い。

「...それは、分かってる」

「なら、いいけど」

そこで、会話は途切れてしばらく男二人で無言の食事が続く。

セイヤは頭の中を整理するように、ミツバとのやり取りを思い返す。そしてハジメの言うように、やはり甘えていたかも知れないという結論に至る。そうして一通り、そちらの気持ちの整理がついたところで、セイヤはもうひとつの大事な用件を思い出した。

「なあ、ハジメ、おじさんのことだけど...」

皆までいう前に、ハジメが頷いた。先刻の騒ぎを、こいつも気付いていたらしい。

「ああ、分かってる。心配はいらない。親父は何も知らないから、すぐに帰って来るよ」

「...どうして、おじさんが？」

「この世界の知識を管理しているから、何かあると呼び出される。それは、今に始まったことじゃないから」

「でも、司法府の人間を差し向けるって、普通じゃないだろう」

「親父は前に、行政府と諍ってね。以来、呼び出しとかことごとく無視していたから。呼んでも素直には来ないと思われたのかもな」

「.....お前、心配じゃないのかよ」

「別に心配するようなコトじゃないだろう」

「...そう、なのかもしれないけど」

きっと、シュウヤはいつでも、きちんと帰って来たのだろう。決定的な別離を経験したことの無い者には、こういう不安は分からないのかも知れない。

「...おじさんは、何を知っていると知られてるんだ？」

「何って...まあ、このタイミングで呼び出されたのなら、恐らく、ワイズマンコートが何をしようとしているのか...とか」

「ワイズマンコートって...オクトグラン初期に存在した組織だろう。そんな大昔の組織のことが、何で今更取り沙汰されるんだよ」

「そんな時代錯誤な名前を使って、行政府に声明を送りつけた人間がいるんだよ。軌道予報にズレが生じるのは、自分たちがそこに作為を加えたからだとか何とか」

「え...？」

ハジメは今、あの騒動が人為的に引き起こされたものだと言ったのか。

「って...お前が、どうしてそんな上層部の情報、知ってたよ」

セイヤが訝しむような顔を見ると、ハジメが声を下げて言う。

「そこは、ほら、うちには行政府のトップに繋がってる人間がいる訳だから、さ」

行政府のトップ...つまり、二妃カレン。その娘のクルミは、去年から、この図書館で司書として働いている。情報の元は、そこ、ということか。

「お前、クルミさんにそんなコトやらせてるのか...」

「俺がやらせている訳じゃない。口が軽いんだよ、彼女は。世間話をしてると、そんな話がちょくちょく出てくる」

―― 世間話。

一体、どういう世間話なのかと思う。

それが、世間話を装った誘導尋問であるのは、想像に難くなかった。

「お前さ、人のこと言えないじゃないかよ。クルミさんだって、お前のこと...」

「そんなんじゃないんだよ、あいつは。ま、お子様なお前には、分かんないだろうけど」

ハジメが曖昧な笑みを浮かべる。

「おこ...」

憤慨するセイヤをそのままに、ハジメは席を立つ。

「仕事に戻る」

「...待てよ、まだ話の途中だろうが。おじさんは、ワイズマンコートの何を知っていると」

「何って、お前なら、そのぐらい、もうとっくに調べ終わってるもんだと思ってた。ワイズマンコートを創設した八賢者のひとりで、そのリーダー的存在だったのが不動という科学者。うちはその直系の子孫ということになる。だから、この公文書館の管理を任されている。つまりワイズマンコート創設以来の知識を全て把握しているのが、我が不動産なんだ」

「全てを...知ってる」

一体それは、どれほどの知識の量なのか。見当も付かない。

「それで、都市軌道を勝手に動かすことなんて、本当に出来るのか...」

「さあ、どうだかな。行政府のお偉いさんも、恐らく、そこを確認したくて親父を呼んだんだろう...」

―― もし、そんなことが可能だというのなら。それは、この世界を根本から変える。

キセキは、世界の理を解き明かすのは、ワイズマンコートの子孫の使命だと言った。

世界の理を解き明かすというのは、そういうことなのか。

この世界を変える...その為に。自分はその為に、ここにいるのか。そして、世界を変えなければ、ユノは取り戻せないということなのか。自分のやっていることは、まさかそういうことなのか...

―― そんな途方もないことを自分は...

気が付けばもう、ハジメの姿はなかった。ハジメもまた不動の名を継ぐ者だ。ならば彼も、『その方法』を、探し続けているのか。...考えたこともなかった。

8 窓際のひなた

翌朝出勤すると、すぐに師長室に呼び出された。結局、シュウヤは昨夜は戻らず、その帰りを待っていたセイヤは本を読みながら徹夜をしてしまった。欠伸を噛み殺しながら、カズマの元へ赴くと、紙切れを渡された。

「え...辞令ですか？」

師官章を貰ったばかりで、これから経験を積んで一人前の地図師になろうというこの大事な時期に、本来の仕事を外される。その事実は、少なからずセイヤに衝撃を与えた。

「ま、そんなに落ち込みなさんな。期間限定の出向辞令だから、向こうでの用が済めば、すぐに戻して貰える」

「はあ...」

「大丈夫、大丈夫。お前は、地図描くのはズバ抜けてるから、何カ月か休んだって、全然問題ない。色々な経験を積むのも、先々の糧になるしな。元気で行ってこい」

「...はい」

元気でと言われても、その返事は元気とは程遠かった。

師長室を出て、丁度行き会ったミツバに異動の話をする、たちまちその顔が曇る。それでも、ミツバとは、少し距離を置くべきなのだろうと思っていたから、これはこれで、いい機会なのかも知れなかった。ミツバにしても、セイヤがそばに居なければ、他に目が向くということもあるかも知れない...実は、そんな身勝手な期待もしていた。

身の回りのものだけを纏めて、セイヤは指示されたフロアへと向かう。

そこは行政府の総務エリアで、そこにはいわゆる事務方の仕事をしている人々がいる。特別専門職の師官であるセイヤには、あまり馴染みのない場所だった。思い起こせば、入庁の時にIDを作って貰いに来て以来だ。

辞令と一緒にもらった地図を見ながらそのエリアを抜けて、他よりも見るからに豪華な内装が施された廊下に出る。自分には思い切り不釣り合いなその雰囲気、一瞬、場所を間違えたかと思って地図を見直す。

――間違っ、ないよな。

指示された場所は、この先の一室だ。その廊下の突き当たりの扉の前には、SPが立っている。セイヤの記憶に間違いがなければ、そこは、行政府最高顧問室。つまり、この世界で一番偉い人がいる場所だ。セイヤの目的地はその隣室。それが、指示された部屋だった。

重々しい空気に緊張しながら、扉をノックする。

と、中から応答があって、入って構わないというような声が聞こえた。

「失礼します」

言って扉を開くと、見覚えのある顔がそこに並んでいた。

「おや、意外な駒が来たね」

そう言って人懐こい笑顔を見せたのは、四宮キセキだった。

「これは、判断に迷うところね」

その隣で、セイヤの顔を見ながら思案顔になっているのは、八雲マドカだ。

「ともかく、これで各部署のメンツが揃った訳だから、答えを出すか？」

そこにいた別の一人が、そう言う。

「ちょい待ち、カオル。少し考えさせて...ねえ、ナナミはどっちに賭ける」

いきなり話を振られたナナミは、少し困ったような笑みを浮かべながら口を開いた。

「私の立場からしたら、先輩達を前にして、『左遷』の方になんか賭けられませんよ...」

――えっとお、話が見えない。

「あの...」

セイヤが遠慮がちに声を掛けると、キセキがポンと手を打った。

「キミはどっちにする？」

「どっちというのは...？」

「うん。僕たちがここに集められたのは、栄誉なコトのか、はたまた左遷されたのかって話。どう？」

「...ははあ...そういう」

セイヤがようやく状況を飲み込むと、さっそく各人によるプレゼンが始まった。

「カオルはどう見ても飛ばされた口よねえ。統括官ほぼ決まっていたのに、急にこっちと差し替えられたわけだから」
マドカが、結構デリケートと思われることを遠慮なく言う。

「いや～、俺はほら、運よく定期健診の結果が思わしくなかったからさ、統括官みたいな激務は、今回はパスした方がいいだろうって話で」

「...運よくね」

「僕も、しばらくゆっくりしてこいって言われたよ。うちの師長に」

「つまり、ここは閑職ってことになる訳よね」

「お前は、先般の予報ズレの責任を取ってで。ナナミちゃんはその巻き添えで、って、俺達もう左遷で決まりなんじゃないのか」

カオルが苦笑しながら言う。

「私は、責任取らされた訳じゃなくて、師長が、『君が一番、この件の真相を知りたいんじゃないかと思って』って言われたから、『その通りです』って話なのよ...」

「そっち方面から話を見て行くと、ここに地図師長の隠し玉が来ているのも納得いくんだよね～」

キセキがセイヤを品定めするように眺める。

「隠し玉って、何のですか？」

「ああ、キミは、もの凄く期待されてたってこと」

「期待、ですか？」

「だって、新人の研修に師長補付けてたって、あれ、前代未聞だよな？」

キセキがカオルに確認するように言う。

「ん、まあな」

「ええ～そうだったんですか？」

「だからキミは、優秀な、地図師の、卵、」

キセキが宣言するように、セイヤを指さす。何だかくすぐったいような、照れ臭いような気分になる。だが、それに続く言葉に、そんな気分はあっけなく吹き飛ばされた。

「でも、二つの卵のうち、ここに来たのは一つだけなんだよねえ。なら、1/2の確率でキミの方が来たのは、不動館長が拘束されたことと関係があるのかなと」

「館長、拘束...されてるんですか？」

「みただよ。だから、その関係者であるキミの方がここに来たのかなと。つまり、左遷の方になるのかなと。集められた理由も理由だしさ」

「...理由って、俺達、何でここにいるんですか？」

「あれ、新人くん、そこまでは聞かされてない？それはね...」

―― 軌道予報にズレを生じる原因を究明し、予報精度の回復を図ること。

「壮大かつ、崇高な任務。それが僕たちに与えられたお仕事」

「...マジすか」

それはほとんど、この世界の理の究明と同じ意味を持つ。それをたったこれだけの人数で。

―― って、夢物語だろうが。

と、思わずツッコミたくなる様な案件。それなりに、優秀と思われる駒は揃えているようだが、それにしても、その夢物語を本気でやるなら、もっと大掛かりなプロジェクトになってしかるべきだろうと思う。

―― 左遷の方みたいな気がしてきた。

それでも、ここには憧れのキセキがいて、おまけにナナミもいて。

居心地は良さそうな辺りが何とも...である。

もしかしたら...

この面子なら、何となく...

ふと思いついた言葉は、ほとんど無意識に呟かれていた。

「でも、結果を出せば、俺達、伝説になるかも。ですよ〜？」

瞬間、そこにいた皆の視線が、一斉にセイヤに注がれた。それに気付いて初めて、自分が何を言ったのか、後から自覚する。

「あ、いえ、キセキさんがいれば、何となくまた、奇跡が起こるのかな、みたいな...すみませんっ、適当なこと言いました」

「だめだめ、大きく出るなら、そこで突き抜けないと。伝説になるつもりなら、尚更だよ〜」

キセキが笑いながら指南する。そこをマドカがフォローする。

「ああ、キセキの言葉を真に受けると、痛い目に会うからね、気を付けなさいね、新人くん」

「あ、ちなみに、僕のキセキは奇跡じゃなくて、貴石の方だからね。ミラクル仙人みたいに言われるのは光栄だけど。そうそう奇跡は量産できない。それに、そんなにしょっちゅう起こることは、そもそも奇跡とは言わないしね」

「ははは...そうですね」

すっかり考えなしの新人くん、そのまんまになっている自分の姿にへこむ。

―― そっか。キセキって奇跡って意味じゃなかったのか。貴石...なんだ。

そんなことを思いながら、貴石という言葉がゆらゆらと、セイヤの記憶回路に落ちて行く。と、その中から、不意に幾つかの単語が浮かび上がって、落ちて来たその言葉と結びついた。

―― 貴石...四宮

...ワイズマンコート...末裔

...マニチャトウーラ...マニチャトラス

...ああ、そういうことか。

そこに繋がり合った言葉の集合から、セイヤはキセキがどういう人物であるのかを理解した。

昨日、ハジメに言われてから、セイヤはワイズマンコートについて一通りの資料を漁った。四宮という名は、ワイズマンコート創設の八賢人といわれる八人の科学者の中にあつた。そして、その四宮の末裔は、代々、第四の都市マニチャトウーラの市長を務めている。

マニチャトウーラは、オクトグランのエネルギー源となるマニチャトラス鉱石採掘の為に運ばれた資源衛星で、巨大な鉱石の塊に採掘プラントが整備された鉱物都市だ。エネルギーのリサイクルが進んでいるとはいっても、オクトグラン維持の為に、毎年一定量の採掘は必要であり、そのプラントの開発を手掛け、事実上、その採掘を独占している四宮は、この世界では大きな影響力を持つ。そして、マニチャトラス鉱石はオクトグランの貴石と呼ばれている。

どちらにしろ、キセキとは、凄い名前をつけたものだと思う。そしていずれは、このキセキがマニチャトウーラの市長...ということになるのだろう。

―― めちゃめちゃ有名人だったんじゃない。

そう思うと、満更、ここは窓際という訳でもないんじゃないかとも思った。

その後、彼らは、行政府最高顧問であるカレンと面会し、改めて、壮大な仕事の内容についての説明を受けた。少なくとも、上層部の意向としては真面目にこの夢物語をやる積りであるらしかった。必要があれば、人員の増員も考えるというお達しだった。そうして、マドカをリーダーに、そのプロジェクトは始動することになった。

「まさかとは思ったけど、本当にこんな所に住んでるのね。新人くんが物好きなのだということは、良く分かったわ」

「新人くんではなくて、霧月セイヤです、マドカさん」

「ああ、はいはい。セイヤくんね、セイヤくん...」

そう言いながらも、マドカは興味深そうに、セイヤが生活の拠点にしている...とは言っても、たまに水場を利用するだけの簡易居住スペースのあちこちを覗き込んでいる。

軌道予報調査室という名前の付けられた部屋は、最高顧問室の隣に今も存在していたが、そこに人の気配があったのは、ほんの数日のことで、いつの間にかそこは静かな開かずの間となっていた。

というのも、調査の為に必要な資料の量は膨大になることが予想され、それを運び込むには、その部屋ではやはり手狭であり、尚且つ、資料移動に掛かる手間を考えると、ここは人間が動いた方が早いというマドカの判断で、資料の宝庫である公文書館の一角を、軌道予報調査室の分室として借用することになった為である。

そして、その場所として占拠されたのが、セイヤの私物が置かれていたそのスペースだった。彼らはそこに携帯端末を持ち込んで、あっという間にそこを調査室の最前線基地にしてしまったのだ。書庫のあちこちから持ち込まれた資料の山は、一週間もしないうちに、部屋を埋め尽くし、すでに足の踏み場を探すのも難しい状況になっている。

セイヤがこのメンバーに選ばれたのは、結局、資料の出し入れをするのに、その所在に詳しい人間が必要だったからなのではないかと思うぐらいに、年長の三人はもの凄い勢いで資料の精査をしている。過去の都市移動のデータを片っ端から読み直し、その軌道を再分析しているのだ。キセキの端末操作の早業は知っていたが、マドカもカオルも信じられないぐらいに仕事が速い。特に、マドカの状況判断と、決断の速さには目を見張るものがあった。

— おっかないだけの人じゃなかったんだな。

あんな扱いをされていたナナミでさえ、その能力には敬意を払っているようだった。

そんな状態で、いつの間にか、ハジメやクルミまでも、本来の仕事の合間に、こちらの手伝いをさせられている始末だ。そもそも、彼らはこちらの仕事の進捗状況が気になっている様で、暇さえあれば覗きに來ているのだから、それは当然の成り行きとでもいうべきか。セイヤとナナミは、共に資料の束を抱えながら、書架の間を行き来するのが日課になっていた。

朝、仕事始めにその日の調査方針をディスカッションして、総出で資料の収集に掛かる。あらかた資料が集まると、年長組はデータ解析の作業に入ってしまうから、自然、使い終わった資料を元に戻すという作業は、セイヤたちの仕事になった。初めセイヤは、キセキのデータ解析を後ろで見ていたのだが、ナナミが一人で資料を運ぶという重労働をしていることに気付いて、すぐにこれを手伝うようになった。

「重くないですか？」

「平気平気。この手の片付けは慣れているから」

聞けば、マドカは整理整頓が苦手なタイプらしく、その補佐官であるナナミは、日常的にその後始末をしていたのだという。そういう細かい所にこだわらないから、仕事が速いのかも知れないと思う。

そんな日課に慣れて来た頃、ある時、資料を書架に戻しながら、セイヤはほんの雑談のつもりで、ずっと気掛かりがったことをナナミに聞いてみた。

「...先輩は、この仕事が終わったら、また軌道予報室に戻るんですか？」

「そのつもりだけど、どうして？」

その理由は、ナナミの病気に関することで、自分がわざわざそれを調べたのだと知ったら、もしかしたら気を悪くされるかも知れない。そう思いながらも、何となく、ナナミが作っている壁のようなものを取り払いたくて、セイヤは慎重に答えを返す。

「ああ、いえ...電子機器とか多い場所は、体に良くないって、ちょっと本で読んだから。軌道予報室みたいな場所は大丈夫なのかなって思って...」

「何？ 心配してくれたの？」

「...まあ...そんな感じで...」

「ありがとう」

真っすぐに向けられた笑顔に、思いがけず胸がきゅっと苦しくなる。

— やべえ...俺、重症かも...

湧きあがる感情を押し留めるのに、胸を押さえ、慌てて視線を反らして俯いた。

気を抜いたら、抱き寄せてしまいそうで。

仮にも仕事にこんな場所で。

それはかなりの不謹慎...

「でも、辞められない理由があるから...」

「...理由って？」

どこかうわの空で、オウム返しをする。と ——

「私は...父の...無念を晴らさなければならないの...」

予期せぬナナミの重い言葉に、うわついた気持ちが一瞬でしぼんだ。セイヤは思わず顔を上げる。その言葉とは裏腹に、ナナミの顔は穏やかに笑顔を浮かべていたが、彼女の目は、どこか遠くを見ていた。

「私の父は、五年前、あの事故の時、軌道予報師長だったのよ」

「.....」

「結局、あの事故のはっきりとした原因は分からなかったけど、最終的に父が責任を取って役を退くということで、決着がついたわ。あれだけ多くの犠牲者を出しておいて、師長である自分に責任がないとは言えないって、上層部が決めたその決定を父が受け入れたから。でも退任した後も、事故の惨状を目の当たりにした父は、自分を責め続けてね...やがて心を病んでしまった。おまけに事故の事後処理に奔走したことが原因で、病にも取りつかれて...今は、サブタディヤーナの療養所で、寝たきりの生活をしているわ」

「その病気って、まさかマニチャトラス中毒症...ですか？先輩と同じ...」

「そう。私は父の看病をしていて、間接的に罹患したの。だから、症状も軽くて済んでる」

セイヤはナナミの思いがけない告白に、黙り込んでしまった。

この世界で、主に、ゲートを動かすエネルギー源として用いられるマニチャトラス鉱石には、毒性がある。もちろん、エネルギーに変換する過程で、その毒性に触れないような処理は施されるのだが、今の技術では、その完全な無毒化は出来ず、ゲート周辺には常に微量の有毒物質が漏れ出ている。

行政府が人のゲートの行き来に制限を設けているのも、都市移動の後に健康診断が義務付けられているのも、そういう理由からだ。そして、ゲートキーパーが、その病の予防の為に、副作用を承知の上で薬を服用し続けなければならない訳も、彼らの多くが、三十代で退任するのも同様の理由からである。

「私は、五年前の事故の原因を究明して、心を病んでしまった父に、あなたは何も悪く無かったって言ってあげたいの...だから、軌道予報師を辞める訳にはいかないのよ...」

淡々とそう語るナナミの中は、どれだけの想いが押し込められているのだろう。涙ひとつ見せずに、こんな話が出るようになるまでに、一体どれだけ、その感情を殺さなければならなかったのだろう。そう思ったら、その体を抱き寄せていた。

「...セイヤ...くん」

戸惑うようなナナミの声に、セイヤは更にその腕に力を込める。

「俺にも、手伝わせて下さい。俺だって...知りたいから...父さんや母さんが死ななければならなかった理由を...」

—— どうして、自分はひとり取り残されなければならなかったのか。

それは仕方のない運命だったのだと、無理やりに自分を納得させて生きて来た。そこに理由があるのだというなら、自分はそれを知りたい...いや、知らなければならぬのだと。そんな思いに囚われる。

「あなたも、あの事故で大切なものを失くしたのね」

ささやくように言われて、思わず涙がこみ上げた。すると、ナナミの両手がセイヤの背中に回された。

「大丈夫...もう一人じゃないから」

慰めるつもりが、いつの間にか慰められる側になっていた。

「...それ、俺が言いたかったのに」

不本意そうにそう言うと、年上の彼女は、彼の腕の中で肩を揺らして笑った。

どちらかと言うと今は、自分の方が面倒を見て貰う側なのだろう。—— 年齢的にも、精神的にも。それでも、そんな

自分にも、彼女の為に出来ることがあるのかもしれないという発見は嬉しかった。いつか二人で、その理由を見つけよう。その時には絶対に、こいつは頼りになる男だと思わせる。たった今、そう決めた。それはまだ、彼女には内緒だけど。

――そして、いつか...

9 世界を動かす貴石

久しぶりの休みに、ナナミは病院に来ていた。病気の発症が確認された人間は、定期的に検査を受けることが義務付けられているのだ。今回も特に問題なしの結果を貰い、休日の残りをどうしようかと考えながら、待合室で会計の順番待ちをしていた所に、カオルに声を掛けられた。

「お、今帰りか？」

「こんにちは」

「具合は大丈夫？」

「はい、問題ありません」

「それは良かった」

「カオルさんは、お薬ですか？」

「ん、まあね。ついでに、先輩のお見舞い...ああ、待ち人来たるだ」

そう言って、カオルがナナミに別れを告げる。カオルの姿を追っていくと、その先に花束を抱えたマドカが歩いてくのが見えた。連れだって歩く姿は傍から見てもお似合いで、マドカは仕事中には決して見せないような女性らしい柔らかな笑顔を見せている。カオルに言われてナナミに気付いたらしいマドカは、そんな笑顔のままこちらに手を振った。ナナミは慌てて立ちあがって、軽い会釈を返す。

―― 二人、付き合ってるのかな。

その後ろ姿を見送りながら、そんなことを思う。

―― 俺と、付き合ってくださいませんか。

書庫で抱き締められてから数日して、セイヤにそう言われた。

―― 一生懸命なんだよねえ。それに、真剣で、真っすぐ。

その時の彼の姿を思い浮かべると、思わず笑みが零れる。それでも、その答えは保留にしてしまった。真っすぐ過ぎて、曖昧な答えは許されないと思ったから。自分の気持ちをきちんと整理してからでないと、その答えは出そうもなかったから。あんな話をしたから、同情したのかも知れないという気もするし...。今、自分の気持ちは、間違いなく全部、父親の方へ向いている。

―― 恋をしたら...

その気持ちが揺らいでしまいそうで、辛い境遇から逃げてしまいそうで、それが怖い。優しさで温められたら、気持ちが折れてしまう。...そんな気がしてならないから。まだ、決心は付かなかった。

マドカが病室に入っていくと、兄のユキトはベッドの上で本を読んでいた。

「調子はどう？」

「まあ、良くも無く、悪くも無くかな」

「そう。なら、とりあえず良かった。花活けて来るわね」

マドカはカオルをそこに残して、部屋を出て行く。

「御無沙汰してました、ユキトさん」

そう挨拶をして、カオルはベッドサイドの椅子に腰を下ろす。

「今は、あいつと一緒に仕事してるんだって？」

「ええ。何か上から遠大な課題を押し付けられまして...」

「いいなあ。面白そうじゃない、謎解き。俺なんか、毎日退屈で」

「お察しします...」

少しおどけて言うと、ユキトが笑う。

「たまには、お相手しましょうか？」

カオルが棚に置かれたチェス盤を指すと、ユキトの顔が嬉しそうに綻ぶ。

「カオル、お前、少しは、腕上げた？」

「上げましたけどねえ...師匠は強いですからねえ...おまけに、退屈しのぎに、毎日手筋の研究なさってるでしょ？」

「そうでもないよ。...ああ、短路ルールでいいか？」

「ええ...構いませんよ」

「長引くと、集中力切れちゃうからね...」

ユキトが少し残念そうに言って笑う。

ユキトはカオルがゲートキーパーになった時に、指導官として付いてくれた先輩だった。カオルの研修が終わったすぐ後に倒れ、以来、入院生活を余儀なくされている。あの事故の時に、現場の後処理に関わったことがその原因になったのだろうという話だ。彼は、ゲートキーパーに義務付けられている発病のリスクを抑えるための薬を飲んでいなかったのだ。

—— 子供が欲しかったのだ、と。

ユキトは言った。

彼にはその頃、結婚を考えている相手がいた。薬には、生殖能力の低下という副作用がある。薬を飲み続けている限り、子供を作ることは出来ない。だから、実は転職も考えていたのだという。その矢先の事故だった。その後の人員不足で、辞める機会を逸し、そのまま仕事を続けていたことが、発病の要因になったのか...

それから二年して、彼は病に倒れた...

普通の社会生活と引き換えに、その後、ユキトは結婚して子供も授かった。その子供は生まれながらにして、発病のリスクを負うキャリアになるという。そこまでしても、その幸せが欲しかった —— そんなユキトの強い思いに、カオルは圧倒された。

自分には、そこまでの覚悟はないから。マドカを手に入れるために、失うものの大きさに、怯まずにはいられない。自分はそんな弱い人間だ。そんな自分が、マドカを支える存在になどなれないと、分かっているから...。いつしか心のどこかで、逃げ出すタイミングを計っている。

ユキトが駒の数を半分にして、盤上に並べる。短路ルール、即ち、簡略ルールの場合、使えるフィールドは、天界と地上の二つ。こうすると、ゲーム時間が大幅に短縮できるのだ。互いに駒を並べ終えて、ゲームが始まった。

相変わらずユキトの配置には、攻め入る隙がない。

――一度、前線を下げて、フォーメーションを組み直すか...

長考の末、カオルが駒に手を伸ばすと、そこでユキトの声が掛かった。

「ここで逃げたら、全部、崩れるぞ」

「え...」

摘みあげた駒が中空で止まる。だが、咄嗟に他の手も思いつかずに、考えていた場所へ駒を置くしかなかった。

「ほら、ここに付け入る隙が出来た。で、ここをこうして、こうすると...」

「うげ...」

「な。チェック」

「相変わらず、容赦ないですね...」

「お前はさ、体裁とか気にしすぎなんだよ。自分のみっともない姿とか、人には見せられない性質だろう」

「...そうですかね」

「...辛いぞ、そういうのは」

「.....」

「マドカはさ、強い女だから。おまえぐらいちゃんと支えてくれるぞ」

「ユキトさんっ」

不意打ちに狼狽するカオルをよそに、ユキトは畳みかける。

「うん。だから、お前みたいなのには、絶対おススメ、お買い得」

――相変わらず、容赦が、ない。

「なに？早速、始めてんの？」

そこへ花瓶を抱えたマドカが戻って来て、男同士の内緒話は強制終了となった。

「...あれ...何よ。もう負けちゃったの？カオル、よわっ」

「短路ルールだっの」

「にしても、早すぎ。なっさけない」

――たく、ホント容赦ないな、この兄妹は。

カオルは苦笑して立ち上がった。

「じゃ、俺は、これで...」

「あれ、もう帰る？じゃ、これから一緒にお昼行こうよ」

「お前は、もう少しいれば？」

「いーの、いーの。今日は届け物しに来ただけだし。じき、義姉さんも来る時間だし。じゃ、兄さん、またね」

「おう。お幸せにな～お二人さん」

「もう、兄さんっ」

これしきのこと、みるみる顔を赤くするマドカを、横で面白がって見ていると、いきなり腕を掴まれて、「行くよ」と、病室の外に連れ出された。

――これしきのこと...

顔が赤くなったりって、断じてない、筈だ。

そう自分に言い聞かせて、マドカを腕にくっつけたまま歩きだす。すると、下から、顔を覗きこまれるような視線を感じて、そちらに目をやると、マドカと目が合った。

「何だよ」

「うん...赤いよ、顔」

「ばっ、そんな訳...」

否定しかけた途端に、頬が火照った。

―― 玉砕。

「...かわいい」

そう言ったマドカの腕を勢いよく振り払う。

「帰るし」

「うわ〜うそうそ、ごめん。待ってよ、お昼ごは〜ん」

「...待って欲しいのは、俺なのか、それとも昼メシか？」

「カオルについてくるお昼ごはん」

「何だよそれは」

「二人で食べるのが嬉しいんじゃないの。鈍感っ」

「どんっ...」

「カオルは、私と一緒にじゃ、楽しくないわけ？」

ないわけないのか。俺は――

―― 一緒に楽しい。

それで、答えは出たということになるのか。

「俺はさ...ユキトさんみたいには考えられないから、きっと仕事は辞められない...」

「何...いきなり...」

「お前は、それでもいいのか？」

吐き出すように言うと、マドカがふっと笑った。

「そっか...何か言われたんだ、兄さんに。ごめんね、私、ちょっと愚痴こぼしすぎてたかも.....で？ いって言ったら、どうにかなりそう？」

「.....いい...のか...？」

「私は、あなたが尊敬する、ユキト先輩の妹なのよ？」

ゲートキーパーがどういう仕事なのかも、カオルが自分の将来について、負い目を持っていたことも、端から承知している。それでも、マドカが寄りかかっていたと思った相手はカオルだけなのだ。側にいて欲しいと思ったのは。

「そんなことが気になるぐらいなら、最初から、ゲートキーパーになんか惚れないわよ」

「...どうしよう...もの凄く...嬉しい」

「ばかね」

少し照れたように笑って、マドカはフロアを先に行く。そして少し離れた所で振り向いて声を掛ける。

「早くしないと、席埋まっちゃうわよ」

自分も寄りかかっていいのだと、そう言われたことで、こんなにも気持ちが軽い。

―― 一緒に楽しい。

今は素直に、それが嬉しい。歩く速さをあげて彼女に追いつくと、その思いを伝えるように、初めて手を繋ぎ合わせた。

二人が、病院近くのカフェレストランに着くと、すでにお昼の混雑は始まっていて、席はほとんど埋まっていた。辺りを見回すと、四人掛けのテーブルに一人で座っていた人物が、こちらに向けて手を振る姿が目に入る。

「お〜い、やっほ〜」

そこで子供みたいに手をぶんぶんと振りまわしていたのは、キセキだった。

「たまの休みに、出かける先が揃ってこんな場所って、どうなのかしらね」

マドカが苦笑する。マニチャトゥーラ出身のキセキは、発病こそしていないが、キャリア認定されていて、月に一度の検診が義務付けられている。だから、彼も病院帰りなのだろう。

「僕、お茶飲んだら、もう行くから、ここどうぞ」

「いいわよ、ゆっくりして行きなさいよ」

マドカが言うと、キセキが肩を竦める。

「いい雰囲気のとこに割り込むほど、僕、野暮じゃないし」

ちゃらちゃらしているくせに、そういうとこは妙に鋭い。言われて、当たり前のように繋いでいた手を慌てて離す。

「いいからっ」

照れ隠しに、思わず語気が強くなる。

「そう？ じゃ、も少しいよかな。実は検診の後って、何か気が滅入るから、ひとりは辛かったんだよね...ナナミちゃんには振られちゃったし...」

「ああ、ナナミも検診だったみたいね。ていうか、あんた、寂しいからって、誰彼、声掛けてるんじゃないでしょうね」

「一応、人は選んでるつもりだけど...」

「ならいいけど」

そんなやり取りの後、二人が腰を落ちつけたところで、ふと思いついた風にキセキが言った。

「...そういえば、選ぶと言えばさあ、うちのメンバーって、五年前の事故関係者ばっかだよな」

「え？」

キセキにそう言われて、マドカはメンバーの経歴を思い浮かべる。

マドカは兄ユキトがそれで発病した。そのユキトはカオルの指導官で、ナナミの父親は、その当時の軌道予報師長だったと聞いたことがある。そして、セイヤは事故の直接の被害者だ。

―― 見事に。

きれいにパズルが組み上がったような感覚に、マドカは思わず身震いをする。それで何という訳でもないのだが、偶然にしては、ハマりすぎているような気にさせられる。

「でも、キセキは別に、事故とは関係ないじゃない？」

「まあ、直接はそうだけど、マニチャトラス鉱石が事故の原因だったかもって説を取れば、僕はその産出地の出な訳だから」

「キーワードをマニチャトラスに変えるんなら、病院とは全く縁のないセイヤは、その括りには入らないでしょう。仮説不成立...」

「あれ、知らない？ セイヤのお父さんは、マニチャトラスの研究者だったんだよ。僕、昔、マニチャトウーラの実家にいた頃に、会った事あるもん」

「うそ...」

「それって、もしかして、霧月シンゴ博士？ エネルギー工学の？」

カオルがそこで口を挟む。仕事柄、マニチャトラス鉱石を扱うゲートキーパーなら、基礎知識の中に、その名前が出て来る。

「セイヤの霧月って、本当にその霧月なの？」

「だって、博士も事故で亡くなってし、セイヤは博士と同じシャトウーラの出身だって言うから、そうなんじゃないの？ それに、僕本当はあの時、移動コンテナに乗ってる筈だったんだよね。それが、直前に親父にドタキャンさせられてさ。だから、こうして、何事も無く、ここにいる訳だけど」

キセキの主張に、今度は間違いなく、鳥肌が立った。

―― マニチャトラス鉱石。

その為なら、世界はどうにでも動く。

キセキの話信じるなら、あの事故を事前に予想していた者がいた可能性があるということになる。そうなれば、全ては偶然だったのではなく、必然だったのだという事に――あの事故は、何らかの理由があって、起こるべくして起こったものだという事になるのではないか。

多くの人の人生を捻じ曲げてしまったあの惨事が、誰かの意志によるものだとしたら...

―― 一体、そんなことが...許されるのか。

「...キセキ、あんたその話、どこかでした？」

「え、いや...してないと思うけど」

「金輪際、誰にも言うんじゃないわよ」

「俺も念押ししておく。誰にも喋るなよ」

「え...僕、何か変なこと言った？」

「あんたの一言で、世界が変わるかも知れないって事よ」

マドカの言葉に、キセキは戸惑ったような顔をする。

この偶然は、必然なのか。

自分たちが、この事実と出会ったことには、何か意味があるのか。知れば、その真実を追い求めずにはいられない境遇にいる自分たちが、それに出会ってしまったのは。

あの事故が、誰かの作為によるものだというなら、そこには軌道を動かす術があったということだ。それが証明されれば――

―― 世界が変わる。

10 受け継いで来たもの

不動シュウヤが図書館に戻って来たのは、行政府に強制出頭させられてから、二週間後のことだった。図書館の一角が、すっかり行政府の人間に占拠されているのを苦笑しながら、セイヤにハジメの所在を確認した。彼らがここにいる経緯は、行政府の方で聞かされてきたのだろう。それについて、改めての確認はなかった。

「ハジメなら、最近では、地下書庫の方にいるみたいですけど...」

セイヤがそう答えると、シュウヤは頷いてそちらの方へ足を向けた。その様子は、以前と特に変わり無く、拘束されていたという割には、やつれたような感じもなかった。セイヤは取り敢えず安堵した。

シュウヤが地下書庫に下りると、思った通り、本来は施錠されている筈の部屋が空いていた。だが、その部屋の中にハジメの姿は見当たらない。

「全く、仕方がないな、あいつは...」

呟きながら、何のためらいも無く、シュウヤは書庫の隣の書棚へ向かう。不動の名を持ち、この図書館の管理者となる人間に、代々伝えられている手順で、書棚の本を何か所か入れ替える。と、書架の位置がずれて、そこに隠し扉が現れた。

ハジメには、成人となった二年前に、この秘密について教えた。今思えば、それは少し早計であったのかも知れない。ハジメは聡明であるが、大きすぎる秘密を知るには、彼はまだ未熟だったのだと言わざるを得ない。

その秘密が、自らの野望を叶える道具になるものだと知ってなお、それをただ眺めているだけで満足出来る人間は少ない。だが、この図書館の館長になるというのであれば、そうでなくてはならないのだ。

——世界を変えるという力を前にしてさえ、傍観者でいること。

それが知の管理者である者に与えられた役割なのだから。

シュウヤが扉を開くと、そこには更に奥に続く廊下が現れた。そこに足を踏み入れ、扉を内側から閉じる。そして、そこから先に進めば、多くの端末が設置された管制室に行きあたった。その部屋の中、幾つものモニターの並ぶ端末の前に、探していたハジメの姿があった。扉の開閉があったことで、シュウヤの来訪を予期していたのだろう。

「お帰りなさい、お父さん」

ハジメは驚きもせず、こちらに向き直ると、そう言った。

「どうしてワイズマンコートの名を使った？」

「何ですか、いきなり」

「何のために、行政府を掻き回すような真似をしたのだと、訊いている」

「結局、お父さんは、証拠不十分で無罪放免になったのでしょうか？ ならば、何も問題はない筈です...」

「私の質問に答えろ」

「質問？ ...何のために、という？」

「そうだ」

「この世界を変えてみようと思って」

そんなことは、さほど大層なことではないとでもいうように、ハジメが言った。

「何だと？」

「この都市世界には限界がある。だから、世界を変えなければならない。そう言ったのは、あなたですよ、お父さん。滅びることが分かっている、それを何もしないで傍観しているのは、罪だと。あなただって、そう思ったから、かつては行政府に身を置いていたのでしょう」

ハジメはそこで初めて、苛立ちを示すようにコンソールを少し乱暴に叩いた。

「それが...霧月博士を失ったぐらいで、怖気づいて、逃げ帰って来た」

「黙れ。お前は、あの事故の惨状を知らないから、そんなことが言える。軽々しく、世界を変えるなんてことが...」

受け継いだ知識は、ただ守り継ぐべきもの。

シュウヤは館長の職を継いだ時に、その先代からそう言い含められた。

だが、その知識によって、この世界の終りがあるかも知れないことを知り、また同じくその知識によって、それを回避する方法があるのだという『秘密』を知った時、ただそれを黙って見守るという道を外れた。自分になら、何とか出来るのかも知れない。そんな思いはシュウヤに行動を起こさせた。しかし、世界は簡単には動かすことは出来ず、その重要な鍵となるコードプレートを手にしないうまで推し進めた計画の歪みは、大惨事を招いた。

「我々の使命は、あくまでもコードプレートを探し出すことだ。その重要性は、お前だって分かっているだろう」
「ええ。しかし、かつての図書館長が都市限界説を唱えて、以来数百年、そうしてこそこそと探しまわって、未だそれを見つけ出せないのは、その方法が適切でなかったからだ、我々は、そろそろ気付くべきなのではないですか」
「どういうことだ？」

「ワイズマンコートは、もういい加減、この世界の表に出るべきだと、そう申し上げているのです」

「行政府と敵対してもか」

「敵対？ ご冗談でしょう。行政府は我々ワイズマンコートの意志の元に、その執行機関として作られた。つまり、我々の下僕だ。その最初の形に戻るべきなんですよ」

「お前は、行政府の上に君臨するつもりなのか...」

どうしてそんな幻想を抱くことができるのか。シュウヤは顔を顰める。

「本来、立つべきはあなただ。でも、あなたがそれをしないなら、俺が立つ。長く使い続けたマニチャトラスの影響で、人の体にはもう変化が起こり始めている。都市という環境が不変のままでは、変化を始めた人間は、いずれその環境に適応できなくなって滅びゆく運命なのだと。そう言ってやればいいでしょう。そうすれば、行政府の人間も目が覚める」

「コードプレートが見付かれなければ、誰が何を言っても、この世界に混乱をもたらすことしか出来ない。それが、なぜ分からない」

「勿論、全てはそれを見つけてからの話です。分かっていますよ。その為に、水面に小石を投じたのですから。その波紋は、思いの外きれいに広がった」

―― 波紋。

シュウヤはそのハジメの言葉の意味を考える。投げられた小石というのは、言わずもがな、あの声明のことだろう。それは確かに、行政府のなかにさざ波を起こした。

「分かりませんか？ セイヤたちが今この図書館にいるのは、どうしてなのか。あのメンバーを選んだのは、三枝ユリアですよ。かつて、行政府でああなたの右腕だった。そして彼女は、今もこちら側の人間だ」

「お前が...」

「ええそうです。俺が彼らを行政府から引き抜いた。その才能を見込んでね。この広大な知識の海からコードプレートを見つけ出して貰う為に」

―― コードプレートさえ見つけられれば、世界は変わる。

コードプレートとは、この閉じられた世界を外に開くための鍵だと言われている代物だ。

それは、隔離から数百年を経た頃のこと。伝承では、彼らの世界を包み込む空間の研究をしていたワイズマンコートの科学者が、空間のねじれを元に戻す方法を導き出したという。

彼らの主張した仮説によれば、すべての不幸のはじまりである隔離は、元々不安定であった空間に本来あるべきはずのない巨大な質量の物質 ―― 即ち、コロニーを設置したことにより、さらに当時、マニチャトラスと併用する形で用いられていた太陽エネルギーを効率よく確保するために、それぞれのコロニーを頻繁に移動させ続けていたことが、空間の歪みを増大させる結果になり、そうして蓄積された歪みが、空間の変異を生んだという。

この何もない空間の現状は、いわばパズルのピースがばらまかれたような状態であり、空間がもっとも安定する形で、そのピースを再構築してやることができれば、世界は開く。即ち、八つの都市を再初期の位置に固定してやれば、あるいは ――

その発見が、オクトグランのもっと初期になされていたら、それを喜ばない者はいなかったのだろう。だが、当時、この世界はあまたの苦難を乗り越えてようやく安定期と呼べる時期に入ったところだった。隔離から数百年を経て、まず外の状況が分からない。果たして世界が開かれた時に、自分たちは隔離以前と同じ『場所』に戻れるのか。もちろんその保証はない。そして、何より問題だったのが、その仮説を実行する為には、膨大なエネルギーを必要とするという事実だった。

――もし、失敗したら。

自分たちは、また暗黒の時代に逆戻りをすることになる。目の前にある、このささやかな平和と引き換えに、それは今なされるべきことなのか。

当時の行政府が下した結論は、『否』だった。そして、破滅と背中合わせのその研究資料は、世界を混乱に陥れる危険なモノとして、その事実を知る科学者たちと共に抹殺された。だが、いつかそれが必要とされる時が必ず来ると信じた科学者は、資料を暗号化して図書館に隠した。

それが、コードプレートが暗号碑文と呼ばれるゆえんである。

そして、図書館を継ぐ者にのみ、その存在が受け継がれていくことになった。しかし、行政府による搜索をおそれたためか、コードプレートは巧妙すぎる程に図書館の膨大な情報の中に隠ぺいされ、結果、『ある』という事実だけは伝えられたが、それがどこにどういう形で隠されたのか、今に至るまで長く不明のまま...

そしていつか、図書館を継ぐ者に代々伝えらるようになった伝承――

――かつて、オクトグランは宇宙に咲く花であった。

コードプレートには、その当時の八つの都市の様子が記録されている。

不規則に漂う都市を、その本来の配列通りに並べ、

そこに再び花を咲かせてやるのが出来れば、

この閉じられた世界は開き、我々は元の世界に戻ることができる。

――それは、図書館の継承者のみが知らされる秘密... 人に神を錯覚させる秘密だった。

「あなたが諦めてしまった夢を、俺が代わりに叶えて差し上げますよ」

――夢。

その単語に、埋めた記憶が喚起される。

――この夢を叶えるのは多分、私たちのような年寄りではなく、その次か、あるいはそのまた次か... 勢いのままに走り抜けることを躊躇しない、若い世代の者たちになるんだと思いますよ。

自分たちは、その礎となればいい。シュウヤは、霧月シンゴのそんな言葉を思い出した。

今自分たちができる事をしておけば、未来に、少しでも希望が生まれる筈だと。その小さな積み重ねが、いつか必ず扉を開く力になる。

「...変えられるものならな」

挑発するように言いながらも、シュウヤは思う。ハジメの行為もまた、未来へと向かう道程のひとつなのだろう。変化は望まぬところには訪れないものなのだから。

容認の姿勢を示した父親に、ハジメは不敵な笑みを向ける。悪くはない面構えだと思う。

「それから、本格的にことを起こすというなら、二妃クルミは遠ざけるのだな。あれは、我々の内情を探るために、この図書館に来ている」

「知っていますよ。でも、彼女は、行政府の情報をこちらに漏らしてくれる存在でもある。心配はいりません。彼女は、俺の言いなりですから」

「二妃の娘だというだけで、行政府の手先だと疑われて当然の場所へ、平気で乗り込んで来るような娘だ。お前が思うほど、甘い娘ではないぞ」

まさか。と、ハジメは思う。彼女は恋を装っているというのか。この自分の目も欺くほど巧みに。あれが全て演技だと。すぐにそうとは納得できなかったが、

「...分かりました」
とは答えた。

「...それから、今回の予報の大幅なズレは、お前が軌道予報室の端末に干渉したせいなのか？」

「まあ、そんな所です」

「この端末は、そういう目的の為に置いてあるのではないのだから」

シュウヤは咎めるように言って顔を顰める。シュウヤ自身も、五年前までは、この場所から幾度も、軌道予報室の端末に侵入していた。だが、それは予報の誤差を密かに修正するという目的のためだった。

軌道予報は、過去の都市移動を記録した累積データを元に計算される。しかし、そのプログラムに自体に問題があるのか、データの数値に問題があるのか、次第にそこに大きな誤差を生じるようになっていた。過去に何度も、プログラムに修正が加えられてきたが、状況は改善されないままだ。

事前に報告される予報情報が、明らかに理論的におかしいこともある。だがそれは、図書館という領域にいて、長年、多くのデータを目にしてきたシュウヤだから分かることで、世代交代の早い現場師官には、気付くことができないのだ。だがそれを、外にいるシュウヤに指摘されることを、彼らは喜ばなかった。師官という人種は、その有能さゆえに、自分の仕事に頑強なプライドを持っているからだ。

それで、苦肉の策として、密かな干渉を行っていた。ゲートが正しく接続されるように、刻印の方に手を加えた。だがそれも、行政府を退任した後は、心に残ったわだかまりによって、止めてしまった。だから、恐らく、この五年は、その誤差は増えて行く一方だったのだと思う。それでも、そんなことよりも、シュウヤにとっては、コードプレートを見つけ出すことの方が、より重要なことだったのだ。

それさえ見つかっていたら、シンゴは死なずに済んだのかも知れない。シュウヤはずっとそんな後悔に苛まれている。

シンゴは、コードプレートによって都市の位置が解明された後に、都市を動かすのに必要となる動力エネルギーの研究をしていた。さらにその先も見据え、オクトグランが外の世界に戻った後で必要になるであろうシャトルの建造も進めていた。

もちろん、それは行政府の意に反する行為であったから、その計画は、一部の賛同者の協力の元、行政府の目を掠めて、極秘裏に進められていた。物資の移動数量に細工を加え、移動の途中でそれを掠め取る。そんな違法行為を行っていた。しかし、それもやがて行政府の知る所となり、司法府からの出頭要請を受けるに至る。だが、シンゴはそれに応じずに身を隠す道を選んだ。

あの日、彼は別人の搭乗許可書を用いて、コンテナに潜り込んだ。兄のセイヤは知人の家族に、妹のユノは彼の助手をしていた女性にそれぞれ預けて、別々のコンテナに乗せた。

―― そして起こった事故。

システムエラーによる、ラインの断線。

上層部が最終的に確定した事故原因は、それだった。だが、それはあってはならないことであり、公になれば、世界中の物流が大混乱に陥る。確実な物流の操作が出来ない行政府の権威は失墜するだろう。そんな思惑から、その事実は隠ぺいされることになった。予報時の大きな誤差を修正しきれなかった。そういう話にすり替えられて、軌道予報師長ほか、数人の現場責任者の退任によって、行政府は事態の決着を付けたのである。

だが、刻印されたラインの断線という事実は確かに存在したが、それはやはりシステム上はありえない事態なのである。シュウヤがやっていたように、刻印に直接手を加えたのでなければ、一度確定したラインが消滅するというのは...

―― 誰かが、それを行ったのかも知れない。

確証はなかったが、シュウヤは直感的にそう感じた。

シンゴの存在を行政府はそれ程に、脅威だと感じていたのか。このまま、殻に閉じこもっていても未来はないというのに、その事実から目を反らし、頑なに現状を維持しようとする。そんな行政府に対し、生じた不信感と絶望感を拭うことが出来ずに、シュウヤはそこから去った。

厳然たる存在 ―― コードプレートをその目の前に付きつけてやることでしか、彼らの考えを変えることは出来ないのだ。...そう思った。

1 1 幻の妃と天を舞うガルーダ

セイヤが山ほどの資料の片付けを終えて書庫から戻ると、軌道予報調査室のメンバーは、まだ勤務時間内だということに、休憩状態に入っていた。

併設されている小さなキッチンでは、ナナミが良い香りを立たせながら、コーヒーを淹れている所だった。

「どうしたんですか？ まだ、三時には早いですよ」

セイヤが声を掛けると、マドカが肩を竦めた。

「今日は、朝から飛ばしてたから、その反動で煮詰まっちゃってね～」

「煮詰まっちゃった...ですか」

セイヤは思わず苦笑する。確かに、今日はいつもより空気が張り詰めていた。こちらも気安く声を掛けることが憚られるような、ピリピリとしたような感じだった。いきなり、何をそんなに意気込んでいるのかと思った程だ。

「そういえば、今日読んでる資料って、あの事故の報告書の類が多いみたいですけど...」

朝からずっと気になっていて、でも、そんな空気のせいで聞けなかったことを、ここぞとばかりに聞いてみた。

「...ああ、結局、あの事故の 때가、予報誤差が一番大きかった訳だから、そこをもう一度さらってみたら何か出るかしらとね。思った訳なんだけど。これがなかなか困難が山積みで...」

「困難？」

「キセキが言うには、データの改ざん跡があるんですって」

「それって...」

「誰かが、何かを隠したかった。ということになるのかしらね。とりあえず、都市移動の元データから、もう一度あの日の正しい予報データを計算し直してるところよ。それが出れば、何を隠したかったのかぐらいは分かるのかなって。まだまだ先は長そうだけど...」

—— 世界を変えるのは、一筋縄ではいかないってことかしらね。

そんな心の声はもちろん、声に出して言う訳にはいかなかったが。

「...もし、それが分かれば、あの事故の原因が分かるかも知れないってことですか？」

セイヤの言葉に、こちらのやり取りを聞いていたらしいナナミが、表情を強張らせる。

「そこまで辿り着けるかは、やってみないと何とも言えないけど。私は、行けるところまで、行ってみようと思ってる」

「.....」

「そうそう、あなたに聞きたいことがあったんだって」

「何ですか？」

「あの事故で亡くなった霧月シンゴ博士って、あなたのお父さん？」

「...そうですが」

「なら、あなたは、どうしてお父さんと同じコンテナに乗っていなかったの？」

「それは...」

あの前日、学校から帰ると、父親からいきなりポーラエーカ行きを告げられた。元々、ミツバの家が、転勤でポーラエーカに移ることになっており、セイヤはゲートまで見送りに行くつもりでいた。セイヤはそのミツバの家族と一緒に、コンテナに乗れと言われたのだ。

ポーラエーカ行きは、自分の仕事の都合で急に決まった話で、まとまった席は取れなかったから、空きのあるコンテナに、別々に乗らなければならないのだという話だった。だから妹のユノも、父親の仕事の助手をしていた女性と一緒に、違うコンテナに乗ったのだ。

その時は、シャトゥラーラのゲートでの別れが、最後になるなんて思いもしなかった....。

—— いつか、お前に星の海を見せてやるから。

ふと、幼い頃に良く聞かされた、父親の口癖が記憶の奥底から浮かび上がった。止めようも無く、懐かしさと切なさが胸に広がる。

「そうだったの...ごめんね、辛いこと思い出させたわね」

話をするうちに波立ち始めた感情を、表には出さないようにと、気をつけたつもりだったが、マドカに気遣うようにそう言われて、ナナミほど上手く感情を誤魔化せなかったのだと思う。

「いえ...」

少し気まずい思いを抱きながら、短く答えると、間合いを測ったように、ナナミがコーヒーを差し出してくれた。その香りにほっとする。コーヒーに口を付けながら、資料の山の向こうにいるカオルとキセキの方へ、コーヒーを運んでいくナナミを目で追う。

―― あの答え...まだ当分掛かりそうなのかな...

付き合っただけだと、ナナミに告げた。今はまだ、頼りないかも知れないけれど、彼女と一緒にいれば、自分は何でも出来そうな気がする。同じ痛みを知っているから、自分ならきっと、その心のそばに寄り添うことが出来るだろうと思うのに...

そんな先物買いを躊躇させるのは、彼女が堅実過ぎるからなのか。それとも、彼女の目には、自分はそこまで頼りなく映るのか。後者だとしたら、だいぶへこむ。それでも、その場の勢いで、答えはいつでも構わないと言ってしまった手前、大人しく待っているしかなかった。

「うきゃ〜っ」

いきなりキセキが、素っ頓狂な声を上げてお手上げのポーズを取った。驚いたナナミがコーヒーを落としそうになって、慌ててトレイを押さえた。

「何て声出してるのよ」

マドカが呆れた顔をする。

「いや、だってっ...こんな負け方するなんて、有り得ないんですけどぉ」

「秘技、大どんでん返しっ」

カオルがさも愉快そうに言って、ナナミの手のトレイからコーヒーカップを取った。

「...三次元チェスですか？」

セイヤが資料の山の向こうを覗き込むと、そこにはどこから持ち込んだのか、立体のチェス盤が置かれていた。

「も〜これ、1ターンで、全滅って、絶対有り得ないと思わない？ もう1ターンあれば、僕の方が勝ってたのに」

カオルが、通常ではあり得ないトリッキーな手で盤上の駒を総取りしたらしく、それに納得がいかない感じのキセキが愚痴る。

「...あれ、でも、取られた駒って、6個ですよ？ 後、2個は...」

「2個？」

「え、だって、これ、駒の種類って8つありませんでしたっけ？」

「8つ？ え？ それ、どこのローカルルール？ シャトランガったら、6駒編成でしょ。だから、『シャトランガ=6要素』って名前なんですよ？」

「...へえ。シャトランガっていうんですか。俺が、父さんから教わったのは、確か『アシュトランガ=8要素』っていう奴でした」

「え〜何それ、面白そう。駒は、これと同じ？ ここにあるのに、あと2個足せばいいの？」

セイヤの話は、キセキの興味を引いたらしく、更に詳しい説明を求められた。

「駒の形は、ほとんど変わらないかな...ラージャ、ラニ、アシュワガンダ...」

「ちょい待ち、もしかして、名前が違うかも」

「え？ っと...これが、ラージャ...ですよ？」

セイヤが一番大きな駒を指して言うと、キセキが首を振った。

「いやいや...それは王様だから、キング。で、これがクイーンで、こっちはナイト」

「うわ〜マジですか。ええ〜おもしれ〜じゃあ、これは...？」

二人は互いに駒を指しながら、その名称を比較し始めた。

―― 即ち

- 1、キング (=王・城) → ラージャ (王)
- 2、クイーン (=女王) → ラニ (妃)
- 3、ナイト (=騎兵) → アシュワガンダ (馬)
- 4、ビショップ (=僧侶・魔法使い) → ガネーシャ (象)
- 5、ルーク (戦車) → ナーガ (蛇)
- 6、ポーン (歩兵) → クールマ (亀)

と、いうことになるらしい。

「で、これにアヴァターラ (化身) と、ガルダ (鳥) という駒があるんです。アヴァターラは、ラニと同じ力があるんですが、再上層だけじゃなくて、他の二層にも移動可能です。倒した相手の駒の能力を次々にコピーしながら変化する駒で、こっちのルールでは最強の駒。ガルダは別名、飛戦車。空中戦の主力です。6駒ルールだと、キングとクイーンの護衛はナイトだけで、あまり空中戦ってイメージないですよ？」

「へえー、空中戦ねえ。面白そう...そっちの呼称は、古代ドゥルヴァ語になるのかな」

「ああ、そういえば、アヴァターラって、あの店の名前と同じ？アシュタアヴァターラ。変幻の女神だっけ？」
マドカが思い出したように言う。

「じゃあ、多分、セイヤの方が、古いルールってことになるのかな」
カオルが口を挟む。

「飛行能力のある駒2つ増やすって、相当複雑になるし、1ゲームに要する時間も大幅に増えるだろうし」

「そっか、もしかして、そこから短路ルールとして考え出されたのが、6駒ルールなのかしら」

「恐らく、そうだろうな。ゲームフィールドのこと、それぞれ天界、地界、水界って呼んでるけど、正式な呼び方なら、アーカーシャ、ブーミ、アムリタって言うんだ。これも古代ドウルヴァの名残りみたいだし」

「いいな～空中戦。ねえ、カオルう、試しにちょっとだけ、やってみようよ」

「お前、こんなん、日が暮れるまでに終わるかどうか、分かんないぞ...」

「いや、さわりの部分だけでいいから、ちょこっとさ...お願いっ」

キセキの懇願に、カオルはマドカの方を見る。

「仕様がないわね、少しだけよ」

そう言いつつ、マドカも興味はあるのだろう。キセキが嬉々としながらポケットを探って、駒の代わりにとコインを取り出すのを、口元を綻ばせながら見ている。

やがて、ゲームが始まると、二人はああだこうだと言い合いながら、少しやりにくそうな手つきで駒に見立てたコインを移動させていく。しばらくそうしたやり取りを続けた後で、あっけなく弱音を吐いたのはキセキだった。

「あ〜何か、頭混乱して来た。これって、プレイヤー選ぶかも。上級者ルール？」

「だなあ...」

カオルも苦笑しながら、その盤上で指先を動かしながら、移動した駒の動きを確認しつつ、その指もあれ？と、度々止まる。

「確か、書庫に、これの棋譜が保存してありますよ」

セイヤが言うと、途端にキセキが目を輝かせた。

「ホントホント？ 見たいっ」

「そんなものまで保管してあるとは、流石、公文書館様だな」

言いながらももう腰を浮かせているのは、カオルもまた、見たい口なのだろう。

「昔、ワイズマンコートの人たちの間では、かなり流行っていたらしいですからね、これ。いかに戦略的に芸術的にチェックまで持ち込むかって、競っていたらしいです」

セイヤが説明しながら移動をはじめると、結局、女性陣もそれに付いて来て、軌道予報調査室総出での、書庫見学になったようだ。

「戦略的は分かるけど、芸術的って？」

「科学者ゆえに、なんですかね。超理論的思考を持っていた彼らは、一見相反する芸術性というものを、こよなく愛していたらしいです。無機質なものを扱いながら、その中にすら、美しさというものを求めた。ただ、データを記録するだけでいい地図に、装飾を施したというのも、そんな考えの現れなのかなと、俺はそう思うんですが...」

そんな話をしながら、やがてフロアの隅に辿り着いた彼らは、セイヤに導かれて、順番にそこに現れた螺旋階段を登る。その階段をてっぺんまで登り切った場所は、ロフトになっていて、小部屋という感じのその一角には、資料を収めた棚が幾つも並んでいた。

「この辺ですかね...」

セイヤが示すと、キセキが手近な所から、資料を引っ張り出す。

「へえ... 凄いな、これ...」

キセキは、もうその世界に埋没し始めている。他の者達も思い思いに、昔の人が残した記録に手を伸ばし、それを興味深そうに眺め始めた。

「そっか... 成程な〜こうやって使うのか...」

キセキのブツブツと呟く声を聞きながら、セイヤはロフトの手摺にもたれかかって、下方に広がる知識の海に視線を落とす。

実はここも、彼が見つけた隅っこの一つだった。そこは滅多に人が来ることがなくて... だから、少しぐらい声を出して泣いても、誰にも気づかれない場所だった。そして又、果てしない知の海に泳ぎ疲れた時に、こうしてそれを俯瞰から見降ろすことで、気持ちを切り替えるという儀式をした場所でもあった。

「今日はもう、仕事終わりなのかしらね」

気が付けば、ナナミが隣に立っていて、笑いながらそう言った。

「多分、記録を読むだけでも、重いから... あの事故のことは。息抜きしたくなる気も分かるかな」

「そうね...」

ナナミはそう答えて視線を下げて俯いた。これでもし、何かが分かれば、ナナミの思いも少しは救われるのだろうか。そんなことを思いながらその横顔を見ていると、不意にナナミが顔を上げた。

「...ねえ、ガル〜ダって、どんな鳥なのかしら？」

「え... ああ、それなら、ほら...」

セイヤが上を向いて天井付近を指差す。それに釣られてナナミが上を向くと、そこには見事な天井画が描かれていた。

「あそこに大きさの違う同心円が三つ描かれているでしょう？その中心に近い方の右下の方...翼を広げている鳥。あれ

がそうですよ」

「へえ、あんな場所に絵が描かれているなんて、よく気付いたわね」

「え、まあ、この辺で昼寝とか、結構してたから...ある時、ゴロンと横になったら、ああ...って感じで」

「...もしかして、あれって、アシュトランガの駒の絵なのかしら...」

「ええ。そうみたいですね。アシュワガンダ（馬）、ガネーシャ（象）、ナーガ（蛇）クールマ（亀）

...ああ...今気付いたけど、都市の市章って、これを元に作られてたりして...」

「市章...？ そうね。言われれば、真ん中の星の形は確かに、ポーラエーカの市章に似てるかも。ラドゥヴィアって何だったっけ...双子の王妃...って」

ナナミが視線を動かして、すぐに一つの絵に目を止めた。

「...あれ、そうよね。双子の王妃」

「...ですね」

確認してみると、他の六つの都市の市章も、それぞれの駒をモチーフにしたようなデザインになっていることが分かった。

「...昔の人は、遊び心があったんだなあ...」

「何の話？」

男性陣ほど熱心ではなかったらしいマドカが、その言葉を聞き止めたようで、そこで話に入って来た。セイヤが市章の話をする、彼女も感心したように、天井を仰ぐ。

「成程...ねえ.....」

上を見上げていたマドカの顔が、やがて思案顔になり、そのまま黙り込んで絵を見据えている。

「あのさ、もしかして...」

言い掛けて、だがそれに確証が持てないのかマドカは一旦口を閉ざす。

「どうした？ 揃って天井向いて...」

そこにカオルが来て声を掛けた。マドカは、顔はそのままに、視線だけをカオルの方に向ける。

「カオルさ、あれ見てどう思う？」

マドカに言われて、カオルが上を向き、

「チェスの棋譜か？」

と、即答した。

—— 棋譜。

そう言われれば、三次元チェスの、立体の三層を平面に記録するのに、大きさの違う同心円を三つ重ねて描く。つまり、中心に近い方から、天界、その外側の円を地界、一番大きな外側の円を水界と見立てて描くのだ。

「確かに棋譜みたいだけど...」

セイヤは頭の中で、その立体図を描いてみる。その中で、駒は、いつしか都市の姿に置き換わっていく...

「もしかして、これ、都市の配置図じゃないですかね。こんな風に、もの凄く手を掛けた感じで、一つの絵画作品として残してあるって、きっと、とても大切なものだからですよ。とすると、これは、もしかしたら、隔離以前の、オクトグランの姿なんじゃないのかなって...」

「あのさ...さっき、そこの棋譜を見ていて思ったんだけど...」

セイヤの意見に付け加えるようにマドカが言う。

「都市の移動後に、地図師が描く、手書きの地図。あの描き方って、棋譜と似てない？」

何か、とても大事なことが、目の前にぶら下がっている。四人は互いに顔を見合わせ、またそれぞれに天井を仰ぎ、見えそうで見えない、その何かについて考える。

チェスの駒は6ではなく、8で。

その8つの駒のモチーフが、それぞれ8つの都市の象徴として使われていて。

裏返せばそれは、都市はその8つの駒で表記されることがあるということ。

都市の移動記録である地図は、棋譜の描き方に似ていて。

そして、昔の人は、遊び心があった。

それは、つまり...？

そこに、キセキの明るい声が乱入した。

「都市移動の法則ってさあ、8駒チェスのルールと同じ、だったりして」

いきなり投げ込まれた石に、四人は目を見開いて、一斉にそちらを見る。

「まさか、ねえ...」

マドカが言うと、緊張を解かれたように、四人はそろって力なく笑う。流石にそれは、ないよね、という空気がそこに下りる。

そもそも移動に法則性があるというのなら、予報など必要ないだろう。ましてや、それがチェスと同じだということなら、次の手はすぐに読める。

「都市が移動する理由って、考えたことがあります？」

セイヤがそう訊いた。

「いや、ないな」

カオルが首を傾げると、マドカも頷く。

「だって、そういうものなんだって、皆、思ってたでしょ？私たちが生まれるずっと前から、ずっとそうだった訳だから。あれ、理由があるから動くんだとは、普通、考えないわよね」

「隔離前の都市は、マニチャトラス鉱石と併用する形で、太陽光エネルギーをその動力源としていたんです。それで、太陽の光が、母星や他の都市によって遮られる時間をなるべく短縮するために、推進装置を有し、随時場所を移動していたんですよ。つまり、都市が動くのは、空間の影響というよりも、都市自体に動く機能が備わっていたからだと考えられます」

「へえ...お前、詳しいな」

カオルが感心したように言う。

「伊達に図書館に住んでるって訳じゃないよね。うん、凄い凄い」

同じくキセキにも感心したようにそう言われて、先輩たちを前に、ちょっと偉そうだったかもセイヤは先を言い淀む。が、そこにマドカがきっぱりとした声で言う。

「続けて」

「あ、はい。つまり、そういう機能がある以上、俺は、それを動かす術があっただけでしかるべきだろうと思うんですけど」

「つまり、都市が動くことには、誰かの意志が反映されてると？」

「誰か、というか...。隔離後に、都市が動き続けている理由は分からないですけど。動かすためには、そもそも推進装置に移動用のプログラムを入れてやらなくてはならない訳ですから...都市が動くのは、そのプログラムありきで、それを誰かの意志とするなら、プログラムを設定した人ということに...なるのかなと...」

「じゃあ、そこにはやはり法則があって、それがチェス好きの誰かさんのせいで、8駒ルールなのかも知れないという仮説は、十分に成り立つわけね」

「あくまで、仮説ですけどね」

マドカの食い付きの良さに、セイヤは慌てて念を押す。

「仮説、結構！ どうせ行き詰ってたところなんだから、今度はそれで攻めてみましょう」

「え...マジすか？」

「あ~その仮説検証は楽しそうだから、僕も賛成。遊び心バンザイ！」

キセキが手を上げて、カオルも異議はなしという風に頷いた。いいのかなという風にナナミを見ると、笑顔を返された。

「じゃあ、軌道解析はそちらに任せて、私たちは、都市の設計図とか、その辺から当たって見ます」

ナナミの提案に、マドカのOKが出て、一同は長い休憩を終えて、次の目標に向けて動き出した。

12 本当のトコロ

「書架奥の人たち、最近遊んでばかりいるみたいですけど...」

書架整理から戻って来たクルミが、半ば呆れたような口調で言った。情報収集のためなのか、ちょくちょく部屋を覗きに行っているらしいのだが、近頃、全く収穫がないらしい。

ハジメがさりげなく様子を見に行った時も、彼らは三次元チェスに興じていた。そろそろ手詰まりなのかと思う。数百年掛かっても解けない謎は、そうそう簡単には解けないということなのか。

— 奴らを、買い被り過ぎたかな。

そんなことを考えながら、ふと窓の外に目をやると、風花ミツバが、大きなバスケットを抱えて、フロアを横切っていくのが見えた。

セイヤたちの休みは不規則だから、ミツバは自分が休みの時には、ああして、差し入れ持参でやってくる。セイヤの気を引きたいのだろうと思う。健気というか、一生懸命というか...それでも、他の方へ気が向いているセイヤは、そんなミツバの気持ちに気付いていない。というより、気付かない振りをしている。早く楽にしてやればいいのにと、傍で見てるとそう思う。だがそれも、当事者でないから言えることなのかも知れない。結局、自分のことは、なかなか客観的には見られない。

ハジメの視線はいつの間にか、そこで書類を作り始めたクルミの上で止まっていた。

行政府現最高顧問の娘。

本来ならば、こんな場所で司書などしている人間ではない。それが、本が好きだとか、そんな当たり前過ぎる理由でここに来て、当然の成り行きのように、ハジメに好意を示すようになった。好意を持たれて悪い気がしないのは、まあ、男のサガというものだが、それでも、そんな出来過ぎな状況に、警戒心を持たない訳ではなかった。

注意深く見ていれば、クルミが館内の持ちだし禁止のデータを密かにコピーしていることもバレバレだったし、ハジメの端末を触った形跡も、たびたび見つけた。まあ、本当に見られて困るようなものは、そんな所には置いていないから、それについては気付かない振りをして、たまにクルミの好意を真に受けた振りをして、恋人の真似ごとのようなことをしていた。それは、互いに承知の上で楽しむゲームのような感覚だった。もちろん、本気ではなかった。クルミだってそうだろうと思っていた。

だが、途中から、それが分からなくなった。クルミは本気で自分を好きなのではないかと、そんな風を感じ始めた。クルミの態度は、次第にハジメの警戒心を解き、いつの間にか、その心の中に入り込んでいた。それでも、仮にクルミが本気なのだとしても、自分は本気にはならない。あくまで、情報源として利用するだけだと、そう思っていたのに...

あれは二妃家の娘だから、手放せと改めて言われて、素直にそう出来なかった。手放すには惜しいと思ってしまった理由は、大事な情報源だから...だけではないのかも知れない。

— まさか、惚れたか...

視線を感じたのか、クルミが顔を上げて、花のような笑顔を見せる。その表情に、思わずドキリとさせられる。行政府とは手を切らせて、彼女をこちら側に引き込むことは出来ないだろうか。気が付けば、そんなことを考えていた。

書架奥の人々は、ミツバの来訪を喜びながらも、資料との格闘に、すぐにはケリが付けられない状況を呪う言葉を吐きながら、一刻も早くランチにありつけるようにと、仕事に精を出した。そんな様子を少し離れた所から眺めて、セイヤがあまりにもそこに馴染んでいることに、ミツバは何となく不安になる。

セイヤはいずれ、地図師室に戻ってくる。ミツバのいる場所に。だって、そこが、彼の選んだ仕事場で、地図師という天職を全うする場所なのだ。だから、自分は、かなり無理をして、セイヤの後を追いかけた。一緒にいたくて、猛勉強して、地図師の師官章を手に入れたのだ。

――戻ってくるよね。

ここは、あくまでも、臨時の、一時的な、仮初めの場所。

そう心に言い聞かせても、ナナミと頭を付き合わせて、資料を読んでいるセイヤの姿に胸が痛む。幼馴染という理由でも、そばにいたから、一番身近な存在でいられた。でも、今、彼の隣にいるのは、自分ではなくて...

「...うほほ。僕ってやっぱり、天才かも」

いきなり、キセキが歓喜の声を上げた。一同が、何かと手を止めて、一斉にそちらを見る。

「8駒プログラム完成〜っ！で、これをこっちに繋げて〜」

みんなが見ている前で、キセキが軽快に端末を叩く。その様子に、何かに気付いたようにマドカがいきなり立ちあがる。その勢いで椅子が音を立てて後ろに倒れる。

「キセキ、あんた、ちょっと待ち...っ」

その声に被さるように、キセキの陽気な声が響く。

「リロード！」

魔法の呪文のように、その言葉を放ったキセキの指は、端末のエンターキーをしっかりと押していた。

「お前...今、何した...？」

隣に座っていたカオルが、キセキのモニターを覗き込んで、顔色を変えた。その様子が、見るからに普通ではない。

「...どう...したんですか？」

セイヤがおずおずと訊く。が、その答えはすぐには返って来なかった。

「...っと」

マドカが気を取り直す様に、一呼吸置いた。

「...お昼に、しましょうか」

「あ、はい...でも」

そのままでは、セイヤが納得しないと感じたのか、マドカがため息をついた。

「キセキ、説明、してあげなさい」

「え？ああ...だから、軌道予報室の端末に繋いで、予報に使われるデータベースを8駒プログラムで書き直した」

「え...」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。

「凄いよ〜、これ。今まで、計算のたんびに出てた誤差が全然出ないから。これで、今後の予報は外れなしだね。セイヤ、これでキミの仮説は証明されたことになるよ」

「って...行政府の端末に、無断で入り込んで、おまけにプログラム書きかえちゃったんですかっ？」

「うん」

キセキがにこやかに言う。

つまり、それが罪に問われる行為だということの自覚はないらしい。

「大丈夫なんですか...」

――そんなことして。

「大丈夫、大丈夫。これで、予報エラーなんてきれいに無くなるから」

「いや、そういう問題じゃなくてっ...」

「やってしまったものは、仕方ないから。とりあえず、お昼食べておきましょうか。午後は、多分忙しくなるだろうから」

マドカに促されて、ミツバがランチの準備に取り掛かり、ナナミもそれを手伝った。机上の書類は、もうそこで仕事

はしないのだと言うことを感じさせるように、一つ残らず片づけられた。

そうして食事は始まったものの、どことなく落ちつかない空気に包まれて会話も弾まない。気を使って場を盛り上げようとしていたミツバも、次第にひとり空回りしている感じが辛くなってきたのだろう。やがて彼女が話すのを諦めてしまうと、そこは本当にしんとした静かな食事の場になった。

一同が何となく予想した通り、食事を終えた頃に、彼らの元へやってきたものがあった。それは、先般、シュウヤを連れて行ったのと同じ司法府の人間だった。ただ、彼らを先導して来たのが、いつも図書館で顔を合わせていたクルミだったことは、予想外であったが...

「全く、とんでもないことをしでかしてくれたわね、あなた方は」

開口一番そう言ったクルミのセリフは、彼女が司書ではなく、司法府の人間であるのだということを伺わせた。

「世界に変革をもたらす行為は、いかなるものであっても、許されるものではないのよ。よって、我々はあなた方を拘束します」

「ちょっと待ってよ」

クルミの言い分に、異議を唱えたのは、キセキだ。

「僕たちは、上から言われて、予報が当たらない原因を突き止めたんだよ？それなのに、なんでそういう理不尽なことになるのさ」

「あなた方の仕事は、原因を突き止めること。それだけで良かったの。その結果を報告もせず、軌道予報室のデータ改ざんを行うなどもってのほか...」

「それが、この世界のためになることだとしても？」

「それを判断するのは、あなた方ではなく、最高幹部会議です」

有無を言わずにそう断言したクルミに、キセキは慔然とした表情で押し黙る。

「クルミ...」

そこへ、そこで何かが起こっている気配に気付いたハジメが姿を見せた。

自分の名前を呼んだハジメを見据えたクルミは、もういつものクルミではなく、その纏う雰囲気までも、まるで別人のようで、ハジメは戸惑った顔になる。

——これが、本当のお前か。

不動ハジメに恋している、二妃クルミというキャラを、彼女はそこまで完璧に演じていたのかと思う。しかし、意外なことに、そこに現れたのは落胆ではなくて、むしろどこか嬉しいような複雑な感情だった。その本当の姿も、自分は嫌いじゃないような気がする。

——重症だな。完璧に、持ってかれてる。認めよう、完敗だ。今回は...

口元に皮肉を帯びた笑みを浮かべたハジメを、今度はクルミの方が怪訝そうな表情で見る。

「世界はもう、変わる時期に来ているんだ」

「なに...」

クルミだけでなく、他の者も、ハジメのその言葉の意味を図りかねている。

「だから、ここで彼らを、頭の堅い連中に渡すわけにはいかないってことだよ」

言ってハジメが、いきなり壁の非常ベルにその拳を打ちつけた。

「来いっ、セイヤ」

耳をつんざく様な警報音に、クルミたちが気を取られた隙に、ハジメはセイヤの腕を掴んでフロアを駆け抜けた。それを見て、その場にいた者達は訳のわからないまま、慌ててその後を追いかけた。その後ろで、防火用の隔壁が次々に落下を始める。一呼吸遅れたクルミたちは、それに阻まれて、追うべきものを見失った。

——無駄なことを。そんな所に逃げたって、袋のネズミでしょうに。

「事務室へ行って、警報のスイッチ切って。それから、本部に増援要請。建物の周囲を固めさせなさい」

クルミの指示に、部下が周囲に散る。そんな騒然とした雰囲気の中で、ひとりミツバだけが呆けたようにそこに座っていた。

「...あなたは、行かなかったのね」

気になって何となく声を掛けると、ミツバが顔を上げて力ない笑みを浮かべた。

「私には、行く理由がないのかなって...思って」

自分はそこで躊躇した。その一瞬のためらいは、容赦なくセイヤとミツバとを隔てた。

普通に恋をして、普通に家庭を作って、普通に年を重ねて。そんな人生を思い描いていた。そんな未来図の中で、自

分の隣にいてくれるのが、セイヤだったらいいなと。そんな夢を描いていた。

世界の変革に関わることなど、自分には想像すら付かないのに。いつの間にかセイヤは、その真っ只中に足を踏み入れていて、更に遠くに走って行く。セイヤの隣に居続けることは、自分が描いていた、普通の夢を捨てるということになるのだと、そう気付いた。自分たちはもうすでに、別々の道を歩いていたのだと。

―― あたし...いつの間に、置いて行かれちゃったのかな。

胸にこみ上げる寂しさに、止めようも無く涙が溢れ落ちた。

クルミはそんなミツバに背を向けると、鳴り響く警報を聞きながら、自分とハジメを隔てた隔壁を改めて見上げる。現実ではなかった筈の恋の余韻に、気持ちが微かに揺らされた。思いがけない感情に自嘲する。

―― まだまだ、甘いな、私も。

二妃家に生まれた者として、いずれはあの母の後を継ぐ。そして自分は、この世界を守る柱となるのだから。もっと、強くならなければならない。そんな決意を胸に、クルミは壁に背を向けて、現実の自分へと戻って行った。

13 ソラに花の咲く午後 前編

セイヤたちが連れて来られてたのは、ハジメがよく出入りしていた地下の書庫だった。

「何か、こんな所に隠れても、見つかるのは時間の問題って気しない？」

キセキの遠慮のない声と言う。

「誰のせいで、こんなことになってるんですか」

それに律儀に反応するセイヤに、ハジメは苦笑する。この期に及んで、この緊張感のなさはなんなのだと思う。

「こっちへ」

ハジメが例の秘密の扉を開くと、その背後で「お〜」という感動の声が一斉に上がる。

「すっげえ...秘密基地っ？ こういうの、子供の頃、憧れたよな〜」

「秘密...基地、ね」

セイヤだけでなく、他のメンバーも興味津津という顔をしている。やはり人並み以上の好奇心の持ち主なのだろう。それは世界を変えるためには、重要なファクターとなる。

ハジメが非常灯を灯しただけの薄暗い廊下を奥まで進んで、目的の扉を開けると、そこでセイヤが息を飲む気配がした。

「俺...これ、昔見たことあるかも...」

「これを設計したのは、お前の父親、霧月博士だよ。お前は多分、博士の書いた設計図を見たんだろう」

「そっか...あの時の設計図...」

『この世界の外には、星の海が広がっている。これは、私たちが、その海に漕ぎ出していくためのシャトルになるんだ
— いつか、お前に星の海を見せてやるから 』

「...本当に...あのシャトルなのか」

「シャトル？」

マドカが確認する。

「そう、我々ワイズマンコートの切り札、といったところかな」

ハジメがそう答えた所で、遠くに爆発音のような破壊音が聞こえた。

「何？」

ナナミが不安そうな顔をして、入口の方へ視線を向ける。

「...思った以上に過激だったんだな、彼女」

ハジメが呟きながら苦笑する。

— どうしてだろう。そんな彼女の別の一面を見せられる度に、何だか楽しい気分になるのは。

「多分、司法府の奴らが、さっきの秘密の扉をこじ開けようとしているんだろう」

気を付けていたつもりなのに、この場所すら、もうクルミは知っていたのか。だとすると、情報戦においても、自分は白旗を上げざるを得ない。

「場所がバレてるんじゃ、秘密基地の意味ないじゃん」

セイヤのツッコミに対し、しかしこちらに対してはまだ、素直に負けを認める訳にはいかない。兄としての面目は保つべく、ハジメは次の一手を提示する。

「方法はある。言ったら、これはシャトルなんだって。宇宙へだって飛んで行ける乗り物だ」

「だから？」

「都市の隔壁を開いて、外の空間に出る」

いずれ、シャトルとして使うことが出来るようにと、テイクオフの準備だって、一応してあるのだ。

「外部隔壁の制御って、行政府の端末で管理されてるんだろ。そんな簡単に開けられんのかよ」

「このシステムは、行政府のやつと連動してるんだ。だから、ここから、向こうに介入は可能なんだよ。どうする？このまま、大人しく司法府に拘束される？それとも...」

そこでキセキが手を上げた。

「どうせもう、怒られるのは決まってるんだからさ、もう少し無茶してみようよ。シャトルの操縦って、一度やってみたかったんだよね」

「確かに、このまま捕まるのは、面白くないっていうか...」

セイヤが言うとマドカが肩を竦める。

「何か、キセキ2号が生まれつつあるわね」

そんな会話の間にも、外の音はどんどん大きくなっている。

「確かに、これが行政府に発見されたら、即、封印されるだろうから、乗るチャンスは今だけということにはなる...と」

カオルが思案顔で呟く。誰も止めに入る人間がないのは、このメンバーならではなのか。その場の空気を纏めて、最終的にハジメが決断した。

「それじゃあ、外に逃げるで決まりでいいですね」

言いながら、さっさと端末に座って、操作を始める。が、行政府のシステムに侵入したところで、その手が止まった。

「そういや、お前ら、さっきプログラム書き変えたって言ってたか...」

ハジメが顔を顰めた。そのせいなのだろう。ダミーに設定してあった、プログラム起動用のパスワードがことごとく拒否される。

「繋がらないのか？」

セイヤに確認されて、惘然とした顔になる。これだけ格好をつけておいて、兄の面子は...

そこへ、思いがけず通信が入った。訝しみながら、ハジメが受信スイッチをオンにすると、通信用モニターに軌道予報師長の鎬木ユウヤが姿を見せた。

「お前さあ、今、こっちはシステムの総点検中で忙しいっていうの。これ、やったの四宮キセキか？お気の毒様に広野師長が卒倒しかかってたぞ。で、用件は何だ？」

「あの...シャトルの」

「え？ ああ、そのおもちゃ、箱から出してみることにしたのか？ じゃ、そこの外部隔壁開けばいいんだな？」

「え、はい」

「了解。気を付けて行ってこい」

その言葉を残して、ユウキの通信は切れた。船外モニターが、外部隔壁が開かれていくのを映し出す。

「鎬木師長って...」

「ああ、親父の賛同者。行政府にも、ワイズマンコート of の協力者が何人かいるんだよ」

説明しながら、ハジメがあちこちのスイッチを手際よく入れて行く。程なくエンジンの始動する音がして、シャトルはゆっくりと何もない空間に滑り出した。

無機質な都市の外壁を映し出していた船外カメラは、やがてポーラエーカの全容をモニターに浮かび上がらせる。資料などで目にしたことはあったが、こうして実際に自分たちの住む世界の全体像を目にすると、それはいかにも小さくて、頼りない場所のように見える。こんな小さな世界に自分たちは、千年以上も身を潜めていたのかと思う。

「これで、とりあえずの危機は去った訳だが、この先はどうする？ 幸い、ここには四宮のご子息がいるから、マニチャトゥーラにでも身を隠すか？ それとも...この設備を使って、行政府と取引してみるか？ このシステムはむこうと連

動させることが出来るから。四宮キセキさん、あなたの腕ならきつと、向こうのシステムを壊すのも、遠隔操作するのも、やりたい放題でしょう」

ハジメが言うと、キセキが笑った。自分はその間に無秩序な人間だと思われているのかと思う…。

「いや、別にそんなことには興味ないよ。何か誤解しているみたいだけど、僕は世のため人のため、ひいては、愛する人のため、そういうことの為に頑張る主義の人なんだよね」

「成程。では、あなたのご意見は？」

「そうだね。せっかく、目の前に楽しそうなおもちゃがある訳だから…いいよね、マドカ？」

「そういうタイミングで、私に確認しないでくれる？」

話を振られたマドカが苦笑する。

「それでOKしたら、例のごとく、最終的に私が後始末をすることになるんじゃないの？」

「いや～まさかそこまでは図々しくないよ、僕」

言いながら、えへへと笑うキセキの言葉に、説得力はあまりない。

「...仕方ないわね。じゃあ、一応、意思確認はしておくわよ。はい、キセキの遊びには、もれなく危険が付いて来ます！それでも、構いませんという人は拳手っ」

「危険って、どの程度の？」

セイヤの確認に、マドカがふざけた様な声で言う。

「そうねえ、命がけ以上にはならないかな～」

「何もんですか」

つまり、真面目に答えることが馬鹿馬鹿しくなるほどの、無茶、ということか。セイヤが頭を抱える横で、唯一、まだ冷静さを維持しているハジメが確認する。

「それで？何をしよう？」

「うん。僕たち、せっかく、都市を自在に動かす神の力を手にした訳だから...」

「...都市を動かす力...って...」

思いがけない台詞に、その冷静な仮面があっけなく剥がれ落ちた。自分たちが、延々と探し続けて見つけれなかったものを、まさかこいつらは見つけたというのか。

「だから、司法府の奴らに押し掛けられたんだよ」

「まさか、本当に？」

「理論上はね。だから、試しに動かして、それで正解なのかどうかを確かめてみたいと思って」

「...いや、でも都市を動かすには、膨大なエネルギーが必要になるだろう」

「それは、霧月博士がだいぶ前から研究してた理論があるから」

「って...。お前たちが書庫奥でせっせと調べてたのって、予報が当たらない原因じゃなくて、まさか都市を動かす方法だったのか？」

「というかね、それってどっちも同じことなんだよね。とどのつまり、都市軌道の把握っていうのはさ、そもそも都市が動く原理を理解していないと出来ない訳だし」

「それで、その原理が分かった...と？」

ハジメが半信半疑という風に確認すると、横でセイヤが頷く。

「まあね。かつての都市の推進装置って、今はゲートとして使われているんだよ。ゲートのエネルギー炉の回転数をあげると、今の数百倍のエネルギーを発生させることができる。それが都市を動かす動力になって、昔はそれで自在に都市を動かしていたって話」

—— こいつら、本当に…。だが、もしそれが事実なのだとしても…

ハジメは尚も慎重に理屈を積み上げる。

「それでも、そんなもの何度も試せる代物じゃないだろう。炉の回転数を上げれば、稼働時間はそれだけ短くなるだろうし。一体どれだけのマニチャトラスを消費すると思うんだ。マニチャトラスだって無限にある訳じゃない。それにその方法は、ワイズマンコート先の先人たちが、この世界を開くという、崇高な目的のために考え出したものなんじゃないのか。それを遊び半分に使われるのは、その知識を守ってきた者としては容認できるものではないし...」

「だったら、世界を開くという目的のためになら、いいんだね？」

キセキがいつもの愛想のいい顔で言った。

―― こいつ、何しれっとした顔で大それたこと言ってんだよ。

「だからっ、世界を開くには、コードプレートが必要なんだよ」

冗談ではない。自分たちが数百年という歳月を費やして作り上げた大切なものを、それがどれ程の苦難の道であったのか、知りもしない外部の人間が使うだと？

―― お前、自分が言った言葉の重みがどれほどのものか、絶対分かってないだろう、四宮キセキ。

「コードプレート...って？」

その言葉の意味すら知らない奴が、世界を開くなんて軽々しく、よくも言えたものだと思う。

「隔離前の、都市の正確な位置を示した配置図っ」

ハジメが苛立ったようにキセキに告げる。

すると、キセキが「ん？」という表情を浮かべて、セイヤと顔を見合わせた。

「何か、最近、そういう話しなかったっけ？ 僕たち...」

そう問うたキセキに、

「アシュトランガの天井画...ですね」

セイヤがそう返した。

―― まさか。

ハジメは思わず身を乗り出す。

「...まさか、見つけたのか？ どこで？」

「いやぁ...チェスの棋譜室の天井にね、駒の絵が描いてあって、それが、昔の都市と対応しているんじゃないかって話なんだけど...」

「天井画って...そんな...ところに...」

どうりで、いくら地面を這いつくばって探し回っても、見つからない筈だ。

そもそも、自分たちは探す場所を間違えていたということなのか。あっけなく氷解した謎に、呆然としながらハジメはため息を落とす。

―― 結局、そんな些細なことで、世界は変わるのか...

それがもし、どこかにいる神の采配なのだとしたら、思い切り苦情を言ってやりたい気分だった。

「セイヤ、お前、その正確な図を覚えてるか？」

「愚問。俺を何だと思ってんだよ、もう立派な地図師官なんだぞ」

そう言って、セイヤが会心の笑みを浮かべた。

モニター上に、立体に描かれた幾つものマスに、セイヤがそれぞれの都市の座標を埋め込んでいく。やがて完成したその図表を、一同はしばらく感慨深げに眺めた。

「じゃ、行くよ？」

キセキが声を掛ける。その神がかり的な指さばきが、セイヤの描いた地図をプログラムに変換して取り込んでいく。機器が順番に起動し始め、部屋全体にその振動が伝わった。

そのキセキの刻印によって、メインモニター上を、都市を表す記号が、ゆっくりと移動していく。やがてそれは、そこに小さな花の形を形成した。

彼らの後方で、モニターを見ていたナナミは、灰色の何もない空間を映し出していた船外モニターに、ノイズが走ったのに気付いた。

「...何？」

画面上の灰色が、みるみる黒く塗りつぶされていき、突然、その黒を埋め尽くすように無数の光の粒が浮き上がった。

「船外モニターに異常。見て下さい。これって...」

ナナミの緊迫した声に、他の者も慌ててモニターに目をやる。

「メインモニターに切り替えて」

マドカの指示で、壁面一杯の大きなメインモニターに、数え切れない程の光点を抱えた漆黒の闇の世界が映し出された。どこか畏怖を覚えるようなその映像の美しさに、皆、一様に息を飲む。

―― いつか、お前に星の海を見せてやるから。

「星の海だ」

セイヤの言葉に、皆、何が起こったのか気付く。

「...俺達、外の世界に戻ってきたんだ」

「まさか、本当に？」

マドカが呆けたように言う。

「やっちまったなあ...」

カオルが笑いながら言う。

「これで僕たち、伝説だね」

その横でキセキが、いかにも嬉しそうにそう言った。

ハジメは感動のあまりなのか、声も出ないようすだ。

そしてセイヤは、思わずナナミと顔を見合わせて、互いに笑い合った。

「お兄さん、僕たち、今なら、何でも出来そうな気がしない？」

思いがけない出来ごとが目の前で起こった高揚感に、すっかり浮かれ切った様子でキセキがいきなりセイヤを羽交じめにする。

「うわ、キセキさん、止めて下さいってば... つか、何で、僕たち？勝手に俺、勘定に入れないで下さいよ、しかもお兄さんって...」

「この勢いで、ユノちゃんも捜しに行きましょう」

「ユノちゃん？」

マドカが訊くと、キセキが満面の笑みで答える。

「うん。見つかったら、僕のお嫁さんになってくれる人なんだよ」

「いつの間に、そういう話ですか。ユノは嫁になんかやりませんからっ」

するとそこに、

「...そっかあ。キセキさんがセイヤくんの弟になるんなら、あたしにも弟が出来るのかも知れないってことね」

ナナミがぼそっと、冗談とも真面目な話ともつかない口調で言った。

「え...」

—— い、今なんて！？

「ナ、ナナ...」

しかし、セイヤがその意味を確認するよりも先に、そこにハジメのきっぱりとした声が介入する。

「俺は、これ以上、弟も妹もいらん。しかもこんな騒々しい...」

そして更に、

「あ〜盛り上がってるトコ悪いんだけど、このシャトル、燃料がもう残り少なだぞ」

と、カオルが発した言葉で、彼らは楽しい家族ごっここの妄想から現実に戻されて、それぞれ慌てて自分の持ち場に付かなくてはならなくなった。

「どっかで燃料補給しなければならぬわね」

マドカはそう言ったものの、

「どっかって？」

カオルにそう訊かれても、即答は出来ない。

後先考えずに、勢いでポーラエーカを飛び出して来た彼らは、ここに来て初めて、この先のことを検討する必要性に迫られた。つまりは、このシャトルの行き先をどこにするのか、ということである。

ハジメの計算によれば、ゲートを使えば一瞬で行き来できる都市の距離は、しかしシャトルで移動するとなると、数十時間という時間を費やすのだという。そして、そもそもすぐに使用することを想定されていなかったシャトルには、当然と言えば当然のことながら、燃料がたいして入っていなかったのだ。燃料の残量を考慮して、辿り着ける都市は2〜3つ。選択肢は多くない。

「...ということで、意見のある人は挙手。はい、カオル」

「とりあえず、燃料補給を最優先に考えるんなら、マニチャトゥーラなんじゃないのか？ここには四宮のご子息もいることだし。あそこなら、事態が落ち着くまで匿ってもらえるんじゃないかねえの？」

カオルのセリフに、一同の視線がキセキの方を向く。

すると当の本人は、う〜んと、何事か思案するように腕を組んで天井を見上げた。

「...いや〜それはちょっと無理っぽいかも」

「って、なんで？」

マドカが空かさず説明を求める。

「うん。僕ねえ、ぶっちゃけ親とあんま仲良くないんだよね...だから、こういうことになったって言ったらさあ.....」

そこでぶつ切り切れたキセキの言葉の次を待ちきれないで、マドカが催促する様に訊く。

「...言ったら、何？」

「言ったら、間違いなく『勘当』されちゃうんじゃないかと。あはは」

「あははって、あんた、そこ笑うトコじゃないでしょ？って、キセキさあ...あんたって四宮家の大事な跡取り息子なんじゃないの？」

だから、広野師長のお気に入り、どこか傍若無人な振る舞いも大目に見て貰っていたのではないのか。

「...だった、かなあ」

「え?...過去形？そこ、過去形なの？」

マドカの驚愕ぶりに、キセキがどこか申し訳なさそうにちいさく笑う。

「そもそも大事な跡取りなら、ポーラエーカで行政府師官なんてやってないってことだろう」

キセキが笑って誤魔化した部分を、ハジメが遠慮なく指摘する。

「まあ、そんなとこ。まずね、師官養成所に進学するときにモメたでしょ。それから親の持って来た結婚話を無視してまたモメたでしょ... 僕って、どうも四宮の利益を害することばっかしちゃうからさ~」

「でもさ、そこはまあ一応親子なんだし、流石に勘当とかってことは...」

「マドカんちは家族みんな仲良しだから、こういう感覚は、なかなか理解しがたいんだろうけど..... 代々マニチャトゥーラの市長をやって来てるっていうのはね、まあ、伊達じゃないのさ。その地位と、そこにくっついてくる権力を守る為に、手段を選ばずやってきたからこそ、八つの都市の中で、マニチャトゥーラだけが、これまでずっと四宮の独占支配だった。要するに、四宮の当主というのは、そういうことが苦も無く出来る人間で、それが今は、うちの父な訳ね。当然、ビジネスに私情なんか挟まない。四宮という存在を守るためになら、とことん冷酷になれる。四宮の不利益になると思えば、親子の情だとか、そんなのは真っ先に切り捨てられる... 僕の父はね、そういう人なんだよ...」

一息にそう吐き出すと、キセキはその表情を曇らせた。

キセキにそんな表情をさせる事情とは、如何ばかりのものなのか。セイヤは思わず考えこむ。

「...何か、壮絶ねえ...」

マドカも同じようなことを思ったのか、吐息混じりに、そういう上層の人間の感覚は理解しがたいという風に言う。

「まあ、人の上に立つなんていうのは、大概そんなものだろう」

どちらかと言えば、キセキと似た様な境遇のハジメは、あっさりそう話を纏めると、キセキに向かって質問する。

「四宮キセキ、お前は、家の事情をどこまで知ってる？」

「というと？」

「四宮は、裏で我々ワイズマンコートに資金援助をしている。その辺りのことは？」

「...ああ、そういうことね。それはまあ、何となくは...」

「なら、四宮との交渉は、これまでの延長線上のビジネスの話として、俺がやるってことでいいか？」

「僕は構わないけど、あの父を口説き落とすっていうのは、並大抵じゃないと思うよ。犯罪者のレッテルを貼られた人間と交渉するとも思えないし」

キセキの意見に、しかしハジメは不敵な笑みを見せる。

「こういう事態になった以上、いずれ行政府も、知識の管理者である我々ワイズマンコートの存在を無視出来なくなる。今は混乱しているだろうけど、しばらくしてそれが落ち着けば、我々ワイズマンコートがこれまで行ってきた非合法的な活動の数々は、容認されることになるだろう。だから、このシャトルの所有権を渡すって持ちかければ、俺たちを匿うことで発生するリスクは十分に相殺される筈だ。四宮にとっては、先行投資として悪い話じゃないだろうと思う。勝算はあると思うよ」

「成程。この先、傾いて行く可能性の高い行政府に介入するための切り札が手に入る、と。確かに、父が好きそうな話かもね」

シャトルの存在は、間違いなく、やがて始まるであろう母星帰還事業の要になる。それは今後、マニチャトラスに代わって、四宮がこの先も世界の中心に居続けるための重要なアイテムになるだろう。

「ま、そこまで事態が収束する前に、司法府に捕まったら元も子もないから、とりあえずは身を隠さなければならない訳だが。俺の希望としては、それは奴らの裏を掛けるような思いがけない場所がいい。流石に、マニチャトゥーラにはもう手が回ってるだろうと思う」

「...なら、シャトゥーラにある四宮の別邸とか...かなあ？そこは表向き、管理を任せている人の名義になってるから、とりあえず時間稼ぎに身を隠すぐらいなら、お手頃？」

—— シャトゥーラ...

ただ、その名前を聞いただけで、様々な思いが去来してセイヤの胸は一杯になる。そんなセイヤを気遣うように、ナナミがこちらを見ているのに気付いて、慌てて笑顔で大丈夫というふうにあピールをする。そんなことぐらいで動揺する自分を認めたくはなかったし、ナナミにも悟られたくはなかった。

「シャトゥラーラか。そこなら、確か、博士が使っていたラボが残っていたな... シャトルを隠すには好都合か...」

シャトゥラーラというキーワードを与えられたハジメの中で、この事態に対処する為の計画が組み上がって行く。

霧月博士の研究資料の大半は、司法府に押収されたが、シュウヤが手を回し、それはそのままポーラエーカの公文書館へ収蔵されていた。件の研究施設は、民間に売却という形を取っていたが、そこを買ったのは、四宮の傘下の企業であり、実質ワイズマンコートに関連施設と言って構わない。

「それで、決まりでいいですかね？」

ハジメがマドカに結論を提示する。そもそも他に選択肢も無い訳だから、そこで異議は出なかった。

14 ソラに花の咲く午後 後編

シャトルに行き先をインプットする作業が一区切りついた所で、交代で休憩を取ることになり、一番下っ端のセイヤが食料の備蓄をしてあるという倉庫室から飲み物その他諸々のリクエスト品を取りに行くという役を仰せつかった。

船内は無重力ではないが、コロニーの中に比べれば重力はだいぶ弱い。だから、歩くというよりも宙を泳ぐという感じで、どうしてもへっぴり腰になりながら、壁伝いをそろそろと進むしかなく、慣れない動作に自分でももどかしさを覚える。先輩たちの大量のリクエストに、ナナミが心配して荷物持ちに付いてくると言ったのを、重力が弱いなら大丈夫だと断っておいて良かったと心底思う。どう見ても、この格好は情けない方に分類されるよな、と思う訳で…。ナナミに対して少しでも点数を稼ぎたい自分は、こんな些細なことにも見栄を張らずにいられないのだ。結局、例の弟発言についても、その真意を確認することは出来ず、おあずけ状態は、絶賛継続中なのである。

— 俺ってそんなに頼りないのかなあ…

そんなことを考えて、ふうとため息をつく。その隙を見計らったように…。

「うお～い、セイヤア…」

いきなりキセキの浮かれた声がしたと思ったら、その姿を確認する間もなく背後からまた羽交じめにされた。

— くっそ～身長差かっ。

自分とキセキの身長差が、こういう暴拳を許しているのだと気づいて憮然とする。その間にも、飛び付かれた勢いのせいで、二人の体は半分もつれたままで否応なしに廊下を流されて行く。

「…キセキさんてば、いきなり何すんですか、も～」

抗議の声を上げたところでセイヤの体が壁に接触して、キセキの体と壁の間でむぎゅっと押し潰された。

「んぎゃがっ…」

セイヤの口から、どうにも形容のしがたい情けない声が漏れる。

— ホント、ナナミ先輩がここにいないで良かったっていうか～～

カッコ悪いを乗り越えて、これはもう立派に無様。

「離して下さい、キセキさん…… てか、まさか酔っぱらってませんよね？」

祝杯の酒類は、自分がこれから倉庫に取りに行く訳だから、さすがにそれはないだろうと思うが、念のため聞いておく。

「え？ ああ… さっき鎮静剤代わりに2、3口飲んだだけだから、ぜ～んぜんっ平気い」

— って、飲んだんかい。全くこの人はあ～いつのまにいい～

そう思うセイヤの目の前で、キセキは懐からフラスコ（携帯酒瓶）を取り出して、それを軽く振って見せる。パシャパシャという音の具合からすると、残量はかなりあるようだから、本当に数口飲んだだけなのだろう。今日キセキがしでかしたことを思えば、それは明らかにオーバーワークであり、精神的な負荷も大きかったのだということは想像に難くない。その緊張を緩めてやるための薬だというのも、理解でないことはない。が…。

「大丈夫、酔ってはないからっ」

— 酔ってる人はたいていそう言いますよね～ 呂律も何だかアヤシイですよ？

「はいはい」

適当に相槌を打ちながら、セイヤは妙にしつこく絡んで来るキセキの腕を地道に引き剥がしにかかる。

「でね、僕はキミにね、話があるんだよね…」

「はいはいはい」

ようやく首のあたりに絡み付いていた腕を押し退けた。が、その途端に、今度は両の肩をがしっと掴まれて、少し乱暴に体を壁に押し付けられた。そこには力の加減も何もなく、セイヤは肩に食い込む指の痛みで顔を顰める。

「…やっぱ、酔ってますよね？」

— お酒って、確か重力弱いと、回りやすかったんじゃないかっけ…

「…頼むから…話、聞いてくれる？ 大事な話だから…」

至近距離で懇願するようにそう言ったキセキの表情は、あまり見せたことのない真面目な顔で、セイヤの中に戸惑いが広がる。

「いや、そりゃ聞きますけど…そんなに大事な話なら、出来ればシラフの時にした方がいいんじゃないかと…」

「...うん。それはね、そうなんだけど... シラフだとどうにも勇気が足りなかったっていうか... 僕はキミが思ってるほど、立派な人間じゃないからさ...」

そこでキセキが軽く唇を噛んで目を伏せた。

「...キセキさん？」

「セイヤ...。僕は、キミに許して欲しくて頑張った訳じゃないし、こんなに頑張ったんだから許せとか、そんなたわごとを言うつもりもない。ただ、もし世界を変えることが出来たら、キミに言おうって決めてたから... 言わなきゃって思っただけ。ああ、でも... それってもしかして凄くズルイこと... だったりするのかな... 僕はやっぱり、キミに許して欲しくて頑張っちゃったのかも知れないや。世界を変える... そのぐらいのことをしないと償えないって思ってたのは、キミに許して欲しかったから... なのかも知れないね。だって僕は、キミが大好きだから。キミに憎まれたら、きっと辛いと思うから」

「...ええと... 許すとか許さないとか、微妙に話が分からないんですけど... 何を...」

そこでキセキが意を決したように顔を上げて、セイヤを見据えた。その瞳にはいつもの陽気な光は微塵も無くて、どこか不安そうな影が揺らめいていた。キセキはセイヤの肩に乗せていた手を離すと、少し距離を取るようにして立ち、そして言った。

「キミが霧月博士の息子だって知った時、僕は、これは運命なんだって思った」

―― 運命。

その言葉がことのほか重く響いて、セイヤの心に不安を広げる。

「今まで目を背けてきたことに向き合わなくちゃいけないんだと、神様にそう宣告された気がした。...もう逃げちゃいけない... 罪を償うために、ワイズマンコートの人間として、四宮キセキである僕が、世界を変える。そうしなければならぬんだってね」

―― この人はいったい何の話をしようとしているのか。

戸惑いと不安が混ざり合って、心臓が早鐘を打つ。

「セイヤ...」

そして、そこで一呼吸おいて、キセキが告げた。

「キミのご両親を殺したのは、僕の父だ」

「.....え... っと..... え...? って.....」

告げられた言葉の意味が飲み込めない。

「...それって... どういう.....」

「...僕の父は、ワイズマンコートという組織を資金面でバックアップしている。でもその事実は、行政府に知られてはならない極秘事項だ。もしそれが表沙汰になれば、この世界での四宮家の地位も、市長としての立場も危ういものになるから。だから、自分とワイズマンコートとの関係が漏れるような事態が起こっては困るんだ。でも、その憂慮すべき事態が五年前のあの日起ってしまったんだ」

「憂慮すべき事態...？」

「霧月博士が司法府に拘束された」

「...拘束された？ 父さんたちが司法府に...？」

告げられた事実にセイヤの心は大きく波立つ。

「父さんの研究は、この世界を変えるため、人々の暮らしをより豊かにするためのものだった筈なのに、何でそういうことになるんだよ」

「変えるという思想そのものが、この世界では罪に問われる。それはキミだって、身を持って体験したじゃないか」

「そう...ですけど... でも、それで四宮市長が父さんを？」

「たぶん...」

「...たぶん？」

セイヤが訊き返すと、キセキが辛そうな顔で視線を外し俯いた。

「...父にははっきりと問い質すことは出来なかった。...恐ろしくて... 訊けなかった。本当のことを知るのが怖くて... でも、父ほどの力があれば、司法府に手を回して博士を助けることだって出来た筈なんだ。あの人は自己保身のために博士を見捨てて、切り捨てたんだよ」

「でも... それでもそれは、たぶん、なんですよ？」

「...じゃあ、うちの父が、あの日事故が起こることを知っていたって言ったら？」

「え...」

告げられた言葉は、否応なしにセイヤの心をぐっと締めつけ、その全身を緊張感で包みこむ。

「僕もね、セイヤ。あの日、シャトゥラーラにいたんだよ。そしてあのゲートで、ポーラエーカ行きのコンテナに乗ろうとしていた」

当時、キセキは十四歳で、親元を離れてシャトゥラーラの別邸に住んでいた。マニシャトゥラーラは、環境的にはあまり良い都市ではなく、そこで仕事に従事する人間以外の居住がほとんど認められていないからだ。

精神的にもまだ未熟な少年が、親の目の届かない所で、好き放題していた訳であるが、学校の成績や表だった素行に特に問題もなかったから、親に余計な干渉を受けることもなかった。そんな伸び伸びとした環境で自立心を大きく育てていた彼は、親に内緒で、その前年に行われた師官養成学校の都市選抜の予備試験を受け、これをパスしていた。そして数ヵ月後にポーラエーカで行われる本試験を受けるべく、あの日、コンテナに搭乗するつもりで、シャトゥラーラのゲートに赴いていたのだ。

もちろんそれは、ラドゥヴィアの大学で経営学の勉強をしろという親の意向を無視してのことであり、つまりそれは、親に無断の行為であって、立派な家出だった訳である。

ちなみに、ラドゥヴィアの大学には同じような上流の家柄の子弟が多く籍を置いており、彼は、そこで四宮家の後継者として、より有益な人脈形成を図ること望まれていたのだ。

行政府の師官など、エリートとはいえども所詮は宮仕え。人に使われる仕事なんぞ、四宮家の人間がやるべきものではない。―― 四宮家の当主の考え方とはそういうものであり、そのことを良く理解していた彼は、自分の意志を通すためには、家出という手段を選ぶしかないと考えたのである。

「何事もなければ、僕は三番目のコンテナに乗るはずだったから、搭乗口のすぐ側の待機シートに座っていた。そこで僕は、キミのご両親がゲートで司法府の人間に拘束されるところを目撃した」

「本当に...」

「ああ。あの日、シャトゥーラからポーラエーカへ送られる筈だった貨客コンテナは3つ。話によると、キミはその最初のコンテナに乗っていたんだよね。なら、キミたちが搭乗を終えてから、ゲートで転送が始まるまで、予定より時間が掛かったらろう？ 覚えてないかい？」

―― 言われてみれば...

セイヤは落ちつかない気分を宥めながら、すでにだいぶぼやけてしまっている五年前の記憶を呼び起こす。

「...転送予定の時間が遅れるみたいなアナウンスが何度か入って...」

乗客のざわめく声と。遅延に対する不満や苛立ちを声高に非難する声と。コンテナ内がそんな空気に包まれて、とても居心地が悪かったのを思い出す。ゲートでの滞留時間が延びるという事は、体に与える悪影響を増大させるから、きっと、そこにいた多くの人が不安や苛立つ気持ちを抱えていたに違いない。

「その遅れの原因が、霧月博士の拘束のごたごただったんだ。キミのご両親は、二番目のコンテナに乗ろうとしていたみたいだけど、搭乗の直前で拘束されて、その後、司法府の捜査官三人と共に三番目のコンテナに乗せられた... らしい」

―― 三番目って、ユノと同じ...

「え、でも、満席だったんですよね... あの日のコンテナは全て...」

「これは、事故の資料の中にあつた搭乗者名簿を確認して分かったことなんだけど、三番コンテナには、博士たちが乗る筈だった二番コンテナに振り替えた二名分の席と、直前キャンセルで空いた席を合わせて、五席分の空きがあつた」

「キャンセルした人がいたんですか... 三人も...」

「その内の一人が僕だよ... コンテナの搭乗が遅れたせいで、父の部下に捕まって連れ戻されたんだ。で、その時に、父の部下が口を滑らせたっていうか...」

―― 間に合って良かった。乗ってしまっていたら、本当に取り返しの付かないことになる所でした。

「...って」

言われた時は、主の命令を無事に遂行できた安堵の言葉としてしか聞かなかつた。だが、その後で大きな事故が起きて、大勢の人が亡くなったことを知ってからその言葉を思い起こした時、それは別の響きを持ってキセキの中で再生された。そしてそれは、キセキの心に重たい疑念を生じさせた。

―― もしかしたら父は、事故が起きることを知っていたのではないかと。

そしてその疑念は、その後、ゲートの修復を待つマニチャトゥーラへ送り返されたキセキが、父親から聞かされた話によって、更に大きくなることになる。

そこで語られたのは、四宮家とワイズマンコートという組織との関係であり、四宮家が行政府の意向に逆らっても、『世界の理を解き明かすこと』にこだわる理由だった。それはまた、キセキに自分の立場というものを認識させる為の話でもあった。

「お前は、この私の意向を無視して、ポーラエーカへ向かおうとしていたそうだな...」

「.....」

「...行政府師官養成学校の予備試験の成績表は見せて貰った。Aランク評価なのだというのなら、適性はあるのだろうな。志望は刻印師か」

「...はい」

「いいだろう。それ程の才能だというのなら、いずれ刻印師として、我らワイズマンコートの役に立つがいい」

「...ワイズマンコートの為に...ということですか？」

「お前もその系譜に連なる者なのだからな。そういう覚悟の上でポーラエーカに行くというのなら認めよう。いずれ師官となった暁には、行政府の内情をこちらに流せ」

「僕にスパイの真似ごとをしると？」

「一つ言っておく。これは四宮の後継者として、知っていなければならない事実だ。マニチャトラス鉱石は、あと百年は持たん」

「...百年...」

「タイムリミットはもう決まっている。それに間に合わなければ、我々はこの世界と共に永遠の眠りにつくことになるだろう。分かるな、あまり悠長なことをしている暇はないということだ」

—— だから、なり振りなど構ってられないのだと。

目的を達成する為ならば、手段を選ばなくても許されるのだと。

多くの犠牲を回避する為ならば、小さな犠牲には目をつぶるべきなのだと。

そういうことなのですか？ ——

「...僕はあの日、ゲートで拘束される霧月博士を見ました」

そう告げても、父の表情に変化は無かった。

「博士は、外の世界へ出る為のシャトルの建造を密かに進めていた。そして、その計画に必要な物資を調達する為に、行政府の転送システムに介入して物資を掠め取っていた。そこを司法府に察知されたのだ」

「博士はワイズマンコートの中心人物であり必要不可欠な人だった。父さんは、そんな博士の計画に賛同したからこそ、資金援助をしていたのではないのですか」

「ああ、そうだ」

「それなのに、父さんは博士を見捨てたのですか」

「見捨てた訳ではない」

その声が微かに怒りを含んだ気配を感じた気がして、キセキの感情の昂りにブレーキが掛かる。それでも、心の底から湧き上がってくる言葉を止めることは出来なかった。

「...だって、博士が拘束された時、父さんが四宮の力を使っていたら、少なくとも博士はあのコンテナに乗ることはなかった筈でしょう...あの事故に遭うことは...」

この自分を引き止めることが出来たのだ。博士を救うことが出来なかったのだとは言わせない。

「...聞け、キセキ。我々の計画は未だ道半ばだ。四宮がワイズマンコートと関わりがあると知れば、このマニチャトラーの統括権はポーラエーカの行政府に持って行かれる。先の事を考えれば、あの時点で四宮の名前を出す訳にはいかなかった」

父はワイズマンコートという組織を守るために、博士という個人を切り捨てたのだと。

そう思った。

どんな理由を付けようとも、それが曲げようもない事実なのだ...

—— 救えたハズの命。この人は、それをいとも容易く捨て去ったのだ。

確かにそれは、組織のためだったのだろう。だが、そこに我が身の保身を思う考えは、微塵もなかったのか。

「.....そんな理屈...」

飲み込めと言われた理屈で、無理やりねじ伏せられた心が、抗うように、父親に対する憤りをどうしようもなく膨らませる。

——もしかしたら、この人は、組織を守るという大義のために、行政府の手に落ちた博士を自らの手で葬り去ったのではないか。——もしかしたら、あの事故すら、そのために...

そんな確認もしようもない怖ろしい考えが、止めようもなく頭の中に広がっていく。

その苦しさから逃れるために、自分は耳を、目を閉ざし、そして心を殺した。

「...だってさあ... 博士が拘束されたことを知ってて、コンテナに何かあるって知ってたってことはさ、そういうことになるんじゃない...」

キセキが軽く鼻をすすって天井を仰いだ。

それはつまり、キセキの父親が、あの事故を意図的に引き起こしたということになるのか。

「...でも、やっぱり、それだけじゃ推量の域を出ないっていうか。それに、言っときますけど、百歩譲って万が一そういう事実が確定したとしても、俺がキセキさんを憎むとかって、あり得ませんからっ」

きっぱりはっきりそう宣言してやると、キセキが驚いたような顔をしてこちらを向いた。

「.....ええと...」

そして、何か言いたげに、口が数回動く。しかし、出て来たのは声ではなくて....

セイヤが見据える前で、キセキの目にじんわりと涙が浮かんだ。

「...ああ、もう」

キセキが慌てたように袖口でゴシゴシと目元を擦る。

「...どうしよう...これ、止まんないや」

そう言いながら、困ったような顔をしてキセキが笑う。

「ハンカチぐらい持ってないんですか、全く」

セイヤがハンカチを差し出すと、キセキが不本意そうに言う。

「だってさあ...僕、未だかつて人から泣かされたコトとかないんだけど」

「言っときますけど、俺が泣かした訳じゃないですからね」

「...全く、この後輩は無自覚なトコが始末に負えないっていうか...」

「はい？」

「いやいや、何でもありません」

ずっと心に抱え込んでいた重荷が、思いがけないセイヤの一言で軽くなった気がした。

大きな罪を犯したのかも知れない父親への疑惑から抱え込んだ嫌悪感と罪悪感。そんなものから逃れたくて、自分はいくらも何倍も勉強をして、仕事もがむしゃらにこなした。...そうすることで、誰かの役に立って、誰かに感謝されれば、その瞬間にだけ、辛うじてその負の感情の痛みを忘れることが出来たからだ。だからずっと全力で走り抜けて来た。足を止めたら、抱え込んだ心の重みで動けなくなりそうで、怖くて休むことすら出来なかった。誰にも言えないこの苦しみを、理解してくれる者が現れるなんて夢にも思っていなかったから。

それなのに...

—— こんなに心地のいい涙があるなんて、知らなかった...

「だいたいですね、俺はキセキさんが、もの凄く頑張ってるのを知っているし、尊敬だってしてるんですからね。世界がひっくり返ったって、嫌いになんかなる訳ないじゃないですか」

「...いや、もういいから、これ以上は...」

感動を通り越して、こっ恥ずかしさが立つ。照れているのがバレないうちに、話の軌道を本来の方へと修正してやらなければならない。許して貰えるということに浮かれて、喜びに浸っている場合ではないのだ。世界を変えただけでは、まだ不完全だから。セイヤが失ったものを取り戻してやる事が出来なければ、自分は償ったことにはならない。そう思うから...

というよりも、償いは勿論なのだが、自分は多分、こいつの心からの笑顔が見たいから。

つまりそれは——

「こんなにいい奴が、僕のお兄ちゃんになってくれるなんて、ホント感動ものっていうか」

「いや、だから、その話はまだ未定でしょうが... ていうか、見つかった前提の話はもう止めて下さいよ」

セイヤが僅かに眉根を寄せる。

「え？ ユノちゃんを探しに行くっていう話、僕は至極まじめに言ったつもりなんだけど？ 勿論、見つけるつもりでいるし」

「...やっぱり、まだ酔ってます？」

そう言って今度は、あからさまに顔を顰める。

「だ〜か〜ら〜、僕、元々酔ってないし？そもそも、僕は酒には強いんだよ」

「.....」

「ホンキだよ、僕は」

「.....なら言わせて貰えますけど、死亡が確認出来ないから、消去法で行方不明なんですよ... ユノは。俺だって探さ

なかった訳じゃない。でも、この世界にはユノに関する手がかりも、痕跡も、何ひとつ残っていなかった。つまり、それは..... ということになる訳でしょう... だからもう、これ以上は...」

訴えるような目で言葉を重ねるセイヤの姿はやっぱり痛々しくて、普段はおくびにも出さないが、やはり癒しようのない傷を抱えているのだと思う。だからこそ自分は、ここで引き下がるわけには行かないのだ。

「話の続き、しても構わない？」

「いや、でも...」

キセキの攻勢に押されながらも、セイヤの歯切れは悪い。

「...だいたい、ユノを探すって言ったって、具体的な手掛かりとか、何もない訳ですし...」

「手掛かりなら、あるかも知れないんだ」

「え...」

セイヤの表情が固まった。

「僕、もしかしたら、ユノちゃんに会ったコトあるのかも知れないんだよね... 事故の後でさ...」

「...ええ？」

「うん。事故から数カ月してゲートが復旧して、僕は最初の転送でマニチャトゥーラへ送られることになった。これはその時の話なんだけど...」

キセキのやわらかな声色のせいなのか、告げられようとしている事実は、深刻なものではないような気はするものの、セイヤはどこか身構えてその話を聞く。

ゲートでコンテナの搭乗を待つ間、四宮家のように上層の者には、一般の人間が入ることが出来ない特別エリアに貴賓室の個室が用意されるのだという。そこは豪華な調度品のしつらえられた部屋で、ふかふかのソファーにちょっとした軽食の用意もされていて、と。一般人には、聞くだけで居心地の良さそうな場所である。

だが、そこに見張り付きでそこに押し込められていたキセキにとっては、そこは到底、居心地の良い場所ではなかった――

「もうさあ、親の横やりには腹が立つし、そんな横暴にどこにも逃げ出せずに唯々諾々と従うしかないだけの自分の無力さにも腹は立つしで。苛立ちと絶望と、あの時はそんな感情で気持ちがパンパンに膨れ上がってたんだよな～。そんな感じでさあ、何か抵抗の意志を示さずにはいられなくてね。そしたら丁度、インテリアに置いてあった酒瓶が目について...」

「...まさかそれ、飲んじゃったとか？」

「そうっ。付き添いの人間がちょっと席を外した隙にね。そこが僕の人生初飲酒。飲み方も分かんなくて、そのまま、ぐびぐびと」

「.....で、どうなりました？」

「うん。瓶半分ぐらい開けたところで、一回意識が飛んで、そこから地獄の苦しみ、みたいな？」

「うわ～」

気が付いた時には、ソファーに寝かされていて、そこには誰もいなかった。意識が戻った途端、込み上げた吐き気に、キセキはほとんど這う様にして部屋を出て、廊下の向こうにあるトイレへ向かったが、その途中でまた意識が途切れて...

――そこで僕は出逢ったんだよ。

それはもう...

花のような可憐な女の子に――

「え？」

――花のような...女の子...って...

キセキの言おうとしていることに、セイヤの鼓動が速まる。

「その子は、廊下で倒れていた僕に、グラスに水を持って来てくれてね... それで少し気分が良くなった気がして、そこで安心したんだろうなあ...僕。そのまま眠っちゃったみたいで」

「...それ...って」

「でもね、キミに会うまで僕はずっと、あれは夢だったんだって思ってた。何しろ次に意識が戻った時には、僕はもうマニチャトゥーラの屋敷で寝かされていたんだからね」

「.....」

「セイヤ、図書館であの絵を見つけた時、僕がどれだけ驚いたか分かる？ 夢だと思っていた女の子がさ、目の前の壁に描かれてるじゃない？ もの凄くドキドキしたよ。心臓が壊れちゃうんじゃないかってぐらいにね。それでも、その時はまだ、彼女が現実の世界の人間なんだとは、全く思わなかったんだけど。でもそれを描いたのがキミで、その女の子がキミの妹だって聞いた時に、僕が見たのもしかしたら夢ではなかったんじゃないかと思うようになった」

次第にセイヤは混乱し始める。キセキは一体何を言おうとしているのか。

「でも、確証もなしにこんなことをキミに言うべきじゃないと思ったし、父のこともあったから、まずは自分で調べてみようと思ってね。で、その確証を得たのは、書庫の資料を漁っていて、三番コンテナの搭乗者名簿を確認した時だった」

――確証...って。...まさか...

「ねえ、セイヤ、もしかしたらキミの妹は、あの日、あのコンテナには乗っていなかったじゃないだろうか。僕の他に直前キャンセルをした残りの二人というのが、名前はもちろん違うんだけど年齢性別から判断して、キミのお父さんの助手だったという女性と、キミの妹だった可能性が高いような気がするんだ」

「ユノ... が」

「そう。だから、僕が事故の後で、ゲートの特別エリアで会った女の子は、夢なんかじゃなくて、ユノちゃんだった。僕は今ではそう確信している」

「.....本当に...生きて...るのか」

死んだのだとは信じていなかった。と言えば、語弊があるのかもしれない。信じたくはなかったというのが、本音だ。行方不明だから、生きてると信じていていいのだと。そう思っただけなのかも知れない。もう気持ちのどこかでは、その生存を諦めていた。でも、認めたくなかっただけなのだ。それを、キセキの言葉でいきなりひっくり返された。

まだ不確定な要素の多い話で、手放して喜んでいいのか分からない。心に膨れ上がる期待があまりにも大きすぎて、それがもし間違いだったらと思うとたまらなく怖い――。

「...っ」

無意識に息を詰めていたことに気づいて、セイヤは慌てて空気を吸いこむ。それでも、普通の呼吸はすぐには戻って来なくて、ただ短い呼吸を繰り返す。

――生きてる...？ 本当に...？ 俺はその希望に縋っていいのか。でもそれなら、何で...

「おいおい、大丈夫？」

そんな様子に、キセキが慌ててセイヤの背中をさする。

「...すみません、もう平気...平気ですから」

少しずつ落ちついて来た呼吸の中で、どこかでその事実を信じ切れない心が、疑問を投げかける。

「...生きているなら」

「うん？」

「生きているなら、どうして... ユノは戻って来ないんですか、俺のところに。こんなに待ってるのに... どうして」

「セイヤ...」

「俺は...」

白黒をつけて事実を事実として確定させることが怖い。まだ全てが仮定の話で、言ってしまうとキセキの思い込みの話で... そんなものを抛り所にして、どこかで生きているかも知れないという曖昧な希望を手放した先に待っているのが、最悪の結果にならないという保証など、どこにもないのだ。

「生きていたって会いに来れない状況なんていくらでもあるし、ユノちゃんの痕跡が全く残ってなかったのだから、誰かがデータをいじった可能性だって否定できないだろう」

「そうですけど...」

―― 本当にいいのか。俺はもう一度、希望を持って...。

繰り返した失望の記憶が、セイヤの決意を鈍らせる。

―― そこへ。

「大丈夫、キミが望むなら、僕は何度でもキセキを起こしてみせるよ」

瞬間、全身に鳥肌が立ったのは内緒だ。

「.....たく...そういうこと真顔で言うんだもんなあ、この人は...」

この人が出来ると言えば、それは出来るということなのだ。キセキという名前が伊達ではないことを自分はもう知っている。失望に傷つくのを怖がっている場合ではない。ここで自分が踏ん張らなくてどうするのだ。そんな気持ちにさせられる。

「お兄さん、ここはひとつ、僕を信じてみない？」

「今更ですよ」

四宮キセキという人間を、自分は信頼している。

「...ひとつ、言っときますけど」

「お？」

「ユノが見付かるまで、お兄さんは封印してくださいよ」

「えええ～なんでっ？」

「当然でしょうがっ」

「だ～っ思いつきりやる気に火がついた～っ。荷物取りに行ったら、すぐに搜索開始するよ～」

床を勢いよく蹴って、キセキはそのまま廊下の向こうへ飛んでいく。

「キセキさん」

「おお？」

肩越しに振り向いたその顔を見て、セイヤが徐に言う。

「...ありがとうございます」

―― 自分一人では多分、この一歩は踏み出せなかった。

一瞬、間があって、キセキは何事もないように顔を戻すと、そのまま手で壁を押し先へ移動していく。そして遠ざかりながらその声が聞こえた。

「荷物運びなんて、お安いで用だよ」

セリフの語尾がはっきり聞き取れなかったが、

―― 全くこの後輩は...もお？

...多分、そんな風に聞こえた。

15 その花の名前 前編

セイヤたちがシャトゥーラーラの四宮の屋敷に身を寄せてから数カ月で、良くも悪くも世界は文字通り大きな変貌を遂げた。

オクトグランが通常の空間に戻り、かつての観測システムが復旧して程なく、彼らは星の海の中に、ひときわ蒼く美しく輝く宝石を見つけた。それは紛れもなく、彼らの母星である惑星ドウルヴァであり、その発見の歓喜は、瞬く間にオクトグランを駆け巡った。

千数百年という長い間、そこで待ち続けてくれていた恋人との、一刻も早い再会を望む声が世界中に湧きあがった。そして、その日を境に、世界はドウルヴァへの帰還に向けて大きく動き出した。

ハジメの言ったように、帰還事業には隔離以後失われたさまざまな技術の復元が不可欠であり、その情報を保持し、そのうちの僅かながらも古の技術の継承を行ってきていたワイズマンコートが存在を行政府は受け入れざるを得なかった。その結果として、シュウヤは最高評議会のメンバーに復帰した。

セイヤたちの処遇に関しても、職務放棄という名目で数週間の謹慎と僅かばかりの減給を通告されたものの、「やらかしたこと」に関しては事実上の不問とされた。

しかし、帰還事業の開始と同時に行われた行政改革で、軌道予報官をはじめとする師官職自体がなくなってしまったために、彼らが以前の仕事に戻ることはなかった。新たに配属された場所は、それぞれに帰還事業に関わる職種であったが、それをまた左遷が否かで盛り上がったことは余談である。

ただ一人、四宮キセキはその時すでに行政府を退官していた。というのも、あの時、ハジメがキセキの父、四宮トウゴと行った交渉の中で、彼らを匿う条件としてシャトルの譲渡の他に、トウゴが出した条件があったからである――

「で、結局さあ、今回のことは、父の掌の上で踊らされてる感がものすごいする訳... ああ、もうどうしてくれようね、この敗北感というか、屈辱感一杯のモヤモヤっ」

「... まあ、そうですね」

ひと月ぶりに顔を合わせたキセキがこぼす愚痴に、セイヤは苦笑するしかない。

セイヤが休暇になるのを待ちかねたようにマニシャトゥーラに帰っていたキセキから呼び出しが来て、彼らはここサプタディヤーナで落ち合うことになった。

この第七都市サプタディヤーナは、医療関係の施設を集約させた医療都市である。

この都市には四宮の経営する病院や医療学校がいくつかあり、キセキはそのうちの一つへ理事長として着任することになっていた。それが、四宮トウゴ氏の出した第一の条件だったからだ。

そして、キセキがサプタディヤーナに赴くにあたってセイヤに同行を求めたのは、その上に親から突きつけられた第二の条件のせいである。

「...お見合いっていうのはさあ... 気に入らなかつたら断って構わないんだよね？ ねっ？」

キセキが縋るようにセイヤに確認する。

「まあ、そうですけど...」

一度は断った筈の結婚相手が、本人の知らない間にすでに許婚ということになっていて、その上での顔合わせである。おまけにその相手は、キセキがこれから赴く医療学校の研修生なのだと聞けば、お見合いなんてキセキを言いくるめるための方便だというのは見え見えの感がある。

キセキの父親がそう望んでいるのなら、これはもう決定事項なのだろう。そうは思うものの、流石に本人にそうはつきりと言うのは憚られる。そもそもキセキの性格からすれば、その気も無いのに、相手に会うなどということは到底あり得ない。にもかかわらず、彼が親の設定した見合いの席に戦々恐々としながらも赴くのは、ひとえにユノの、そしてセイヤのためだからだ。

時は少し遡る。

シャトルでシャトウラーラへ向かう間、彼らはあちこちからデータを引っ張って来て、ユノに関する情報収集を開始した。セイヤが探しても見つけられなかったユノの痕跡は、しかしキセキたちの手に掛かると、消去改ざんの復元という作業を経て、僅かだが浮かび上がって来た。だが、それもユノの現在の所在を確定するには至らず、彼女の足取りは、事故の後でマニチャトウラーラへ向かったという所で途絶えてしまった。

キセキが貴賓室で会ったのがユノだったのだとすれば、二人を匿ったのは、四宮トウゴだったという可能性が高い。みんなで頭を付き合わせてそんな話をしていたところに、ハジメが件の交換条件... キセキのサブタディヤーナ行きの話を持って戻って来て、そこでキセキが思い出したのだ。

かつて父の持って来た結婚話の相手の名前を ——

—— 門倉ミア。

それが、その人の名前である。

「門倉って、何か聞き覚えがあるような気がしたよ」

キセキが少し申し訳なさそうに、しかしどこかすっきりした顔でそう告げた横で、マドカたちは互いに肩を竦めて顔を見合わせる。セイヤの父親がユノを預けた女性の名前も、門倉といい、これまで自分たちはその彼女のデータも散々さらっていたのだ。

ちなみにその女性 —— 門倉マイという人は、研究所で長年セイヤの父の助手を務めていて、仕事上で父がもっとも信頼を寄せていた人物である。

「門倉つながりで、年齢的に考えると、ミアって子はマイさんとかいう人の娘ってことか？」

カオルにそう訊かれて、セイヤは記憶を呼び起こすように考え込む。

「...記憶に間違いがなければ... マイさんって、独身だったような気がする」

あの当方で、歳はたしか三十前後。明るくてハキハキとした印象の女性だったのを覚えている。子供の扱いが上手な人で、ユノとふたりよく遊んで貰った。家族はいないと言っていて、研究所の寮に一人で住んでいた。...と思う。

「データ上でも、セイヤくんの記憶とだいたい相違ないわ。まあ、キセキのお父さんが、その門倉さんと何らかの関わりがあるっていうのは、濃厚ってことよね。彼女は霧月博士の助手だったんだし...」

そして、問題のミアのデータが、俗に四宮ファイルと呼ばれている、殊更セキュリティチェックの頑丈なところに入っており、彼らの腕を持ってしても、閲覧すら出来なかったという事実が、かえってそこに何かあるという疑惑を確定させた。

「この、全力で隠しに来てる感は、ホント何なのかね」

あちこち角度を変えながらデータにアクセスを試みていたカオルが、モニターに表示されるアクセス不可の文字と数十回お見合いしたところで、お手上げという感じで苦笑する。

「四宮家の後継者の花嫁候補だから... という理由付けも出来なくはないが、たしかに徹底し過ぎている感はあるな」

思案顔でハジメが言う。

「もしかしたら、そのミアさんがユノちゃん... だったり？」

だが、マドカのその思い付きはすぐにカオルに却下される。

「だったら、余計、隠す理由はないだろう」

「そうよねえ...」

事故の後で、霧月ユノという少女が生きていたのだという情報が、誰かにとって不都合なものだったのだと結論づけるには、材料が少なすぎる。

「ここはひとつ、お父さんに直接聞いてみるっていうのは、どう？」

マドカがそう提案すると、キセキは見ていて気の毒になるほど、萎れて情けない表情を浮かべた。

「そりゃあ、あんたがお父さんに頭を下げるの、ものすご〜く不本意だっていうの、分からなくはないわよ？ でもこれはセイヤの... いえ、あなたの愛しいユノちゃんのためでしょう？」

「くう...う」

「マイさんの消息が分かれば、ユノちゃんの行方だって分かるかも知れないじゃない？...」

「...うん... そうだよな... ..なんか、僕が直接話に行ったら、その見返りに更に条件増やされそうな気もするけど... 愛のためだもんね... うん...」

ブツブツ言いながら、キセキはふらりと立ちあがる。しかし、それをハジメが顔を嚙めて押し留めた。

「ちょっと待て。どんな些細なことにして、こちらからこれ以上のお願いをしたら、条件交渉が不利になるから止めてくれ。相手は四宮家のトップだぞ、少しでも弱みを見せたら、足元をすくわれる」

「でも」

「いいか？ 四宮キセキ、言われた条件は全て飲め。そして、親の言いなりに見合いでもなんでもしろ」

「は？」

「で、そのミアって子に会って聞いてみればいいだろう。キミのお母さんは門倉マイさんですか。そっちの方が確実だ」

「...ああ、成程... って、ええっ？」

「正直、お前がいたから付け込まれた。あの人は、間違いなくお前という存在を手放したくないと考えている。だから、お前が向こうの出した条件で首を縦に振らなければ、この交渉は成立しない。分かるか？」

ハジメは理路整然と容赦なくキセキを追い込んでいく。

「あのう...」

そこへ、マドカの横でマイのデータが表示されているモニターを覗きこんでいたナナミが、少し自信がなさそうに手を上げる。

「...私、このマイさんっていう人、見掛けたことがあるような気がするんですけど... 父のお見舞いに行った時に、その療養所の患者さんで似た人がいたような...」

「え？ それってどこなの？」

マドカの勢いに、ナナミが及び腰になりながらも答える。

「サブタディヤーナの...」

「サブタディヤーナ... そう... サブタディヤーナ」

マドカがふっと意味深な笑みを浮かべる。

「キセキ。これはもうあんた、行くしかないわね、サブタディヤーナへ」

マドカに止めを刺す様に言われて、逃げ場を失ったキセキはついに項垂れて頷いた。

―― 以上が、彼らが今この状況に至る理由である。

二人が指定された湖畔のレストランに着くと、オープンテラスに少女が一人、こちらに背を向けて座っていた。

「あの子、ですかね？」

セイヤが尋ねると、返事の代わりに、キセキが大きく息を吐くのが分かった。

「...今更ですけど、写真データとか貰わなかったんですか？」

「え？ ああ... そう言われれば...」

キセキがすでに上の空で答える。

―― それって、やっぱり結果ありきのセッティングってことだよなあ....

キセキは話だけ聞いて断るつもりで来ているようだが、断るという選択肢は、初めから用意されていないということなのではないか。まあ、この人のことだから、その気になれば家出でも何でもするんだろうけれど、半分は自分のせいでそういうことになるのだとすれば...

―― 申し訳ないっていうか...

「こんにちは、門倉ミアさん？」

セイヤがぐちゃぐちゃと考えごとをしている間に、少し離れた場所からキセキが少女に声を掛けた。ぼんやりしていたのか、声を掛けられた彼女はハッとされたように顔を上げて、こちらを向いた。

―― その瞬間。

「.....どうして...」

信じられないというように彼女の声がそう言った。その声は少し震えていた。そしてそれはキセキではなく、セイヤに向けられたもので、言われた方のセイヤはその彼女の顔を見据えたまま固まっている。

その理由をキセキはすぐに理解した。彼女には壁画の少女の面影があったからだ。

「...ええと、もしかして、ユノちゃん？」

その名を告げられて、彼女は見るからに狼狽したような顔をして勢いよく首を振る。

「...違います。私は...」

「.....ユノ...」

セイヤが絞り出すような声でその名前を呼ぶと、彼女がびくりと身を竦めた。

「...何やってんだよ... お前..... ホントに何やって..... 俺がどんだけ... 心配したと.....」

張り詰めていた糸が切れてしまったのだろう。力が抜けたように、セイヤは手を付いてその場に座り込む。

「お前... 何でこんなところにいんだよ..... ミアなんて偽名まで使って.....」

「...偽名なんかじゃない。門倉ミア、それが私の本当の名前だもの」

「ええ?...」

—— カドクラミア、ソレガ、ホントウノ、ナマエ

こいつ今、そう言ったのか？セイヤが呆然として顔を上げる。

「なに... いったんの?... おまえ...」

—— こいつはユノなのに...何でユノじゃないなんて...言うんだよ。

訳が分からない...。大きな困惑のなかで、どうやら自分は、目の前の彼女から拒絶されているのだということに気づく。そして、絆を断ち切ることを望んでいる彼女の手によって、その理由が容赦なく突きつけられる。

「だって私は、門倉ミアなんだもの... 私たちの幸せを壊したあの人の... 門倉マイの娘なんだもの」

「...お前」

目に涙を一杯に溜めて、そう訴える彼女に、セイヤは言葉が出ない。必死に感情を押し込めようとしているのが傍目にも分かる。でも当人の思いとは裏腹に、堪えようとすればするほど、大粒の涙が頬を滑り落ちていく...。

そんな姿を目の当たりにして、五年という時の隔たりなど無かったように、そのスイッチは簡単に入った。

—— 何やってんだ、俺は。全く... 泣かしてどうするよ。

迷惑だと思われようが何だろうが、こいつが自分の妹である限り、自分の中の兄の部分がそれを放っておくことなど出来ないのだ。セイヤは立ち上がると、目の前の小さな肩をそっと抱き寄せた。

「...ごめんな。お前だって、この五年、一人で頑張って来たんだよな... もう、大丈夫だから..... 大丈夫...もう俺がここにいるから。もう... ひとりで我慢しなくていい」

セイヤの言葉に、腕の中の小さな体が肩を震わせて幾度もしゃくりあげる。そんな彼女を宥めるように、彼はしばらく、その背を優しく叩き続けていた。やがて ——

「お兄... ちゃ...」

腕の中で吐息のように微かに、そう呟く声がした。

「...何があった？」

涙が収まってようやく少し落ちついた感じのユノに、セイヤが優しい声で訊く。

「あの時、俺たちがゲートで離ればなれになってから... 一体...」

「.....あの日...」

ユノが俯きながら、記憶を辿るように話を始める。

「私は、マイさんと一緒に、搭乗手続きが始まるのを待ってた... そしたら、搭乗口で何か騒ぎが起こって、それに気付いたマイさんが、怖い顔をして今日はコンテナに乗れなくなったからって、そう言って、私をゲートから連れ出したの。私は、お兄ちゃんたちを待ってるって言ったのに、聞いて貰えなくて、そのままお父さんの研究所へ連れていか

れて...」

「ああ、やっぱりキミはコンテナには乗らなかったんだね」

キセキが言葉を挟むと、ユノが頷く。

「そして研究所へ行ったマイさんは、あなたのお父様、四宮トウゴさんに連絡を取った」

「僕の父に...？」

「シンゴさんが司法府の人間に捕まってしまった。自分は是が非でも、彼を助けたい —— 彼女はそんな話をしていたわ」

—— シンゴさん。

その呼び方にセイヤは違和感を覚えた。マイさんは普段、父さんのことを博士と呼んでいたのではなかったか。

「あなたのお父様は、マイさんがやろうとしていたことに反対していたようだったけれど、彼女は引き下がらなかった。自分はシンゴさんがやっていたのを何度も見ているし、やり方は分かっているから、絶対、大丈夫だからって... コンテナはマニチャトゥーラに送るから、シンゴさんを助けてくれって...」

ユノの話に、キセキが驚愕の表情を浮かべる。

「...それは、彼女がやろうとしていたのは、まさか... 刻印の書き替え？」

「ええ...」

ゆっくりと、ユノが頷いた。

あの時――

研究室内に不気味に響き渡っていたエラー音は、今も生々しく自分の頭の中に残っている。目の前で何が起きているのか、まだ十歳の自分には分からなかったが、只事ではないマイの切迫した様子に恐怖すら覚えた。自分はただ部屋の隅で、縮こまって震えていた。

何かに憑かれた様に無心に端末を叩き続けるマイに、やがて通信モニターの向こうから、四宮トウゴが怒鳴りつけるような声で言うのが聞こえた。

「よせ、時間切れだ、マイ。この刻印速度では転送シークエンスの開始には間に合わない。今すぐ刻印を元の設定に戻せ」

「イヤ... もう少し... もう少しだから...」

「止めるんだ、マイ、これ以上はもう...」

「ダメよ。だって私たちは、こんなことで彼を失う訳にはいかない... 失う訳には... いかないのよっ...」

マイの悲痛とも言える叫び声の直後、まるでその思いを拒絶するように、全てのモニターがエラーを表示して沈黙した。

「...一緒に夢を叶えようって...あなたが言ったんじゃない...」

呆然としながら、呟くようにそう言って、マイはその場に崩れ落ちた。

自分たちはその後、トウゴの指示を受けて来たという男に連れられて研究所を後にし、しばらく身を隠すことを余儀なくされた。

――それが、あの事故の原因か。

キセキは天を仰ぐ。

刻印が確定していないことに気づかずに、転送が開始されてしまえば、コンテナはどこに飛ばされてもおかしくはない。だから恐らく、ギリギリの所で、門倉マイは、書き替えのキャンセルをしたのだろう。そして最初の設定通り、コンテナはポーラエーカに転送されはした。だが、そのことが、逆に被害を大きくすることになった。急なプログラムの変更はシステムに負荷を与え、転送座標に僅かな誤差を生じたのだ。その僅かな誤差のせいで、コンテナはゲート本体に衝突することになった――

――見捨てた訳ではない。

父のあの言葉に含まれていた怒りの感情は、大切な者を救うことが出来なかった、自身の無力さへの憤りだったのだと気づいた。そして父もまた、この子を保護し守ることで、それに対する償いをし続けていたのだと。

「でもその時はね、私まだ、自分が何を見たのか理解していなかった。だから、それ以来、塞ぎこむようになって体調を崩したマイさんをおかしいと思って、一生懸命看病したりしてね...」

ユノがどこか自嘲めいた笑みを浮かべる。

「でもマイさんの様子は悪くなる一方で...それで四宮のおじさまがサプタディヤーナの療養所を紹介して下さって。私は、みんな事故で死んじゃったから、自分にはもうマイさんしかいないんだって、そう思っていたから、彼女と一緒にいさせて下さいってお願いしたの。そしたら、一緒に行くには、マイさんの家族だということにしないと、行政府の許可が下りないからって言われて...」

「それで、マイさんの娘ってことに？」

「そう。門倉ミアっていう新しい名前のIDを作って貰って... 私はマイさんの娘になった..... このサプタディヤーナの環境も良かったみたいだし、私が娘になったのも嬉しかったみたいで、彼女の病状も少し安定して、それから二年ぐらいいかなあ... 本当の親子みたいに仲良く暮らして。...でもね、時間がたつうちに、事故のこととかだんだん知るようになって、色々なことが分かり始めてきたら、ああ、あれは、そういうことだったのかって... ある時、ふと気づいたの.....

」

—— だって私たちは、こんなことで彼を失う訳にはいかない...

「私たちは... というより、あれは多分、『私は』ということだったんだろうって...」

「私は...？」

ユノの言おうとしていることが良く分からずに、セイヤが怪訝そうな顔をする。そんなセイヤにユノはどこか冷めた目で見据え、少し苛立ちを帯びた声で言った。

「マイさんにとって霧月博士は、かけがえのない存在だったってことよ」

「かけがえのない... 存在...」

—— だから...？

「分からない？ マイさんはお父さんを本当に愛していたの。互いを高めあえる研究者として、互いに尊敬しあい、やがて同じ夢を共有することで、互いに離れられない存在になっていた」

—— それはつまり…。

「ちょっと待てよ、まさか父さんがそんな…」

「お父さんは立派な科学者だったから、そんなことをする筈がない？ 真面目で優しい人だったから、お母さんやあなたを裏切るような真似をする筈がない？」

「当たり前だろう。百歩譲って、マイさんが父さんを好きだったんだとしても、父さんがそんなことって…ありえないだろうが。何を根拠したら、そんなふざけた発想が出て来るんだよ」

「根拠ならあるわよ… この私っていう。私はマイさんの実の娘なんだから」

「…はあ？ …何…言ってるんだよ… お前はっ。お前は生まれた時から、俺の妹だろうが…」

「事故で亡くなった友人の子供。お父さんはね、お母さんにはそう言って… 嘘を付いて、私を手元に引き取ったのよ…」

上ずったような声で叩きつけるようなユノの物言いは、どこか不快な響きに包まれて、セイヤの心はそれを受け取ることを拒む。

「…馬鹿なこと言うなっ」

「私だって、最初に知った時はありえないって思ったわよっ」

叩きつけた強い言葉に負けにくいぐらいの勢いで叩き返された言葉は、セイヤの心に容赦のない楔を打ち込んだ。

「私だってっ… こんなこと、信じたくなかったもの。でも、真実を否定したくて、調べれば調べるほど、それが真実なんだって現実を突きつけられて…逃げ場がなくなっていく怖さが、お兄ちゃんには分かる？」

ユノの瞳に苦悩に彩られた涙が浮かぶ。そして自分もそれを、真実として受け入れなければならないのだと知って、セイヤは呆然とする。

「…そんな… どうしてだよ… 父さんと母さんはあんなに仲が良かったじゃないか…」

「…そうね。子供にそう思いこませる程度には、仲が良かったわね。全然愛してなかったっていう訳でもないみたいだし。お兄ちゃんのお母さんは、お父さんに研究を止めさせたがっていたのよ。その研究は間違いなく違法なものだったから、そんなことを続けていけば、いつか家族を壊してしまうんじゃないかって… ずっと怯えていた。だから、お父さんの研究とか、お父さんがその先に描いている夢とか… そんなものを、彼女はどうしても理解できず、受け入れることができなかった。マイさんは、そんなお父さんの理解者になり、夢の共有者になって、霧月シンゴという存在を精神的に支えた… そういうことよ」

「……」

飲み込むには苦すぎる真実がそこにあった。

「…随分ね、悩んだのよ。どうしてって。私は、どうして門倉ミアとして、ここにいるんだろうって… マイさんのしたことは、身勝手すぎるでしょう？ …それで、あんな大惨事を招いて… とうてい許せないって。そしたら間が悪くっていいのかなあ… ちょうどそんな時に、お兄ちゃんのことを知らされて… こんな罪の証みたいなの私なんかじゃ、会えないじゃない？ …そう思ったら、すごく悲しくて、腹立たしくて。だから私、本当のことが分かった後も、最後までマイさんのことを、お母さん… って呼べなかった…」

—— 私はユノよ。ミアなんかじゃない…… 霧月の父と母を殺したあなたの娘なんかじゃないのよ。

心を病んでいた相手に、そんな酷いことも平気で言えた。それで悲しそうな顔をする彼女に、自分は嫌悪感さえ抱いたのだ。

「愛していたの… あなたには、まだ分からないかもしれないけれど… 私はあなたのお父さんを、本当に愛していたの…」

「だからって、何をしても許されるとでも言いたいのか？」

「…許されるなんて思っていないわ…」

「だったら、罪を償いなさいよ」

「…そうね…… その通りね。ごめんなさいね… あなたを巻きこんで。悪いのは全部私だから、あなたは何も悪くない」

から。あなたが後ろめたく思うことなんて、これっぽっちもないのよ..... みんな、私が全部持って行くから。本当にごめんね。そしてありがとう... そばにいてくれて... ミアでいてくれて。もう自由になっていいからね... ユノに戻っていいからね」

——それが、彼女が遺した最後の言葉だった。それから程なく、彼女は自ら命を絶った。

その知らせを聞いた時に自分は、それだけのことをしたのだから、それで当然だと自分に言い聞かせた。本当はもう、その時から心のどこかで後悔していたのかも知れない。でも、それを認めれば自分は、償いようのない罪を抱え込むことになる。ひとりの人間を死に追いやったという罪は、向き合うにはあまりに大きく重たいものだった。だから、罪の意識を感じながらも目を背けたのだ。自分はもう、霧月ユノという存在を失うことで、その償いをしているのだから... と。

「...でも... 私が許してあげていたら、きっと... マイさんは死なずに済んだんだよね...」

「...ユノ」

「私、酷い娘だったよね... マイさんのこと責める資格なんてないよね... 私だって自分のことしか考えていなかったのに...」

「そんなことないぞ、ユノ。お前は最後まで、マイさんの側にいてあげたんだろう。そして今でも、門倉ミアでいるんじゃないか」

「.....」

「.....それで... 充分だろう」

「お兄ちゃん...」

―― 最後の言葉は「ありがとう」だったのだから。

「お前がそばにいて、きっとマイさんは幸せだった」

「そう... かな...」

「俺が言うんだから、そうに決まってる」

「...うん」

ふと、心地が良くてほっとするような感覚がに包まれる。言いようもなく懐かしい――

―― そう...

何の根拠もないのに、幼い頃から、この兄がこうと言えば、様々な問題はそれで解決した。

自分にとって、絶大な安心感を与えてくれる存在。

それが、霧月セイヤ... ユノのお兄ちゃんなのだ。

「それからっ。お前がどう思っていようが、名前がどう変わろうが、世界がどう変わろうが、お前が俺の妹だってことは、絶対変わらないぞ。誰が何と言おうと、お前は俺の妹、ユノなんだからな」

「...うん」

お兄ちゃんがそう言えば、それはもう確定事項。そう思ったら、何だかおかしくて自然に笑みが零れた。そんなユノの様子に、セイヤも安堵の笑みを浮かべている。

とそこへ、パンパンパンとわざとらしい拍手の音がする。

「流石です、お兄様」

―― やっべ。この人の存在を忘れてたし。

「だ〜っ、だから、お兄様はまだ確定じゃないでしょうがっ」

「いや、お相手がセイヤくんの妹さんだって言うなら、もう僕に断る理由なんてないじゃないですかあ〜」

キセキが幸せいっぱいに見切った顔で告げる。

「え、あ... そか。お見合いしに来てたんでしたね、私たち」

ようやくユノに見合いの相手だと認識してもらって、キセキは満面の笑みと共にその手を取る。

「そうっ。僕が四宮キセキです、よろしく」

「あ、はい... 一応、門倉ミアです。よろしく申し上げます」

「んじゃ、そういうことで、お兄様、若い二人はさっそくデートと参りますので」

「え、いや、ちょっ、ま...」

引き止める間もなく、キセキはユノの手を取ったまま、軽やかに歩き去って行く。時折ふたり視線を合わせながら、笑顔を交わしながら、それはとてもいい感じ...

「って、おいっ！ いきなり手え繋ぐとあって、ナシですから〜っ」

そんなお兄ちゃんの言い分は、当然のことながら無視された。

—— お見合いってというのは、気に入らなかったら、断って構わないんだよね？ ...気に入らなかったら...

五年ぶりの妹は、兄の目から見ても随分とかわいくなっていて、もうすっかり大人びた感じで、あんな風に彼氏と並んで歩いている、何の違和感もないって ——

もの凄い寂寞感が胸に押し寄せた。

—— ちくしょう、なんか泣きそうなんだけど。

「セイヤくん...」

「ふえ？」

呼ばれて振り返るとそこには。

「ナナミさんっ？ え、なんでっ??」

「父のお見舞い。で、今日が例のお見合いだって言うから、気になって様子見に来ちゃった... あら、何だか... キセキさん、嫌がっていた割には、いい雰囲気...」

「そんなこと、ありませんからっ」

「え？」

セイヤの不自然なまでの嫌がりように、ナナミが何かを納得したように、ああ、と笑みを漏らしながら向かいの席に座る。

「...もしかして、そういうこと？」

ナナミが言うと、セイヤが慥然とした顔になって、拗ねたようにテーブルに突っ伏した。

「仕様がなのお兄ちゃんのこと」

そんな言葉と一緒に、頭にふわりした手の感触が来て、そのまま子供のように頭をなでなでされる。

―― ああ、やっぱり。

子供扱いなんだよな、と思う。

これはこれで... こういうのも嬉しくない訳ではないけれど...。何だか色々ありすぎて... きっと疲れているのだろう、自分は。そんな言い訳をしながら、ナナミの手の感触の心地よさに、なすがままにされていると、

「...何か、あった？」

と、ナナミの穏やかな声が、そっと耳元に届く。

刹那、硬直していた気持ちがふっと緩んで、いきなり涙が込み上げた。経験のないことに、セイヤは慌てながら涙を押し込める。そして、一呼吸置いて体裁を繕ってから顔を上げる。

「...いえ。大丈夫です」

「...そう？ なら... いいけど...」

「あのっ...」

何だかもう、やけになっていた。落ち込みついでに、不合格の通知も貰ってしまえと思う。

「今ここで、あの返事、してもらっても構いませんか？」

そう告げると、ナナミが少し困ったように瞳を伏せた。

「.....」

―― ハイ、即答OKじゃないのはもう確定... みたいな？

湖面を渡って来た清涼な風が、ナナミの髪を揺らす。と、辺りにふわりと花の香りが立って、セイヤのいたたまれなさに拍車を掛ける。

―― スミマセン、もう、ダメならダメで、さっさと楽に...

「...セイヤくんは...」

「え？ あ、はい？」

ナナミの真剣な目に、自分の姿が映っている。

「私と居て、窮屈じゃない？」

「は？ ...いや、そんなことは全然ないっていうか... 何でそんなこと...」

「何ていうかねえ... セイヤくんて、よそよそしいのよ。距離を感じるの。言葉遣いだって、いつも敬語でしょう？」

「え... いやだって、そこは一応先輩な訳ですから... 敬語とか、普通使うでしょう」

「うう～ん... 違うな。言葉の問題じゃないかも。同じ先輩でも、マドカさんとかキセキさんとかだと、もっとこう打ち解けてるっていうか... 冗談いたりツッコミ入れたりとか、困った時には相談なんかもしたりして... そういうの、私には全然ないわよね？」

―― だって、それは。

「私、自分でもね、変に堅くて融通利かないトコがあるのは自覚してるの。だから、話しづらいのかなって思うけど..... でも何だか私のトコだけいつも遠慮されてるみたいで。そういうの悔しいっていうか... 私だけ仲間外れでズルイっていうか...」

「そんなの... 当たり前じゃないですかっ！ ナナミさんは特別なんですからっ！」

「え...」

「男は好きな子の前で無様な姿なんか見せたくないんですよ。見栄だって張りたいんですっ、分かりますか？」

ナナミがセイヤの勢いに圧倒されたように目を見開いている。ややあって、その口からふふっと笑みが零れた。

「...そう... なんだ」

「そうなんです」

懽然として応じるセイヤに、申し訳なさそうな顔をしながらも、ナナミの笑いは収まらない。

「...ひどいですよ... ナナミ先輩は...」

「だって、セイヤくん、私なんかより、キセキさんとかという時の方が、楽しそうなんだもの... そういうの端で見て

ると、もう、ズルイなあって思って...」

「...それって、ヤキモチなんじゃないですか？」

「うん、そうかも」

半ば投げやりに言った言葉に、予想外に肯定の言葉が返って来た。

「...ナナミさん？」

「私の名前は、ナ、ナ、ミ。たった今から、さん付けも先輩も禁止」

顔の前に指でバツを作って、とびきりの笑顔でそうダメ出しをされた。

そう。たった今――

ココに世界で一番きれいな花が咲いた。

【 ソラに花の咲く午後 完 】